大 浦 古 墳 群

第２節　大浦古墳群

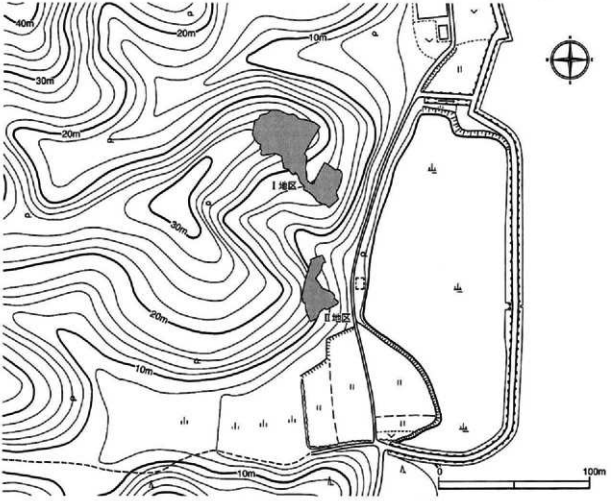
大浦古墳群は、御伊勢山と相原山（標高98.7m）の間にある小高い山（標高51.8m）から、南東に派生する尾根上に位置する。調査を実施した12基を含め、確認されたものだけでも、計21基の古墳からなる古墳群である。

当古墳群は、調査を行った２つの尾根が交わる標高30m付近まで尾根上に古墳が点在しており、それより高位については、古墳は確認できない。これは、明らかに、当時眼下に広がっていた山口湾を見下ろせる位置に限定して古墳を築造したことを示すものである。

Ⅰ地区の下位側は約20年前まで畑として利用されており、墳丘はおろか、石室の一部も失われていた。Ⅱ地区の下位側（東側から南東斜面にかけて）には、干拓の際に削り取られたと思われる落差約10mの大きな窪地があり、墳丘の一部が消失していた。

当古墳群も浦辺古墳群同様、抜き取られた天井石等の石材が周辺には確認できず、石材利用目的に古墳が破壊された可能性が高い。

また、周辺には、地山の岩盤（花崗岩）が露呈している箇所が数カ所認められ、石を切り出した跡が残っている。当古墳群の石室を構成する石材も花崗岩が中心であることから、これを利用したものと思われる。



第16図　大浦古墳群調査区設定図　（Ｓ＝1/2500）

1．1号墳

（1）調査前の状況

1号墳はⅠ地区の西北端に位置し、標高は約30mである。東に2号墳、南東に3号墳が隣接する。調査前は、雑木林でわずかな高まりが認められ、石材の一部が露呈していた。

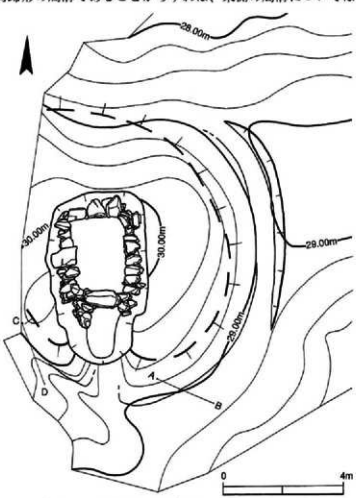
（2）墳丘

墳丘は、墳丘頂部及び北側については後世の削平により大部分が消失していた。また、西側の約1/3は調査区外となるため確認できなかった。比較的遺存状況の良好な東側のトレンチ調査による土層観察から、直径11.3mの円墳と思われる。

また、東に隣接する2号墳との関係は、土層観察から2号墳の周溝を掘り込んで1号墳の周溝を構築しており、2号墳に比べ1号墳が後に築造されたことが明らかになった。

墳丘は尾根頂上の比較的平坦な場所に築かれ、石室構築前の地山整形はみられない。また、後世の削平により墳丘の盛土はほとんど流失しており、かろうじて東側に1層確認されたのみである。ただ、墓坑を古墳築造時の地表面より、比較的深く掘り込んでいることから、石室上部の墳丘は、あまり高くなかったと推定される。

周溝は、後世の削平と西側については調査区との関係で検出できなかったが、斜面下位側の東側にも周溝が検出されたことから、古墳を巡っていた可能性もある。斜面に作られた他の古墳がほとんど馬蹄形の周溝であることからすれば、東側の周溝については、1号墳築造当時2号墳が既存していた関係から、2号墳との明確な区別を付けるため付設した可能性もある。残存する東側の周溝は幅2.0m、深さ0.3mである。また、南西側では幅0.9m、深さ0.5mを測る。ともに断面形は、皿状。



第17図　1号墳墳丘遺存状況図　（S＝1/125）

（3）石室

内部主体は、ほぼ南に開口する両袖式の竪穴系横口式石室である。長方形の玄室に短い羨道が付設した形態で、主軸はN3°Wを示す。

石室に天井石はすでになく、石室内には流入した土砂と崩落した石材が充満していた。

墓坑は、古墳築造時の地表面より掘り込んであり、南北方向に約4.2m、東西に約3.3m、深さ1.2～1.4mを測る。平面形は、ほぼ長方形で、その南側に1.8mの墓道が続く。

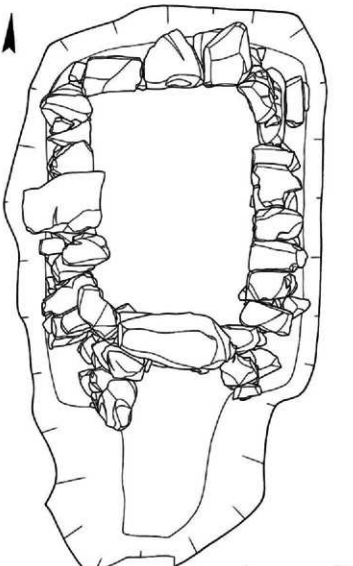
玄室　玄室の平面形は若干変形した長方形で、右壁側2.7m、左壁側2.5m、玄室幅1.8mを測る。

奥壁は地山を若干掘り窪め、大小２石の板石を横長に用い腰石としている。その上部は、断面が台形の石材を内面がやや内傾するように小口積みにしている。残存高は、約1.2mである。

側壁は地山面を掘り窪めることなく、右壁の奥壁側に縦長に使用している以外は、板石を横長に用い、右壁側に３石、左壁側に２石の石材で腰石としている。その上部は、扁平な石材を丁寧に小口に積み重ねており、横目地が通っている。左右側壁とも残存高は、約1.1mである。

玄門は、右壁に１石、左壁に２石、約0.9mの石材を縦長に用い、その上部に水平を保つために大きさの違う石材を詰め袖石としている。玄門幅は0.6mで、間に60×20cmの平たい石を置き框石としている。

その上部に、124×92×56cmの石材をかけ、楣石としている。石室を構成する石材は、主に花崗岩である。



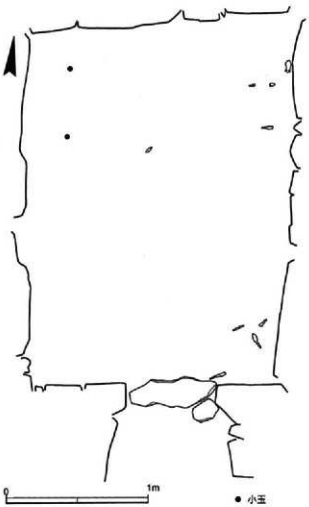
第18図　１号墳石室平面図　（S＝1/40）

床面は、地山上面に目の粗い砂を一面に敷き詰めており、敷石は認められなかった。

羨道　羨道は大小様々な石材を丁寧に積み上げており、右壁で高さ0.9m、長さ0.4m、左壁で高さ1.2m、長さ0.8mを測る。床面は地山に明赤褐色土を貼っており、玄室床面より12cm高い。羨道の天井石の有無については不明である。

墓道　羨道より約10°の角度で開口部に向かって上がる。

閉塞施設　閉塞石の遺存状況は良好で、框石の上に１石横積みし、その上部に60×60cmの板石を外から袖石にもたせかけ、さらに楣石との隙間を埋めるため50×46cmの板石を覆い、土砂で裏込めしている。



第19図　1号墳石室内遺物出土状況図　（S＝3/80）

（4）遺物

出土状況　玄室内からは、砂層上面の右壁側から鉄鏃、刀子などの鉄製品が、左壁の奥壁側の砂層中からガラス小玉がそれぞれ出土した。

開口部西側の周溝内からは、大量の土器と馬具（轡）が出土した。そのほとんどが置かれた状態で出土しており完形品も多く、祭祀跡と思われる。特に、馬具は倒れた土師器の高坏に載った状態で出土しており、また坏蓋の上に坏身をそれぞれ内面を上にして重ねた状態で出土していることなど、当時の供献のあり方をうかがう上で、貴重な資料といえる。

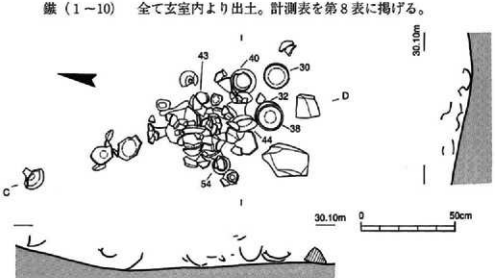
一方、東側の周溝からも大量の土器片が出土しているが、こちらは西側と違い、完形品がなく、すべてが割られた状態で出土している。

また、墓道の開口部付近から、短頸壺とその蓋と思われる坏蓋が置かれた状態で出土した。その下には朱が残っていたが、意図は不明である。

出土遺物

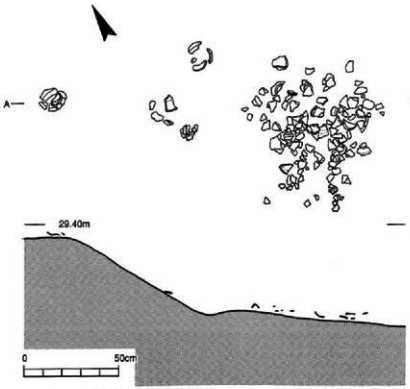
鉄製品（第22図　図版19）

鏃（1～10）　全て玄室内より出土。計測表を第8表に掲げる。

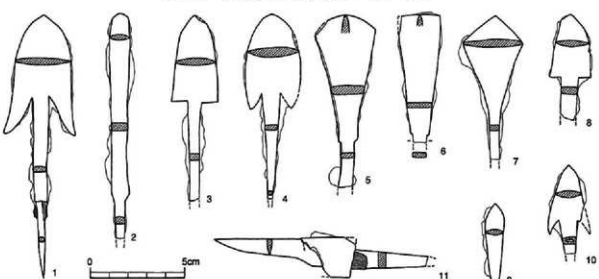


第20図　1号墳遺物出土状況図①　（S＝1/20）

刀子（11）
玄室内より出土。茎端部を欠損するがほぼ完形である。また、柄口に責金具が残り、その内部から茎部にかけて木質が残る。残存長11.5cm、身部長5.2cm、身の厚さ0.3cm、棟関。



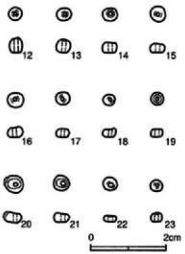
第21図　1号墳遺物出土状況図②　(S＝1/20)



第22図　1号墳出土鉄製品実測図　(S＝1/2)

第8表　1号墳出土鉄鏃計測表　　(　)は残存値　単位はcm

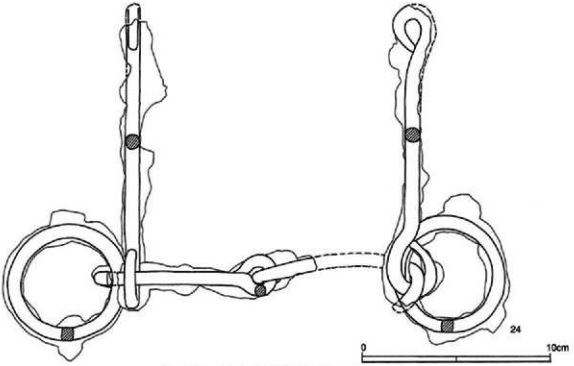
挿図	図版	出土位置	全長	身部		関鏃部		茎部		備考
				長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	
22-1	19-1	玄室内	13.9	4.4	3.8	5.6	0.7	4.0	0.5	腸抉柳葉式　完形　木質付着
22-2	19-2	玄室内	(11.9)	3.4	1.1	6.6	1.0	(1.9)	0.5	鏃前式　茎部欠損
22-3	19-3	玄室内	(9.9)	4.6	2.4	(5.3)	0.6	—	—	長三角形式　茎部欠損
22-4	19-4	玄室内	(9.8)	5.0	3.0	5.6	0.8	—	—	腸抉柳葉式　茎部欠損
22-5	19-5	玄室内	(9.2)	6.9	3.2	(2.3)	0.7	—	—	方頭式　茎部欠損
22-6	19-6	玄室内	(6.9)	6.9	2.2	0.4	0.7	—	—	方頭式　茎部欠損
22-7	19-7	玄室内	(7.7)	5.3	3.2	(2.4)	0.5	—	—	圭頭式　茎部欠損
22-8	19-8	玄室内	(5.6)	3.3	1.8	(2.3)	0.9	—	—	長三角形式　茎部欠損
22-9	19-9	玄室内	(4.1)	4.1	1.0	—	—	—	—	鏃前式　鏃被部・茎部欠損
22-10	19-10	玄室内	(4.7)	3.7	1.4	(1.8)	0.7	—	—	腸抉柳葉式　茎部欠損



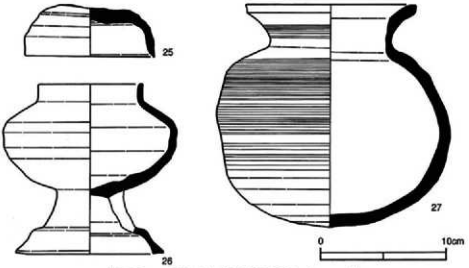
第23図　1号墳出土装身具実測図　（S＝1/1）

第9表　1号墳出土小玉計測表

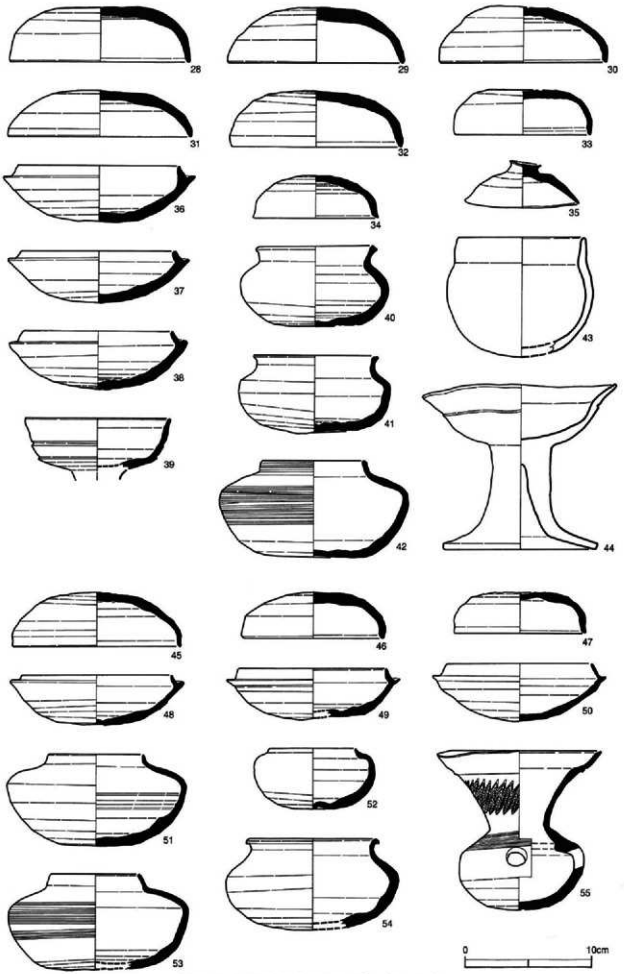
挿　図	図版	直径mm	孔径mm	厚さmm	材　質	色　調
23-12	19-12	3.6	1.0	3.8	ガラス	黄色
23-13	19-13	3.9	1.0	3.1	ガラス	黄色
23-14	19-14	4.0	1.2	2.7	ガラス	青緑色
23-15	19-15	4.2	1.1	2.3	ガラス	黄色
23-16	19-16	4.2	1.1	2.9	ガラス	スカイブルー
23-17	19-17	3.7	1.2	2.3	ガラス	黄色
23-18	19-18	3.3	1.1	2.2	ガラス	黄色
23-19	19-19	3.5	1.2	2.2	ガラス	コバルトブルー
23-20	19-20	4.4	0.9	2.6	ガラス	黄色
23-21	19-21	4.1	1.0	2.2	ガラス	ライトブルー
23-22	19-22	3.7	1.4	1.6	ガラス	黄色
23-23	19-23	3.5	1.0	2.4	ガラス	青緑色



第24図　1号墳出土馬具実測図　（S＝1/2）



第25図　1号墳出土土器実測図①　（S＝1/3）



第26図　1号墳出土土器実測図②　(S＝1/3)

第10表　1号墳出土土器観察表①

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
25-25	壺 須恵器	墳丘上 (南)	口径　10.5 器高　3.8 ロクロ右回転。	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密 含砂粒少	良好	外 暗灰色 内 灰色	焼きひずみ。
25-26	脚付短頸壺 須恵器	墳丘上 (南)	口径　8.2 器高　13.8 体部最大径　13.6 脚裾部径　11.6	壺部内面底部は静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ回転不明。 脚部に1段の透かし有り。	密	良好	外 暗緑灰色 内 暗灰色	
25-27	壺 須恵器	墳丘上 (南)	口径　13.4 器高　12.7 体部最大径　18.4	外面底部は、回転ヘラケズリ。外面中位から頸部にかけて、タタキ後カキメ。他は、回転ナデ。	密	良好	外 灰色 内 灰色	
26-28	坏　蓋 須恵器	周濠内 (南西)	口径　13.9 器高　4.4 ロクロ右回転。	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密 含砂粒少	不良	外 灰色 内 灰白色	
26-29	坏　蓋 須恵器	周濠内 (南西)	口径　13.9 器高　4.4 ロクロ右回転。	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
26-30	坏　蓋 須恵器	周濠内 (南西)	口径　13.2 器高　4.4	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	やや良	外 灰白色 内 灰白色	
26-31	坏　蓋 須恵器	周濠内 (南西)	口径　14.2 器高　3.7 ロクロ右回転。	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
26-32	坏　蓋 須恵器	周濠内 (南西)	口径　13.4 器高　4.4 ロクロ右回転。	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
26-33	坏　蓋 須恵器	周濠内 (南西)	口径　10.6 器高　3.4	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。外面に微頭圧痕残る。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
26-34	坏　蓋 須恵器	墓道	口径　9.8 器高　3.4	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
26-35	つまみ付蓋 須恵器	周濠内 (南西)	つまみ径　2.6 口径　9.0 器高　3.7 ロクロ右回転。つまみは貼り付け。	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
26-36	坏　身 須恵器	周濠内 (南西)	口径　12.5 受部径　15.0 器高　(4.5) ロクロ右回転。	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密 含砂粒少	不良	外 灰白色 内 灰白色	
26-37	坏　身 須恵器	周濠内 (南西)	口径　12.0 受部径　14.2 器高　4.0 ロクロ右回転。	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
26-38	坏　身 須恵器	周濠内 (南西)	口径　11.7 受部径　14.0 器高　(4.6) ロクロ右回転。	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
26-39	高　坏 須恵器	周濠内 (南西)	口径　11.3	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、器面剥落につき調整不明。ロクロ右回転。	密	やや良	外 灰色 内 灰色	内面底部に鉄付着。
26-40	壺蓋鏡 須恵器	周濠内 (南西)	口径　8.9 器高　6.4 体部最大径　11.7 ロクロ右回転。	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ。他は、回転ナデ。	密 含砂粒少	良好	外 オリーブ灰色 内 オリーブ灰色	
26-41	壺蓋鏡 須恵器	周濠内 (南西)	口径　9.9 器高　6.1 ロクロ右回転。 体部最大径　12.0	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰色	体部外面に鉄付着。
26-42	短頸壺 須恵器	墓道	口径　8.1 器高　7.6 体部最大径　15.0 内面底部に微頭圧痕残る。	外面底部は、回転ヘラケズリ。外面中位から口縁にかけてはカキメ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰褐色 内 青灰色	
26-43	短頸壺 土師器	周濠内 (南西)	口径　9.8 器高　9.4 体部最大径　11.6	器面剥落につき調整不明。	密	不良	外 橙色 内 橙色	
26-44	高　坏 土師器	周濠内 (南西)	口径　15.3 器高　13.0 脚裾部径　12.2	脚筒部内面はヘラケズリ。外面はヘラケズリのちミガキ。脚裾内面はナデ。他は、ミガキ。	密 含砂粒少	やや良	外 橙色 内 橙色	
26-45	坏　蓋 須恵器	周濠内 (東)	口径　13.0 器高　4.4 ロクロ右回転。	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密 含砂粒少	不良	外 灰白色 内 灰白色	
26-46	坏　蓋 須恵器	周濠内 (東)	口径　11.0 器高　3.7 ロクロ右回転。	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密 含砂粒少	良好	外 明青灰色 内 明青灰色	
26-47	坏　蓋 須恵器	周濠内 (東)	口径　5.2 器高　3.3 ロクロ右回転。	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	
26-48	坏　身 須恵器	周濠内 (東)	口径　11.7 受部径　13.6 器高　4.0 ロクロ右回転。	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	

第11表　1号墳出土土器観察表②

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
26-49	坏身 須恵器	周溝内 (東)	口径 11.7 受部径 13.9 器高 4.0	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	不良	外 オリーブ灰色 内 灰褐色	
26-50	坏身 須恵器	周溝内 (東)	口径 11.4 受部径 13.8 器高 4.0	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。ロクロ左回転。 内面に「+」のヘラ記号有り。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰色	焼きひずみ有り。
26-51	短頸壺 須恵器	周溝内 (東)	口径 7.4 器高 7.2 体部最大径 14.1	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 オリーブ灰色	外面底部に粘土塊付着。
26-52	短頸壺 須恵器	周溝内 (東)	口径 6.8 器高 4.8 体部最大径 9.6	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 オリーブ灰色 内 オリーブ灰色	内面に焼きぶくれあり。
26-53	短頸壺 須恵器	周溝内 (東)	口径 6.9 器高 (7.5) 体部最大径 14.1	外面底部は、回転ヘラケズリ。体部外面上位は、カキメ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 褐灰色 内 赤灰色	
26-54	短頸壺 須恵器	周溝内 (東)	口径 9.9 器高 7.2 体部最大径 13.7	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰色	
26-55	甕 須恵器	周溝内 (東)	口径 12.9 器高 12.6 体部最大径 9.8	外面底部は、回転ヘラケズリ。体部外面上位は、カキメ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。 頸部に波状文有り。	密 含砂粒少	良好	外 オリーブ灰色 内 灰色	

装身具（第23図　図版19）

ガラス製小玉（12～23）　全て玄室内から出土。計測表は第９表に掲げる。

馬具（第24図　図版19）

轡（24）　南西部周溝内より出土。環状の鏡板を持つ円環轡である。右側の鏡板で直径6.2cmを測る。引手と銜は直接連結され、銜の端環に鏡板と引手を同時に連結している。右側の引手長は15.6cmである。銜は中央で連結されており、全長17.5cmである。

土器（第25・26図　図版19・20）

26は脚付短頸壺。口頸部は短くやや外傾して口縁部に至る。端部は丸い。体部は内湾気味に立ち上がり内傾して口頸部に至る。最大径は上位2/3に位置する。脚部は、外下方に開き下位で水平方向に短く伸び、さらに屈曲して段をなし外下方に開いて端部に至る。脚部に長方形の透かしが穿たれているが、欠損のため数は不明。

32の坏蓋の上に38の坏身が重なって出土。

35はつまみ付きの蓋。全体に焼きひずみによる変形がみられる。返りはない。

44は土師器の高坏。杯部は内湾気味に立ち上がり、外反して口縁部に至る。端部は丸い。脚部はほぼ垂直に下方に伸び、大きく外反して端部に至る。馬具を乗せた状態で出土。

55は甕。口頸部は外上方に開き、上位で段を有して口縁端部に至る。端部はやや鋭い。頸部中位に櫛描波状文が巡る。底部は平坦に近く内湾気味に外上方に開いた後、内傾して頸部に至る。最大径は体部上位2/3に位置する。

計測表は第10・11表に掲げる。

（豊島）

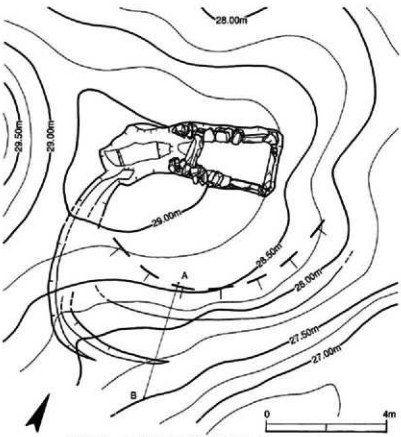
2．2号墳

（1）調査前の状況

2号墳はⅠ地区の西側に位置し、標高は29mである。西に1号墳、南に3号墳、南東に4号墳が隣接する。調査前は、雑木林で尾根上に平坦部が認められたが、墳頂部の陥没や石材の露呈も認められなかった。当古墳は1次調査の際、トレンチ調査により確認された。

（2）墳丘

墳丘は、後世の削平のため大部分が消失していた。特に尾根頂部であるため、土砂の流失が激しく、西側では地山が露呈した部分もある。



第27図　2号墳墳丘遺存状況図　（S＝1/125）

南東側に、古墳築造の際の地山整形の跡がわずかに残っており、その傾斜変換点から推測すると直径10.6mの円墳であったと思われる。

周溝は確認されなかった。

（3）石室

内部主体は、ほぼ西南西に開口する両袖式の竪穴系横口式石室である。羽子板状の玄室に短い羨道を付設した形状で、主軸はN71°Eを示す。

石室の天井石は失われており、石室内は流入した土砂と崩落した石材で充満していた。

墓坑は、削平により古墳築造時の地表面の有無は確認できないが、現状では、地山より約1.4m掘り込んでおり、形状は東西方向に3.2m、南北方向に2.0mの長方形である。それに玄室に入るための墓道が付設されている。

玄室　玄室の平面形は奥壁側が広い羽子板形で、玄室長2.4m、玄室幅は奥壁側1.6m、玄門側1.1mを測る。

奥壁は地山上に、126×84cmの石材を横長に、40×87cmの石材を縦長に用い腰石としている。特に前述の石材は表面が丁寧に整形されており、形状もほぼ長方形の板石である。それに対して後述の石材は整形がほとんどなされておらず、墓坑いっぱいに石室が構築されていることから、奥壁の幅を調節するために置かれたと思われる。

側壁は、左右とも奥壁側に大型の石材を使用し、左壁の玄門側の1石を除いて他は横長に用いている。それぞれ3石の板石を用いて、腰石としている。その上部には、塊石を小口に積み上げており、残存高は、奥壁側で0.9m、右壁側で0.9m、左壁側で1.1mを測る。

玄門は、幅0.5m、高さ0.7mである。

右壁側に85cm、左壁側に72cmの石材を縦長に用い、その上部に水平を保つため、それぞれ右壁側に1石、左壁側に2石の扁平な石材を置き、袖石としている。間に48×16cmの石材を用い框石とし、袖石の上部に、108×20×40cmの石材をかけ、楣石としている。

石室を構成する石材は、当古墳群の中で、唯一玢岩を使用している。

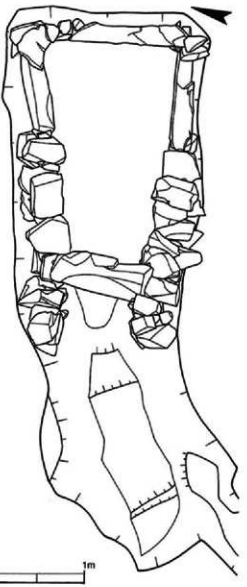
床面は、地山上面に粗い砂を一面敷き詰めており、敷石は認められなかった。

羨道　羨道は大小様々な塊石を乱雑に積み上げており、左右とも高さ約1.0m、長さ約0.8mを測る。

床面には地山上面に砂を敷き、玄室床面より約12cm高くしている。

墓道　墓道は、主軸に対して約15°南に、玄門より約26°の角度で開口部に向かって上がっている。その後、わずかな前庭部を設け、南に伸び、約5.6mの所で大きく東に回り、墳丘裾部に沿うように伸びて自然地形に消える。

閉塞施設　閉塞石の遺存状況は良好で、框石の上部に1石横積みにし、その外側から3石の板石を隙間を埋めるように合わせ、袖石にもたせかけ閉塞をしている。さらに、塊石と土砂で裏込めをしている。



第28図　2号墳石室平面図　（S＝1/40）

（4）遺物

出土状況　玄室内から耳環、管玉、小玉などの装身具が出土した。それらは、砂層の全体から出土しており、若干のレベル差もあり、古墳築造以後に攪乱をうけているものと思われる。

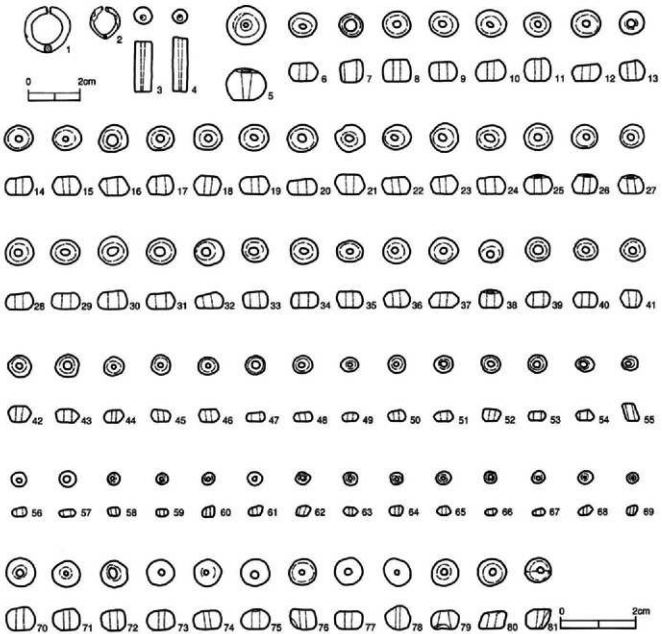
また、墳丘の南側からは、大きく2段に分かれて、大量の土器片が出土している。上段は2号墳の墳丘上に、下段は墳丘裾部付近に位置する。ただ、下段については他の古墳周辺から出土した土器片と同一個体となるものがあり、全てが当古墳の遺物であるとは言い難い。

第12表　2号墳出土耳環計測表

挿図	図版	外法径（cm） 長径・短径	内法径（cm） 長径・短径	断面径（cm） 長径・短径	突合部（cm） 幅	備　考
29- 1	21- 1	1.83×1.78	1.21×1.20	0.32×0.30	0.02	
29- 2	21- 2	1.25×1.20	0.96×0.86	0.96×0.86	0.10	

第13表　2号墳出土管玉計測表

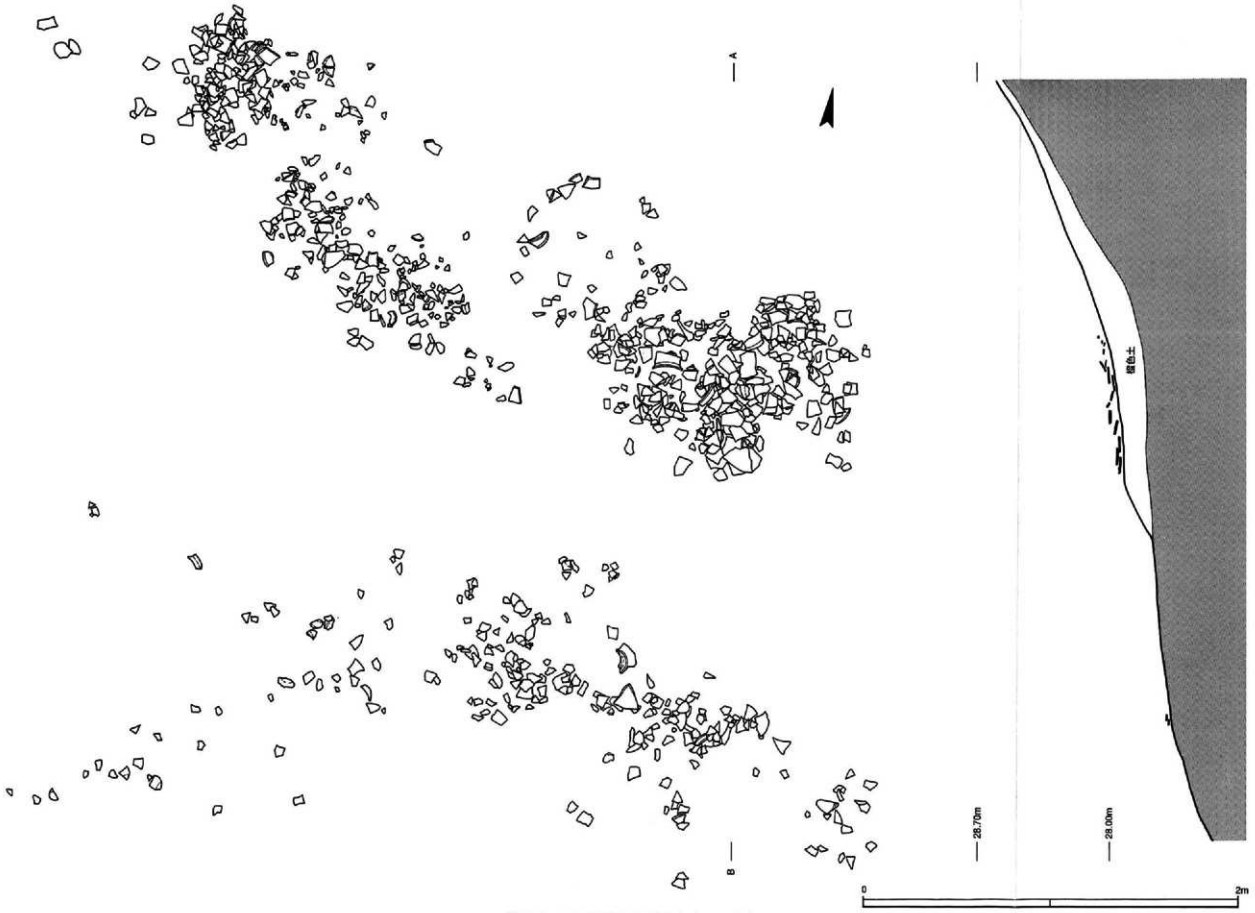
挿図	図版	長さ（mm）	直　径（mm）		孔　径（mm）		穿孔	色　調	材　質	備　考
			長径	短径	長径	短径				
29- 3	21	21.7	6.0	－	2.5	2.2	片面	濃緑色	碧玉	
29- 4	21	20.2	7.3	－	2.3	1.1	片面	濃緑色	碧玉	



第29図　2号墳出土装身具実測図　(S=2/3、S=1/1)

第14表　2号墳出土小玉計測表①

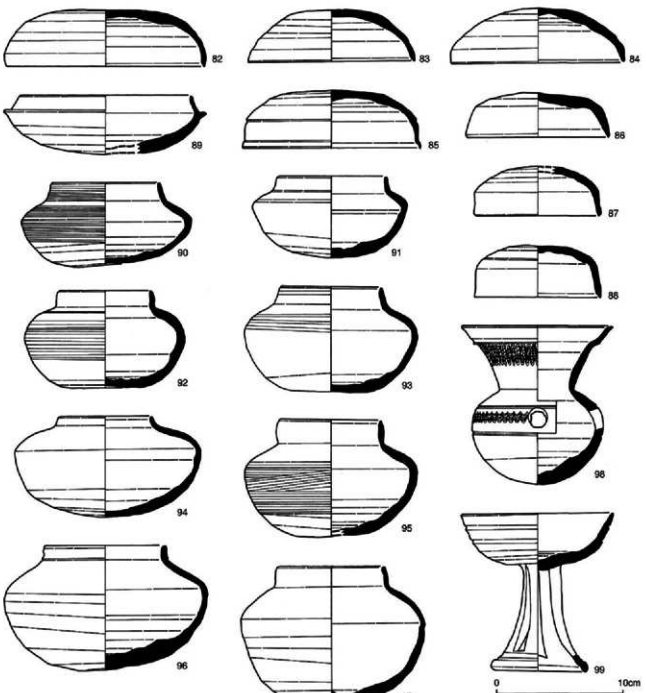
挿　図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材　質	色　調
29- 5	10.0	3.0	8.5	水　晶	透明
29- 6	7.3	2.0	4.8	ガラス	コバルトブルー
29- 7	6.2	3.4	5.8	ガラス	コバルトブルー
29- 8	7.3	2.1	5.7	ガラス	コバルトブルー
29- 9	7.5	2.2	5.1	ガラス	コバルトブルー
29-10	7.9	1.8	5.4	ガラス	コバルトブルー
29-11	6.9	1.8	5.9	ガラス	コバルトブルー
29-12	7.7	2.0	4.6	ガラス	黒
29-13	6.5	2.4	5.6	ガラス	コバルトブルー
29-14	7.4	1.8	5.1	ガラス	コバルトブルー
29-15	7.3	1.7	5.2	ガラス	コバルトブルー
29-16	8.0	3.0	5.0	ガラス	コバルトブルー
29-17	7.2	2.3	5.3	ガラス	コバルトブルー
29-18	7.5	2.0	5.0	ガラス	コバルトブルー
29-19	7.9	2.0	4.8	ガラス	コバルトブルー
29-20	7.8	2.4	4.2	ガラス	コバルトブルー
29-21	8.0	2.0	5.5	ガラス	コバルトブルー
29-22	7.6	2.0	4.6	ガラス	コバルトブルー
29-23	8.0	2.0	5.0	ガラス	コバルトブルー
29-24	7.5	3.0	4.7	ガラス	コバルトブルー
29-25	7.4	2.1	4.8	ガラス	コバルトブルー
29-26	6.7	1.8	4.9	ガラス	コバルトブルー
29-27	6.7	2.0	4.8	ガラス	コバルトブルー
29-28	7.5	2.2	4.5	ガラス	コバルトブルー
29-29	7.5	2.3	4.2	ガラス	コバルトブルー
29-30	7.6	3.0	4.6	ガラス	コバルトブルー
29-31	7.6	3.0	4.3	ガラス	コバルトブルー
29-32	7.6	2.5	4.4	ガラス	コバルトブルー
29-33	6.7	2.7	4.5	ガラス	コバルトブルー
29-34	7.3	2.7	4.2	ガラス	コバルトブルー
29-35	7.3	1.9	4.6	ガラス	コバルトブルー
29-36	7.3	2.0	4.6	ガラス	コバルトブルー
29-37	9.0	2.0	4.0	ガラス	コバルトブルー
29-38	6.3	2.2	4.6	ガラス	コバルトブルー
29-39	6.4	2.8	4.1	ガラス	スカイブルー
29-40	6.3	2.0	3.8	ガラス	コバルトブルー
29-41	6.5	2.2	5.0	ガラス	コバルトブルー
29-42	6.0	2.0	4.2	ガラス	コバルトブルー



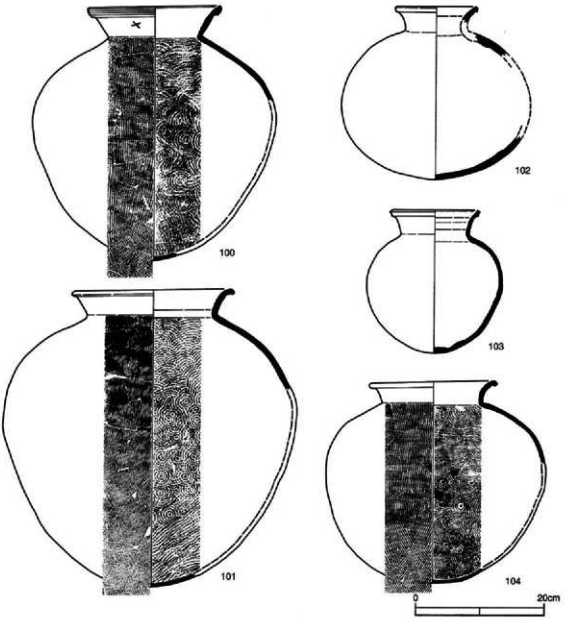
第30図　2号墳遺物出土状況図　（S＝1/20）

第15表　2号墳出土小玉計測表②

挿図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材質	色調
29-43	6.0	2.2	3.5	ガラス	コバルトブルー
29-44	5.0	1.3	3.5	ガラス	コバルトブルー
29-45	5.1	1.2	3.4	ガラス	イエローグリーン
29-46	5.3	1.5	3.4	ガラス	コバルトブルー
29-47	5.1	2.2	2.5	ガラス	コバルトブルー
29-48	5.0	1.8	2.6	ガラス	コバルトブルー
29-49	4.5	1.4	2.3	ガラス	スカイブルー
29-50	4.7	1.7	2.9	ガラス	コバルトブルー
29-51	5.0	1.8	2.7	ガラス	スカイブルー
29-52	5.1	1.6	3.4	ガラス	コバルトブルー
29-53	5.0	2.0	2.6	ガラス	コバルトブルー
29-54	4.8	1.9	3.0	ガラス	青緑色
29-55	4.2	1.8	4.6	ガラス	スカイブルー
29-56	4.1	1.8	2.5	ガラス	スカイブルー
29-57	4.5	2.0	2.0	ガラス	スカイブルー
29-58	3.4	1.2	2.5	ガラス	青緑色
29-59	3.2	1.2	1.8	ガラス	青緑色
29-60	3.4	1.3	2.7	ガラス	青緑色
29-61	3.9	1.2	2.6	ガラス	濃緑色
29-62	4.1	1.4	2.7	ガラス	濃緑色
29-63	4.0	1.1	2.4	ガラス	濃緑色
29-64	3.6	1.0	2.7	ガラス	濃緑色
29-65	4.2	1.0	2.5	ガラス	濃緑色
29-66	3.7	1.4	1.9	ガラス	濃緑色
29-67	3.5	1.3	1.8	ガラス	濃緑色
29-68	4.0	1.0	2.8	ガラス	スカイブルー
29-69	3.3	1.0	2.5	ガラス	濃緑色
29-70	7.5	2.0	6.1	土	黒褐色
29-71	7.3	1.5	5.6	土	黒褐色
29-72	7.4	2.2	5.7	土	黒褐色
29-73	7.4	1.7	5.3	土	黒褐色
29-74	7.3	1.6	5.8	土	黒褐色
29-75	7.6	2.0	5.3	土	黒褐色
29-76	7.0	1.6	5.1	土	黒褐色
29-77	7.3	1.8	4.8	土	黒褐色
29-78	7.1	1.2	6.1	土	黒褐色
29-79	7.1	4.0	4.9	土	黒褐色
29-80	7.4	2.0	4.6	土	黒褐色
29-81	6.9	1.8	5.1	土	黒褐色



第31図　2号墳出土土器実測図①　(S＝1/3)



第32図　2号墳出土土器実測図②　(S＝1/6)

しかし、上段については、大きく3群に分かれ、その中で復元が可能であることから、当古墳に伴う遺物であるといえる。また、それらの土器の中には、その位置で意図的に割られたと思われるものが多数確認され、祭祀の後、意図的に破棄された可能性もある。

出土遺物

装身具（第29図　図版21）

耳環（1・2）　計測表を第12表に掲げる。

管玉（3・4）　計測表を第13表に掲げる。

小玉（5～81）　5は水晶製の小玉である。計測表を第14・15表に掲げる。

土器（第31・32図　図版21・22）

観察表を第16表に掲げる。

（豊島）

第16表　2号墳出土土器観察表

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)		手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
31・82 22・82	坏蓋 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高	15.4 4.5	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	不良	外 褐色 内 明灰色	
31・83 22・83	坏蓋 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高	13.0 4.2	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ヘラケズリ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	不良	外 褐灰色 内 赤褐色	
31・84 22・84	坏蓋 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高	13.5 4.4	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 オリーブ灰色 内 青灰色	
31・85 22・85	坏蓋 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高	14.1 4.5	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	密	やや良	外 灰色 内 灰白色	
31・86 22・86	坏蓋 須恵器	周溝内 (南)	口径 器高	11.2 3.5	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	不良	外 灰色 内 灰白色	
31・87 22・87	坏蓋 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高	10.0 3.9	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	口縁部付近に自然釉残る。
31・88 22・88	坏蓋 須恵器	周溝内 (南)	口径 器高	10.0 4.0	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	密	良好	外 灰色 内 灰白色	
31・89 22・89	坏身 須恵器	墳丘上 (南)	口径 受部径 器高	13.3 15.9 4.6	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	不良	外 褐色 内 灰褐色	内面底部に指頭圧痕残る。
31・90 22・90	壺頸部 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 体部最大径	8.4 6.4 13.4	外面底部は、回転ヘラケズリ。外面上半部は、カキメ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰色	内面底部に当て具痕残る。
31・91 22・91	壺頸部 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 体部最大径	8.6 6.4 12.3	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰色	
31・92 22・91	壺頸部 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 体部最大径	7.0 7.5 12.5	外面底部は、回転ヘラケズリ。外面上半部は、カキメ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内	内面底部に指頭圧痕残る。
31・93 22・93	壺頸部 須恵器	周溝内 (南)	口径 器高 体部最大径	8.0 8.3 13.7	外面底部は、回転ヘラケズリ。外面上半部は、カキメ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	体部上位に釜の跡残る。 焼きぶくれあり。
31・94 22・94	壺頸部 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 体部最大径	7.3 8.0 14.5	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 暗オリーブ灰 内 暗オリーブ灰	内面底部に当て具痕残る。
31・95 22・95	壺頸部 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 体部最大径	8.0 9.2 13.6	外面底部は、回転ヘラケズリ。外面上半部は、カキメ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰色	焼きひずみ有り。
31・96 22・96	壺頸部 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 体部最大径	9.5 9.8 16.0	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 青灰色 内 青灰色	
31・97 22・97	壺頸部 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 体部最大径	8.4 10.4 14.5	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	不良	外 明青灰色 内 明青灰色	内面底部に粘土塊付着。
31・98 22・98	甕 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 体部最大径	11.8 22.6 10.3	外面底部は、回転ヘラケズリ後静止ナデ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。 体部中央部と頸部に波状文を施す。	密 含砂粒少	良好	外 明オリーブ灰 内 灰白色	
31・99 22・99	高坏 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 脚端部径	11.9 12.5 7.5	坏部外面底部は、回転ヘラケズリ。他は静止ナデ。 ロクロ右回転。 脚部に1段3条の透かし孔有り。	密	良好	外 青灰色 内 青灰色	
32・100 21・100	甕 須恵器	周溝内 (南)	口径 器高 体部最大径	20.4 40.2 37.7	口頸部内外面は、回転ナデ。体部は、タタキ後カキメ。内面は、タタキの際の当て具痕残る。 頸部外面に櫛印有り。	密	良好	外 灰褐色 内 灰色	
32・101 21・101	甕 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 体部最大径	24.8 46.2 46.1	口頸部内外面は、回転ナデ。体部は、タタキ。内面にタタキの際の当て具痕残る。	密	良好	外 灰オリーブ色 内 灰色	体部上半部に自然釉残る。 焼きぶくれ有り。
32・102 21・102	横瓶 須恵器	周溝内 (南)	口径 器高 胴部最大径	13.0 26.9 (30.0)	口頸部内外面は、回転ナデ。胴部外面は、タタキ後回転ナデ。内面にタタキの際の当て具痕残る。	密	不良	外 白灰色 内 灰色	
32・103 21・103	甕 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 体部最大径	13.5 22.3 21.7	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面上半部は、タタキ後回転ナデ。底部は、タタキ。体部内面は、静止ナデ。	密 含砂粒少	やや良	外 灰色 内 灰色	
32・104 21・104	甕 須恵器	墳丘上 (南)	口径 器高 体部最大径	19.2 31.8 34.2	口縁外面と口頸部内面は、回転ナデ。体部外面は、タタキ後カキメ。内面にタタキの際の当て具痕残る。	密	やや良	外 黄灰色 内 灰赤色	

3．3号墳

（1）調査前の状況

3号墳は南東に張り出す尾根上の調査区の南西の端に位置し、標高は約27mである。北に2号墳、北東に1号墳がそれぞれ隣接する。

調査前は、雑木林で、地表面は北から南にゆるやかな斜面をなしており、ほとんど墳丘の高まりが認められず、石材の抜き取りによる陥没や石材の露出も見られなかった。さらに、南側は大きく崩落しており、表面観察では、その存在は認められなかった。当古墳は1次調査の際、新たに発見されたものである。

（2）墳丘

墳丘の上部と南東部は削平が著しく、旧状をとどめていない。残存する墳丘は、土層観察により直径約11m、石室床面からの残存高が約2mとなる。

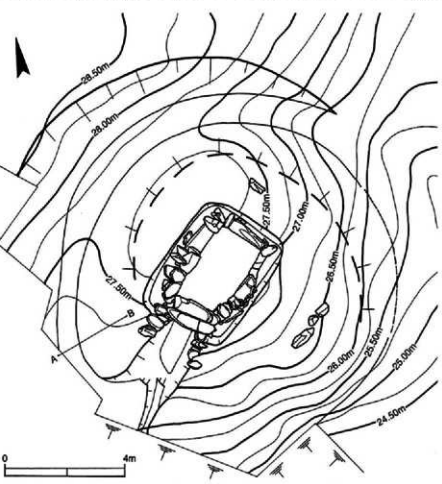
墳丘の基本的な築造方法は、その土層観察によると、まず、築造時の地表面より墓抗を掘り込み、その土砂を斜面下位側に寄せる。次に、石室を構築しながら斜面上位側の地山整形を行い、1次墳丘を盛り上げていく。最後に、斜面上位側の墳丘裾部外側を掘り込み周溝を作り、その土で最終盛土を施し完成に至る。

また、斜面下位側の墳丘の中心より約3.5m付近には、墳丘盛土の流失を防ぐためと思われる外腰列石を施している。

外腰列石は、いずれも角石で、北東側に1個、南東側に3個検出された。

また東側墳丘裾部にも同様の石材が十数個点在していることから、少なくとも築造時には、列石が斜面下位側の墳丘を巡っていたものと思われる。

周溝は、斜面上位側（北西）に認められ、最大幅3.7m、最大の深さ0.7mを計る。断面形は、浅い皿状を呈し、墳丘築造の際に土砂を掘り出した窪地がそのまま利用されたものと



第33図　3号墳墳丘遺存状況図　（S＝1/125）

思われる。

形状は、南西側が調査区外であるため確認はできないが、残存する形状と墳丘が斜面に築造されていることから、一般的な例から考えると馬蹄形であった可能性が高い。

（3）石室

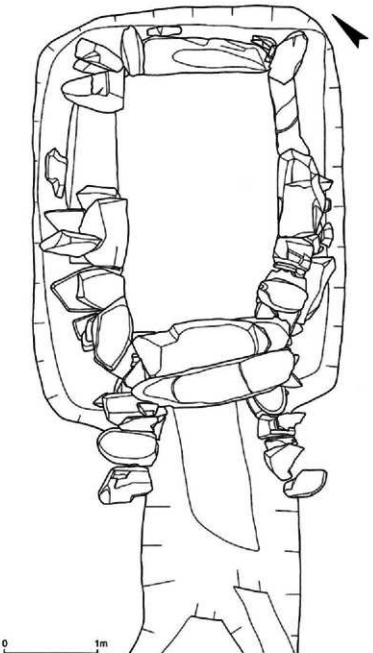
内部主体は、ほぼ南西に開口する竪穴系横口式石室である。石室は両袖式で、玄室と短い羨道からなる単室構造である。

玄室内は、多量の土砂と崩落した石材が散在しており、奥壁側は基部石と若干の石材しか残っていなかった。それに比べ、玄門と羨道部は、比較的残存状況が良好であった。

墓坑は、古墳築造時の地表面より掘り込まれており、長径4.4m、短径3.4m、深さ1.0m～1.7mを測る。

平面形は、隅丸長方形でその南西側に2.0mの墓道が続く。

玄室　玄室の平面はやや膨張り気味の縦長台形をなし、長さは中心部で2.8m、右壁側で2.6m、左壁側で2.9m、幅は奥壁側で1.8m、中心部で2.0m、玄門側で1.6mである。



第34図　3号墳石室平面図　（S＝1/40）

比較的残存状況の良好な玄門側の側壁についてその石材の構築状況を観察すると、まず長径を横に用いた板石を腰石とし、その上部にはやや小型の石を小口積みに積み上げている。具体的には奥壁は床面を約20cm掘り下げて、152×108cmの板石を横長に用い腰石としている。側壁については約10cm前後床面を掘り込んで掘り方とし、ほぼ左右対称に構築されている。基部石も奥壁側にやや大型の板石を、玄門側にそれより小型の板石をそれぞれ横長に用いている。その上位には小型の石を小口積みに積み上げている。大小の腰石が接する部分の上位には、80×30cmの断面径が台形の石材を小口積みにせず横長に用いている。このような石材は壁体を持ち送る際によく見られるもので、当古墳もこれより上位で持ち送った可能性がある。

それぞれの壁体の残存高は、奥壁で1.0m、右壁で1.2m、左壁で1.3mある。

床面は、かなり攪乱を受けており、敷石も見られなかった。

玄門は、幅68cm、高さ96cmで、長さ68cm、幅24cmの框石を挟んで、左右ほぼ同様の高さ約80cm、幅約40cmの縦長の石が用いられている。その上に扁平な石をそれぞれ2個重ねて袖石とし、その上に長径147cm、短径44cm、奥行68cmの石材をのせて玄門を構築している。

羨道　羨道は、長さ約190cm、玄門付近の幅約80cm、高さ132cmで、側壁の基底レベルが上がり玄門より約60cm付近で、横目地をとる。天井石が棚石より高いレベルで1個残存している。閉塞施設は認められず、床面は玄室より約10cm高い。

墓道　墓道は、主軸に対して約10°東に、羨道より約17°の傾斜で前庭部に至る。断面形は、やや角張ったU字形である。

（4）遺物

出土状況

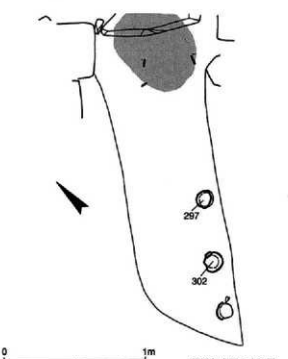
玄室内には、全体から散乱した状態で土玉とガラス小玉及び鉄製品が出土した。特に框石上部から羨道床面の若干レベルの高い位置から、固まって土玉が出土しており、かなり徹底的に攪乱をうけているものと思われる。

墓道からは、須恵器の坏蓋が内面を上にして2点、さらに土師器の鉢が同じく1点ほぼ等間隔に置かれた状態で出土した。若干高いレベルから出土していることから、追葬時の祭祀に伴う供献土器と思われる。

開口部の北西側の墳丘裾部から周溝にかけて、大量の土器が出土した。それらの土器はほとんど置かれた状態で出土しており、古墳築造時もしくは追葬時の祭祀に関するものと考えられる。大型の甕の周辺に、坏、高坏、提瓶、甕などの須恵器や高坏などの土師器がまとまって出土している。

その中には、坏蓋の上に坏身をそれぞれ内面を上にして重なって出土していたり、土師器の鉢が2枚重なり、蓋を覆った短頸壺と並んで出土していたりしており、当時の供献状況をうかがう上で貴重な資料といえる。

また東側の墳丘裾部から器台片が出土しており、開口部の南西側にも同様の祭祀跡があった可能性もある。しかし、南西側は崖になっており墳丘盛土の流出も激しく確認できなかった。



第35図　墓道内遺物出土状況図　（S＝3/80）

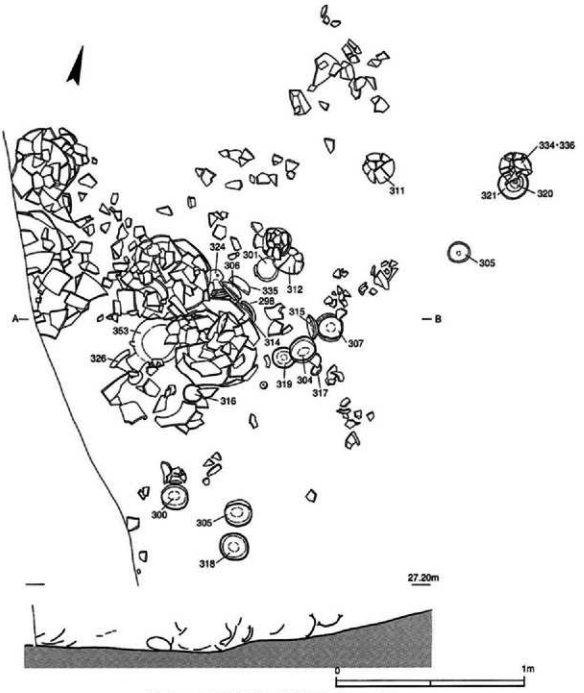
出土遺物

装身具（第37～39図　図版23）

切子玉（1）玄室内から出土。水晶製である。

小玉（2～281）2～216は土玉。内2～19まではそれぞれ2個ずつ連結したものである。

217～281はガラス小玉である。計測表は第18・19表に掲げる。



第36図　3号墳遺物出土状況図　（S＝1/20）

鉄製品（第40図　図版23）

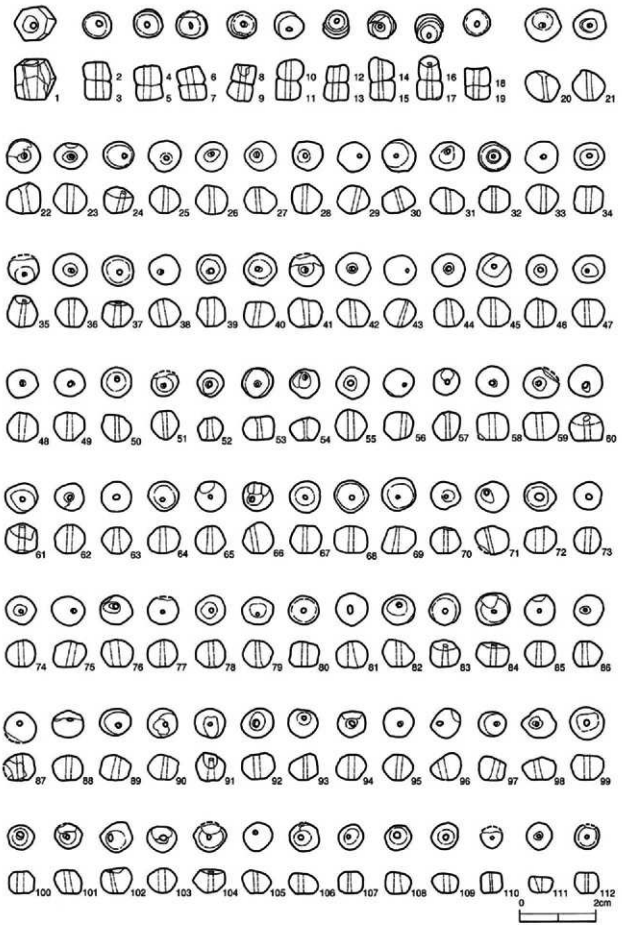
鉄鏃（282～291・296）計測表は第17表に掲げる。

刀子（292～295）292は身部である。残存長4.1cm、身の厚さ0.4cmで中空。293は残存長5.6cm、身部長2.2cm、茎部長3.4cm、身の厚さ0.4cm。両関で身部は中空。292と同一個体の可能性あり。294は身部である。残存長3.3cm、身の厚さ0.3cm。295は茎部で全体に木質が覆っており、目釘が残る。

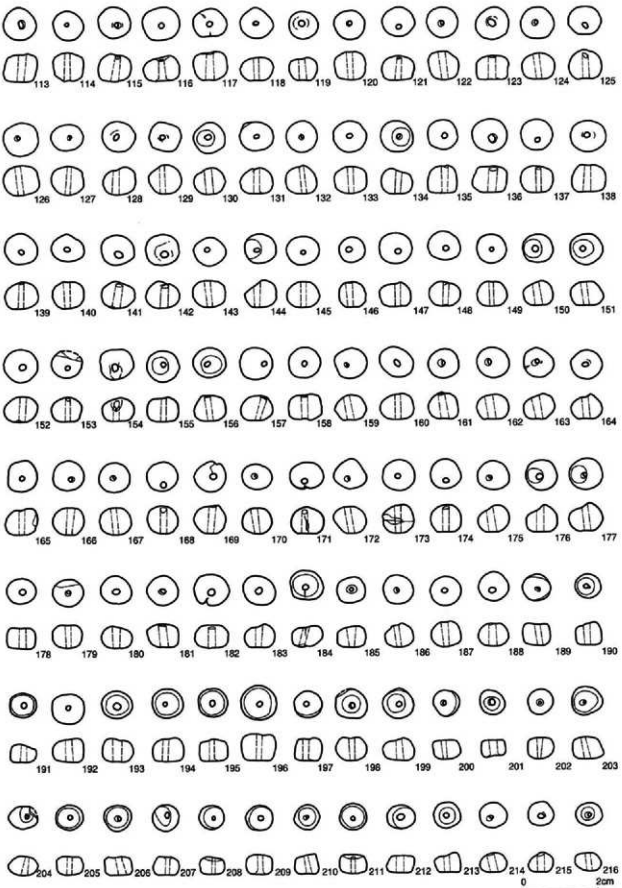
土器（第41～45図　図版23～26）

坏（297～318）297～307、316～318は坏蓋である。307～315は坏身である。299と308、301と314、306と313が坏蓋の上に坏身をそれぞれ内面を上に向け重なって出土した。

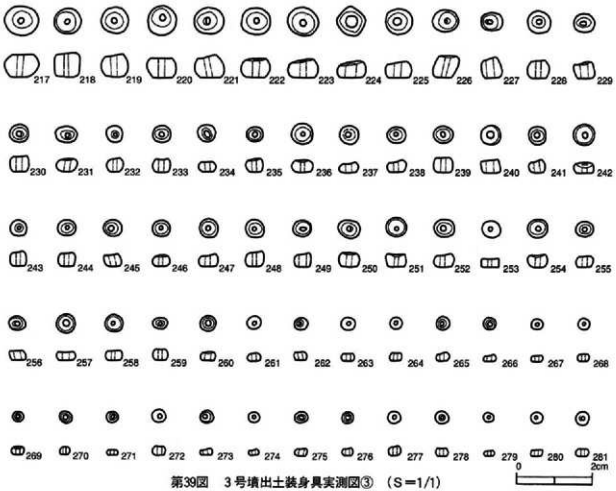
蓋（319・320）返りのあるつまみ付きの蓋。320は321の短頸壺に被さって出土。



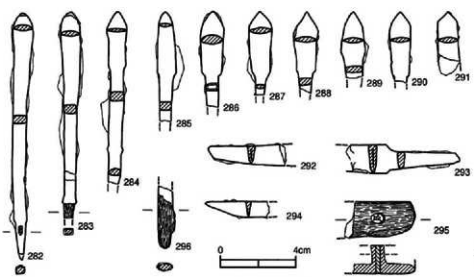
第37図　3号墳出土装身具実測図①　(S＝1/1)



第38図　3号墳出土装身具実測図②　（S＝1/1）



第39図　3号墳出土装身具実測図③　(S＝1/1)



第40図　3号墳出土鉄製品
実測図（S＝1/2）

第17表　3号墳出土鉄鏃計測表

（　）は残存値　単位はcm

挿図	図版	出土位置	全長	身部 長さ	身部 幅	頸部 長さ	頸部 幅	茎部 長さ	茎部 幅	備考
40-282	23-282	玄室内	(12.7)	(3.3)	1.0	7.6	0.6	(1.8)	0.5	盤前式　木質付着
40-283	23-283	玄室内	(10.8)	4.2	1.0	(6.6)	0.7	—	—	盤前式　茎部に木質付着
		玄室内	(2.1)	—	—	(1.3)	0.6	(0.8)	0.5	
40-284	23-284	玄室内	(9.2)	3.1	1.1	4.4	0.7	(1.7)	6.5	柳葉式
40-285	23-285	玄室内	(5.8)	3.4	1.0	(2.4)	0.6	—	—	柳葉式　茎部欠損
40-286	23-286	玄室内	(5.1)	3.4	1.1	(1.7)	0.6	—	—	柳葉式　茎部欠損
40-287	23-287	玄室内	(4.4)	3.5	1.2	(1.2)	0.4	—	—	柳葉式　茎部欠損
40-288	23-288	玄室内	(4.3)	3.2	1.2	(1.2)	0.4	—	—	柳葉式　茎部欠損
40-289	23-289	玄室内	(3.5)	2.5	1.3	(1.0)	1.0	—	—	柳葉式　茎部欠損
40-290	23-290	玄室内	(3.7)	3.4	1.1	(0.3)	0.6	—	—	柳葉式　茎部欠損
40-291	23-291	玄室内	(2.6)	2.6	1.1	—	—	—	—	鏃被部・茎部欠損
40-296	23-292	玄室内	(3.3)	—	—	—	—	(3.3)	0.8	木質付着

第18表　3号墳出土小玉計測表①

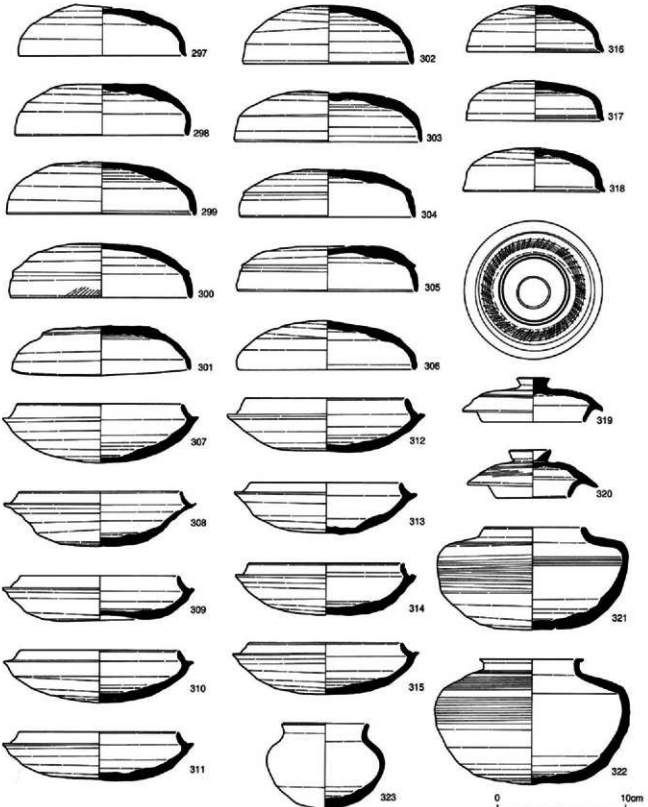
検図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材質	色調
37- 2	7.5	2.0	5.0	＋	黒褐色
37- 3	7.0	2.0	5.5	＋	黒褐色
37- 4	7.5	1.8	5.5	＋	黒褐色
37- 5	7.4	1.6	4.5	＋	黒褐色
37- 6	7.6	2.1	5.0	＋	赤褐色
37- 7	7.5	1.6	4.3	＋	赤褐色
37- 8	6.8	1.7	5.0	＋	赤褐色
37- 9	7.2	1.9	4.9	＋	黒褐色
37-10	7.1	1.2	5.5	＋	暗赤褐色
37-11	6.7	1.6	5.9	＋	暗赤褐色
37-12	6.0	1.7	4.6	＋	黒褐色
37-13	7.0	1.5	7.5	＋	黒褐色
37-14	6.4	1.2	4.4	＋	黒褐色
37-15	6.5	1.1	4.8	＋	黒褐色
37-16	7.0	1.8	6.1	＋	暗赤褐色
37-17	6.6	2.0	6.0	＋	暗赤褐色
37-18	6.8	1.9	5.0	＋	黒褐色
37-19	6.6	1.9	4.0	＋	黒褐色
37-20	9.0	1.0	8.2	＋	黒褐色
37-21	8.3	1.2	8.2	＋	黒褐色
37-22	9.6	1.6	7.8	＋	黒褐色
37-23	8.1	1.5	7.5	＋	黒褐色
37-24	8.0	1.3	7.0	＋	黒褐色
37-25	8.5	1.5	7.1	＋	黒褐色
37-26	7.8	1.7	7.3	＋	黒褐色
37-27	8.0	1.3	7.0	＋	黒褐色
37-28	8.1	1.2	7.7	＋	黒褐色
37-29	8.6	1.4	7.2	＋	黒褐色
37-30	9.0	1.2	8.2	＋	黒褐色
37-31	8.5	1.7	7.5	＋	黒褐色
37-32	8.4	1.5	7.0	＋	黒褐色
37-33	8.2	1.7	7.2	＋	黒褐色
37-34	8.0	1.7	7.0	＋	黒褐色
37-35	8.0	1.6	7.8	＋	黒褐色
37-36	8.1	1.3	7.5	＋	黒褐色
37-37	8.1	2.0	6.8	＋	黒褐色
37-38	8.1	1.9	7.4	＋	黒褐色
37-39	7.8	1.7	7.4	＋	黒褐色
37-40	8.2	2.1	6.3	＋	黒褐色
37-41	9.2	2.0	7.3	＋	黒褐色
37-42	8.4	1.5	7.7	＋	黒褐色
37-43	8.4	1.9	7.3	＋	黒褐色
37-44	8.4	1.4	7.8	＋	黒褐色
37-45	8.1	1.8	7.4	＋	黒褐色
37-46	8.2	1.5	7.1	＋	黒褐色
37-47	8.2	1.5	7.3	＋	黒褐色
37-48	8.4	1.9	7.3	＋	黒褐色
37-49	8.2	1.8	7.2	＋	黒褐色
37-50	7.8	1.4	6.4	＋	黒褐色
37-51	8.3	1.2	7.5	＋	黒褐色
37-52	7.0	1.6	5.4	＋	黒褐色
37-53	8.2	1.5	6.3	＋	黒褐色
37-54	8.1	1.7	6.6	＋	黒褐色
37-55	8.2	1.6	7.7	＋	黒褐色
37-56	8.0	1.5	7.6	＋	黒褐色
37-57	7.6	1.5	7.3	＋	黒褐色
37-58	8.3	1.8	7.1	＋	黒褐色
37-59	9.3	2.0	7.2	＋	黒褐色
37-60	9.0	2.4	7.1	＋	黒褐色
37-61	8.5	1.5	7.8	＋	黒褐色
37-62	7.8	1.9	7.3	＋	黒褐色
37-63	7.9	2.5	7.0	＋	黒褐色
37-64	8.2	2.0	7.0	＋	黒褐色
37-65	8.0	2.0	7.2	＋	黒褐色
37-66	8.0	1.6	7.0	＋	黒褐色
37-67	8.0	1.5	6.9	＋	黒褐色
37-68	9.0	1.7	7.0	＋	黒褐色
37-69	9.0	1.2	8.2	＋	黒褐色
37-70	7.9	1.4	6.8	＋	黒褐色
37-71	8.5	1.1	7.3	＋	黒褐色
37-72	8.4	2.2	6.6	＋	黒褐色
37-73	7.7	1.7	6.8	＋	黒褐色
37-74	8.0	1.9	7.0	＋	黒褐色
37-75	8.4	1.9	6.9	＋	黒褐色
37-76	8.7	2.1	7.1	＋	黒褐色
37-77	8.0	1.6	7.0	＋	黒褐色
37-78	7.9	1.5	6.7	＋	黒褐色
37-79	7.9	1.2	7.3	＋	黒褐色
37-80	8.1	1.5	6.4	＋	黒褐色
37-81	8.6	2.2	7.8	＋	黒褐色
37-82	9.7	1.9	7.0	＋	黒褐色
37-83	8.1	2.1	6.8	＋	黒褐色
37-84	8.8	2.0	6.5	＋	黒褐色
37-85	8.2	1.6	9.8	＋	黒褐色
37-86	8.2	1.3	6.7	＋	黒褐色
37-87	8.2	1.5	6.9	＋	黒褐色
37-88	8.0	1.5	6.6	＋	黒褐色
37-89	8.2	2.0	6.6	＋	黒褐色

検図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材質	色調
37-90	8.0	1.5	6.4	＋	黒褐色
37-91	8.0	2.0	6.6	＋	黒褐色
37-92	8.4	1.8	6.7	＋	黒褐色
37-93	8.0	1.2	7.7	＋	黒褐色
37-94	7.8	1.7	6.4	＋	黒褐色
37-95	8.2	1.5	6.7	＋	黒褐色
37-96	8.0	1.9	7.4	＋	黒褐色
37-97	7.0	2.1	5.5	＋	黒褐色
37-98	8.9	1.6	6.2	＋	黒褐色
37-99	8.2	2.1	6.8	＋	黒褐色
37-100	6.2	1.4	6.0	＋	暗赤褐色
37-101	7.4	1.4	6.0	＋	黒褐色
37-102	8.0	1.6	7.2	＋	黒褐色
37-103	7.4	1.8	6.6	＋	黒褐色
37-104	8.6	1.7	7.2	＋	黒褐色
37-105	7.7	1.8	6.3	＋	黒褐色
37-106	7.8	1.5	5.4	＋	黒褐色
37-107	6.8	1.4	5.5	＋	暗赤褐色
37-108	6.3	1.6	5.5	＋	暗赤褐色
37-109	7.0	1.4	5.4	＋	暗赤褐色
37-110	5.9	1.2	5.6	＋	にぶい赤褐色
37-111	7.0	1.6	4.4	＋	にぶい赤褐色
38-112	6.7	1.2	5.3	＋	黒褐色
38-113	8.6	2.0	7.4	＋	黒褐色
38-114	8.0	1.8	7.8	＋	黒褐色
38-115	8.6	2.2	7.4	＋	黒褐色
38-116	9.3	2.5	6.8	＋	黒褐色
38-117	8.9	2.5	7.6	＋	黒褐色
38-118	8.9	1.7	6.1	＋	黒褐色
38-119	7.7	2.0	6.1	＋	黒褐色
38-120	8.0	1.5	7.5	＋	黒褐色
38-121	8.4	1.5	6.4	＋	黒褐色
38-122	8.2	1.8	7.5	＋	黒褐色
38-123	8.6	2.3	6.4	＋	黒褐色
38-124	8.6	1.7	7.0	＋	黒褐色
38-125	8.6	2.0	7.9	＋	黒褐色
38-126	9.1	1.6	7.7	＋	黒褐色
38-127	8.4	1.5	7.6	＋	黒褐色
38-128	8.4	2.0	7.4	＋	黒褐色
38-129	8.3	1.7	6.9	＋	黒褐色
38-130	8.1	2.0	7.3	＋	黒褐色
38-131	8.6	1.8	6.9	＋	黒褐色
38-132	8.2	1.3	7.4	＋	黒褐色
38-133	8.6	1.5	7.2	＋	黒褐色
38-134	8.2	1.7	6.8	＋	黒褐色
38-135	7.7	1.7	7.3	＋	黒褐色
38-136	9.0	2.8	7.0	＋	黒褐色
38-137	8.4	1.3	7.0	＋	黒褐色
38-138	9.0	2.0	7.3	＋	黒褐色
38-139	8.8	1.5	7.3	＋	黒褐色
38-140	8.1	1.7	7.0	＋	黒褐色
38-141	8.6	2.0	7.3	＋	黒褐色
38-142	8.5	2.2	7.3	＋	黒褐色
38-143	8.5	1.5	7.1	＋	黒褐色
38-144	8.2	1.8	7.2	＋	黒褐色
38-145	8.6	1.5	6.8	＋	黒褐色
38-146	6.9	1.8	6.8	＋	黒褐色
38-147	8.5	1.8	6.4	＋	黒褐色
38-148	8.4	1.6	6.6	＋	黒褐色
38-149	7.9	1.2	6.6	＋	黒褐色
38-150	7.9	2.0	6.5	＋	黒褐色
38-151	8.7	1.7	6.4	＋	黒褐色
38-152	8.8	1.8	6.6	＋	黒褐色
38-153	7.9	1.5	6.3	＋	黒褐色
38-154	8.4	2.0	6.1	＋	黒褐色
38-155	8.4	1.8	6.5	＋	黒褐色
38-156	8.2	1.5	6.7	＋	黒褐色
38-157	8.4	1.7	6.6	＋	黒褐色
38-158	8.5	1.8	6.7	＋	黒褐色
38-159	8.4	1.8	6.6	＋	黒褐色
38-160	8.6	2.0	7.1	＋	黒褐色
38-161	8.0	2.1	7.0	＋	黒褐色
38-162	8.5	2.0	6.4	＋	黒褐色
38-163	8.2	2.2	6.8	＋	黒褐色
38-164	8.1	1.8	6.3	＋	黒褐色
38-165	8.6	1.5	7.0	＋	黒褐色
38-166	8.2	1.7	7.0	＋	黒褐色
38-167	8.0	1.6	7.1	＋	黒褐色
38-168	7.8	1.8	7.2	＋	黒褐色
38-169	8.4	2.0	7.3	＋	黒褐色
38-170	7.8	1.8	6.7	＋	黒褐色
38-171	8.8	1.9	7.0	＋	黒褐色
38-172	8.5	1.8	7.0	＋	黒褐色
38-173	8.4	1.6	7.5	＋	黒褐色
38-174	8.5	1.8	7.1	＋	黒褐色
38-175	8.3	2.2	6.9	＋	黒褐色
38-176	8.4	2.0	7.1	＋	黒褐色
38-177	8.8	1.8	7.3	＋	黒褐色

第19表　3号墳出土小玉計測表②

（　）は残存値

遺構	直径mm	孔径mm	厚さmm	材質	色調
38-178	7.9	2.0	5.4	±	暗赤褐色
38-179	7.7	1.5	6.1	±	黒褐色
38-180	7.9	2.0	5.8	±	黒褐色
38-181	8.2	2.1	6.1	±	黒褐色
38-182	8.0	2.4	5.9	±	黒褐色
38-183	8.3	1.8	6.1	±	黒褐色
38-184	8.2	2.0	5.4	±	黒褐色
38-185	7.5	2.7	5.4	±	黒褐色
38-186	7.8	1.5	6.3	±	黒褐色
38-187	8.0	1.7	6.6	±	黒褐色
38-188	8.1	2.0	6.0	±	黒褐色
38-189	7.3	1.7	5.7	±	暗赤褐色
38-190	6.7	1.8	6.0	±	黒褐色
38-191	7.2	1.9	4.8	±	暗赤褐色
38-192	8.2	2.0	6.3	±	黒褐色
38-193	8.0	2.3	5.9	±	黒褐色
38-194	8.0	1.9	6.1	±	黒褐色
38-195	7.5	2.0	5.7	±	赤褐色
38-196	9.3	2.1	7.2	±	黒褐色
38-197	7.2	1.7	5.8	±	暗赤褐色
38-198	(8.1)	1.6	6.0	±	黒褐色
38-199	8.1	2.0	5.7	±	黒褐色
38-200	7.2	1.5	5.0	±	暗赤褐色
38-201	6.4	2.0	4.9	±	黒褐色
38-202	6.8	1.9	5.2	±	赤褐色
38-203	8.1	2.2	5.7	±	赤褐色
38-204	7.8	1.9	4.9	±	黒褐色
38-205	7.3	1.8	4.9	±	暗赤褐色
38-206	7.3	1.3	4.4	±	黒褐色
38-207	8.5	1.3	4.6	±	暗赤褐色
38-208	6.3	1.0	4.5	±	にぶい赤褐色
38-209	7.1	1.7	5.0	±	暗赤褐色
38-210	6.6	1.2	5.0	±	暗赤褐色
38-211	7.0	1.4	5.0	±	暗赤褐色
38-212	7.1	2.0	4.4	±	赤褐色
38-213	6.8	1.5	5.1	±	暗赤褐色
38-214	7.3	2.0	5.0	±	暗赤褐色
38-215	6.5	2.3	4.6	±	黒褐色
38-216	6.9	1.4	4.7	±	黒褐色
38-217	9.1	1.6	6.0	ガラス	コバルトブルー
39-218	7.0	1.5	6.2	ガラス	コバルトブルー
39-219	7.0	1.6	6.0	ガラス	コバルトブルー
39-220	7.4	1.7	5.2	ガラス	コバルトブルー
39-221	7.5	1.8	5.7	ガラス	コバルトブルー
39-222	7.5	1.7	4.8	ガラス	コバルトブルー
39-223	8.0	1.8	4.7	ガラス	コバルトブルー
39-224	7.5	3.5	4.1	ガラス	コバルトブルー
39-225	7.0	2.0	4.3	ガラス	コバルトブルー
39-226	6.7	1.3	5.6	ガラス	コバルトブルー
39-227	5.3	2.0	5.4	ガラス	コバルトブルー
39-228	6.0	1.5	4.6	ガラス	青緑色
39-229	5.4	2.1	4.4	ガラス	青緑色
39-230	4.8	1.8	4.1	ガラス	コバルトブルー
39-231	5.4	1.5	3.8	ガラス	青緑色
39-232	4.3	1.2	3.7	ガラス	コバルトブルー
39-233	4.7	1.5	3.5	ガラス	青緑色
39-234	4.5	2.0	2.7	ガラス	コバルトブルー
39-235	4.2	1.4	3.6	ガラス	コバルトブルー
39-236	5.7	1.2	3.2	ガラス	マリンブルー
39-237	5.3	1.7	2.6	ガラス	青緑色
39-238	5.0	1.3	3.2	ガラス	コバルトブルー
39-239	5.3	1.5	4.0	ガラス	暗褐色
39-240	4.5	2.9	3.6	ガラス	スカイブルー
39-241	4.8	1.6	3.3	ガラス	コバルトブルー
39-242	5.5	1.6	2.3	ガラス	ブルー
39-243	4.4	1.3	3.7	ガラス	青緑色
39-244	4.6	1.2	3.4	ガラス	コバルトブルー
39-245	4.6	1.5	3.2	ガラス	コバルトブルー
39-246	4.6	1.0	2.9	ガラス	コバルトブルー
39-247	5.0	1.5	3.1	ガラス	コバルトブルー
39-248	4.9	1.2	4.0	ガラス	コバルトブルー
39-249	4.6	2.1	3.5	ガラス	コバルトブルー
39-250	5.8	1.5	3.7	ガラス	青緑色
39-251	5.0	1.3	3.2	ガラス	コバルトブルー
39-252	5.3	1.3	3.4	ガラス	コバルトブルー
39-253	4.6	1.0	2.2	ガラス	コバルトブルー
39-254	5.3	1.4	3.2	ガラス	コバルトブルー
39-255	4.6	1.7	2.7	ガラス	ブルー
39-256	4.2	1.8	2.3	ガラス	ブルー
39-257	5.1	1.9	2.3	ガラス	コバルトブルー
39-258	4.5	1.0	2.6	ガラス	コバルトブルー
39-259	4.0	1.0	3.0	ガラス	青緑色
39-260	4.3	1.7	2.3	ガラス	コバルトブルー
39-261	3.7	1.2	1.9	ガラス	ブルー
39-262	3.5	1.0	2.2	ガラス	青緑色
39-263	3.7	1.2	1.9	ガラス	ブルー
39-264	3.4	1.0	2.0	ガラス	暗褐色
39-265	3.9	1.0	2.2	ガラス	ブルー
39-266	3.2	1.5	1.7	ガラス	ブルー
39-267	3.1	1.1	1.6	ガラス	コバルトブルー
39-268	3.1	1.0	1.8	ガラス	青緑色
39-269	2.7	1.0	2.3	ガラス	コバルトブルー
39-270	3.3	1.3	1.7	ガラス	青緑色
39-271	2.9	1.0	1.3	ガラス	黄色
39-272	3.4	1.3	2.4	ガラス	青緑色
39-273	3.4	1.2	1.8	ガラス	ブルー
39-274	2.8	1.0	1.5	ガラス	ブルー
39-275	3.5	1.5	1.8	ガラス	青緑色
39-276	3.0	1.1	2.0	ガラス	コバルトブルー
39-277	3.3	1.3	2.4	ガラス	暗褐色
39-278	3.5	1.2	2.0	ガラス	コバルトブルー
39-279	2.8	0.8	1.3	ガラス	暗褐色
39-280	3.0	1.0	1.7	ガラス	暗褐色
39-281	3.6	1.0	2.0	ガラス	ブルー
	8.5	1.8	7.3	±	黒褐色
	8.2	1.8	7.4	±	黒褐色
	8.1	1.5	7.0	±	黒褐色
	8.3	1.8	6.5	±	黒褐色
	8.8	2.2	6.9	±	黒褐色
	9.6	3.5	7.7	±	黒褐色
	8.3	2.2	6.3	±	黒褐色
	9.0	1.8	7.1	±	黒褐色
	8.5	1.6	6.6	±	黒褐色
	9.1	1.7	7.3	±	赤褐色
	8.4	1.8	7.0	±	黒褐色
	8.6	1.5	6.5	±	黒褐色
	7.2	2.8	4.8	±	暗赤褐色
	8.4	1.8	6.8	±	黒褐色
	8.3	1.8	6.3	±	黒褐色
	9.4	2.1	7.3	±	黒褐色
	9.1	2.0	7.4	±	黒褐色
	6.8	2.1	4.4	ガラス	コバルトブルー
	8.3	1.9	6.9	±	黒褐色
	7.7	1.8	5.7	±	黒褐色
	8.7	1.6	7.1	±	黒褐色
	8.5	2.2	6.3	±	黒褐色
	8.0	1.8	7.4	±	黒褐色
	8.0	1.5	6.9	±	黒褐色
	8.4	2.2	7.1	±	黒褐色
	8.3	1.7	6.4	±	黒褐色
	8.7	2.6	5.9	±	黒褐色
	8.4	1.8	6.0	±	黒褐色
	9.0	2.5	7.3	±	黒褐色
	(7.1)	1.7	(5.7)	±	黒褐色
	(7.9)	1.4	(6.0)	±	黒褐色
	(7.6)	1.8	(7.0)	±	黒褐色
	(7.3)	1.6	(6.3)	±	黒褐色
	(8.6)	1.5	(5.5)	±	黒褐色
	(8.5)	1.3	(4.3)	±	黒褐色
	(8.0)	2.0	—	±	黒褐色
	(8.4)	—	6.1	±	黒褐色
	—	—	(7.8)	±	黒褐色
	8.0	(1.2)	(7.2)	±	黒褐色
		1.3	—	±	黒褐色
	(7.5)	—	(7.2)	±	黒褐色
	(8.0)	—	(7.0)	±	黒褐色
	—	—	(7.3)	±	黒褐色
	—	1.5	6.4	±	黒褐色
	—	—	(7.8)	±	黒褐色
	(6.8)	1.5	7.4	±	黒褐色
	—	1.3	(7.7)	±	黒褐色
	7.2	1.4	(6.3)	±	黒褐色
	(7.4)	—	7.0	±	黒褐色
	(7.5)	—	6.2	±	黒褐色
	(8.5)	—	(6.8)	±	黒褐色
	(6.5)	—	(5.7)	±	黒褐色
	(6.2)	—	(5.7)	±	黒褐色
	(6.8)	—	6.4	±	黒褐色
	(7.6)	—	(7.5)	±	黒褐色
	7.9	1.2	(7.1)	±	黒褐色
	—	—	4.8	±	黒褐色
	—	—	6.3	±	黒褐色
	—	—	6.8	±	黒褐色
	—	—	7.3	±	黒褐色
	—	—	5.3	±	黒褐色
	—	—	5.3	±	黒褐色
	—	1.4	—	±	黒褐色
	—	0.8	—	±	黒褐色
	—	—	7.6	±	黒褐色
	—	—	7.0	±	黒褐色
	—	—	6.1	±	黒褐色
	—	—	6.2	±	黒褐色
	—	—	(5.5)	±	黒褐色
	9.0	1.0	8.2	±	黒褐色
	3.3	1.3	3.0	ガラス	コバルトブルー



第41図　3号墳出土土器実測図①　(S＝1/3)

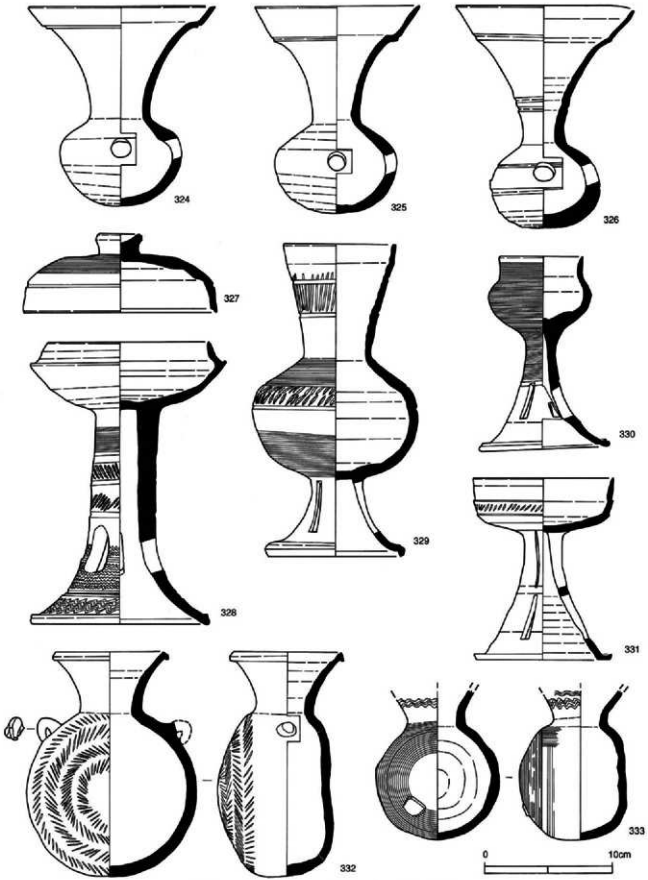
短頸壷（321～323、347）321～323は須恵器である。347は土師器である。

甕（324～326）　頸部に対して口縁が大きく張っている。

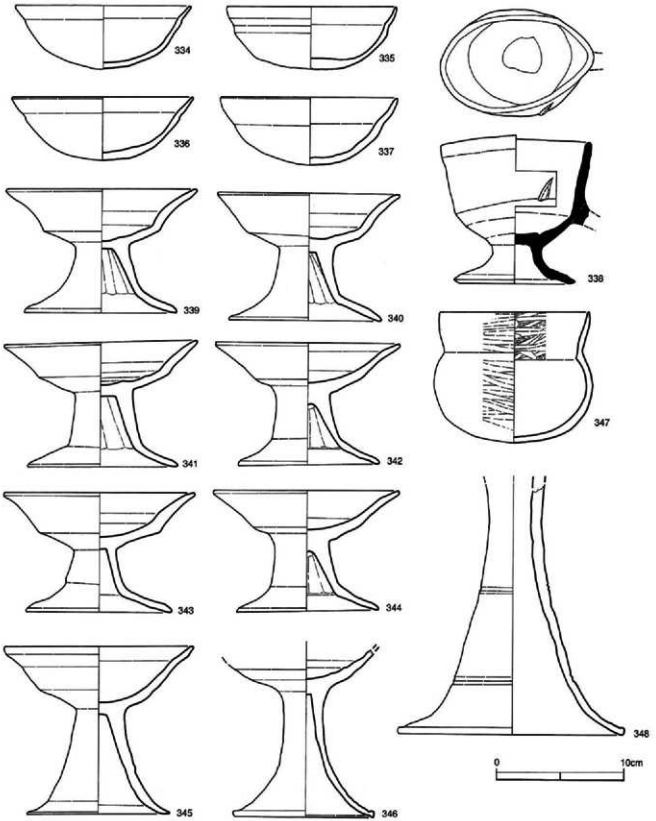
有蓋高坏、蓋（327・328）

脚付長頸壷（329）　脚付短頸壷（330）　ともに脚部に透かし有り。

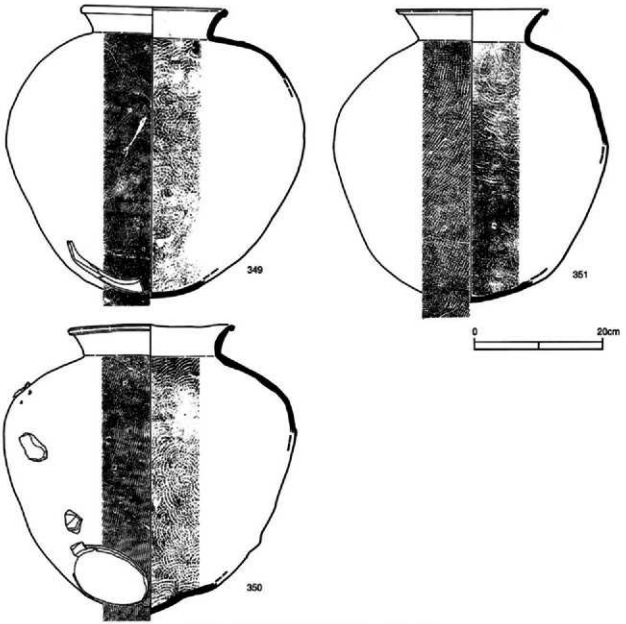
提瓶（332・333・353）



第42図　3号墳出土土器実測図②　（S＝1/3）



第43図　3号墳出土土器実測図③　（S＝1/3）



第44図　3号墳出土土器実測図④　(S＝1/6)

台付把手付鉢（338）

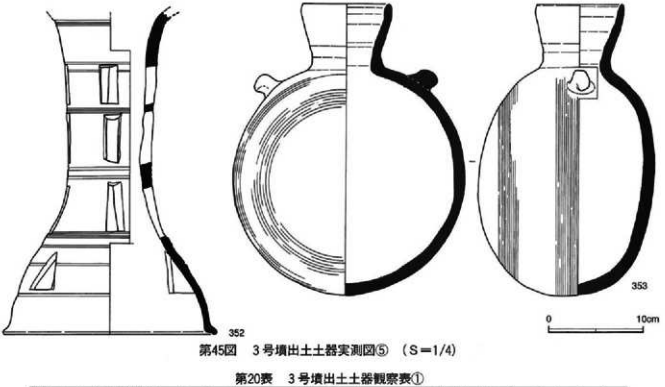
鉢（334～337）　334と336は320と321と並んで、内面を上に向けて重なって出土。

高坏（331、339～346・348）　331は須恵器である。脚部に2段3方向の透かし有り。339～346・348は土師器である。346・348は須恵器の手法を施している。339～344は一括出土。

甕（349～351）　349と350には、体部下半に須恵器の坏が付着している。ともに焼成時に付着したものと思われる。

器台（352）　南東部の墳丘裾部からその破片が出土した。また、斜面下位側（南東）に20m離れた5号墳の古墳築造時の地表面からもその破片が出土しており、古墳築造の順序を確定する1つの指標となった。

（豊島）



第45図　3号墳出土土器実測図⑤　（S＝1/4）

第20表　3号墳出土土器観察表①

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)		手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
41-297 24-297	坏 蓋 須恵器	表 採	口径 器高	13.2 4.0	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	焼きひずみ有り。
41-298 24-298	坏 蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高	13.4 4.1	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰色	
41-299 24-299	坏 蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高	14.6 4.2	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	
41-300 24-300	坏 蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高	13.1 4.3	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。 口縁短部外面に、櫛状工具による調整痕残る。	密 含砂粒少	良好	外 明オリーブ灰 内 灰白色	
41-301 24-301	坏 蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高	13.9 3.9	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰色	焼きひずみ有り。
41-302 24-302	坏 蓋 須恵器	表 採	口径 器高	13.3 4.6	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 明褐灰色 内 明褐灰色	
41-303 24-303	坏 蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高	14.6 3.9	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	やや良	外 灰白色 内 灰白色	外面天井部に粘土塊付着。
41-304 24-304	坏 蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高	13.8 3.7	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。内面天井部に、微微圧痕残る。	密 含砂粒少	良好	外 明褐灰色 内 灰色	
41-305 24-305	坏 蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高	14.2 3.4	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。内面天井部に、微微圧痕残る。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	外面天井部に粘土塊付着。
41-306 24-306	坏 蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高	13.8 3.9	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 青灰色 内 青灰色	
41-307 24-307	坏 身 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 受部径	13.0 4.6 15.4	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	
41-308 24-308	坏 身 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 受部径	12.7 4.2 15.1	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰色 内 灰色	
41-309 24-309	坏 身 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 受部径	12.3 3.2 15.0	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。 内面底部に微微圧痕残る。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	外面に粘土塊付着。 焼きひずみ有り。

第21表　3号墳出土土器観察表②

番号 図版	器種	出土位置	法量 (cm)		手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
41-310 24-310	坏身 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 受部径 器高	12.4 14.8 4.2	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	
41-311 24-311	坏身 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 受部径 器高	12.4 14.9 3.8	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。内面底部に指圧痕残る。	密 含砂粒少	やや良	外 灰白色 内 灰白色	
41-312 24-312	坏身 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 受部径 器高	12.8 15.6 4.2	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。内面底部に指圧痕残る。	密 含砂粒少	良好	外 青灰色 内 青灰色	
41-313 24-313	坏身 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 受部径 器高	11.9 14.4 4.0	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	不良	外 灰白色 内 灰白色	
41-314 24-314	坏身 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 受部径 器高	12.3 14.2 4.0	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
41-315 24-315	坏身 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 受部径 器高	12.1 14.7 4.1	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。内面底部に指圧痕残る。	密 含砂粒少	やや良	外 灰白色 内 灰白色	
41-316 24-316	坏蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高	10.6 3.1	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。 外面天井部に「キ」のヘラ記号有り。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰白色	
41-317 24-317	坏蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高	10.5 3.4	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰白色	焼きひずみ有り。
41-318 24-318	坏蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高	6.1 3.3	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰色	
41-319 24-319	蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 受部径 器高	8.0 10.2 3.5	内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。外面は櫛状工具による刺突文巡る。 つまみは貼り付け。	密	良好	外 灰色 内 灰色	
41-320 24-320	蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 受部径 器高	5.8 10.2 3.8	外面天井部は、カキメ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。つまみは貼り付け。	密 含砂粒少	良好	外 褐灰色 内 灰色	
41-321 25-321	短頸壺 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 体部最大径	7.8 8.1 14.1	外面底部は、回転ヘラケズリ。体部上半部は、カキメ後回転ナデ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 明緑灰色 内 灰白色	339とセット
41-322 25-322	短頸壺 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 体部最大径	8.2 9.8 14.1	外面底部は、回転ヘラケズリ。体部上半部は、カキメ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	良好	外 灰白色 内 灰色	
41-323 25-323	短頸壺 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 体部最大径	6.6 6.5 9.3	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰オリーブ色	
42-324 25-324	壺 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 体部最大径	14.8 15.7 9.4	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰色	
42-325 25-325	壺 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 体部最大径	12.8 16.4 9.6	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰オリーブ色 内 灰色	
42-326 25-326	壺 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 体部最大径	13.9 17.6 8.5	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。 頸部と体部に各2条の凹線巡る。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	体部の左右に焼成の際の格土痕付着。
42-327 25-327	坏蓋 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 つまみ径	14.8 6.2 3.6	外面天井部は、回転ヘラケズリ後カキメ。内面天井部は、静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。 つまみは貼り付け。	密	不良	外 灰色 内 灰白色	328とセット
42-328 25-328	有蓋高坏 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 受部径 器高 脚裾部径	12.3 15.3 22.1 13.6	坏部内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。脚部外面上位は、カキメ。中位にヘラ状工具による2段の斜文。下位に3段の波状文を施す。	密	良好	外 灰色 内 灰色	327とセット
42-329 25-329	脚付長頸壺 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 体部最大径 脚裾部径	8.3 24.6 13.0 10.3	体部外面上位・下位は、カキメ。他は、回転ナデ。 脚部に櫛状工具による施文。体部中位に同じく刺突文を2段施す。脚部に1段3条の連かし孔有り。	粗	良好	外 灰色 内 灰色	
42-330 25-330	脚付短頸壺 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 体部最大径 脚裾部径	5.8 15.2 8.1 10.0	外面脚部中位から頸部にかけてカキメ。体部内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 脚部下位に、長短6条の連かし孔が交互に施されている。	密	不良	外 暗灰色 内 灰色	
42-331 25-331	高坏 須恵器	墳丘上 (周口部北)	口径 器高 脚裾部径	10.7 14.2 10.5	坏底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。坏部外面にヘラ状工具による刺突文を巡らす。脚部に2段3条の連かし孔を施す。	密	良好	外 灰オリーブ色 内 灰オリーブ色	

第22表　3号墳出土土器観察表③

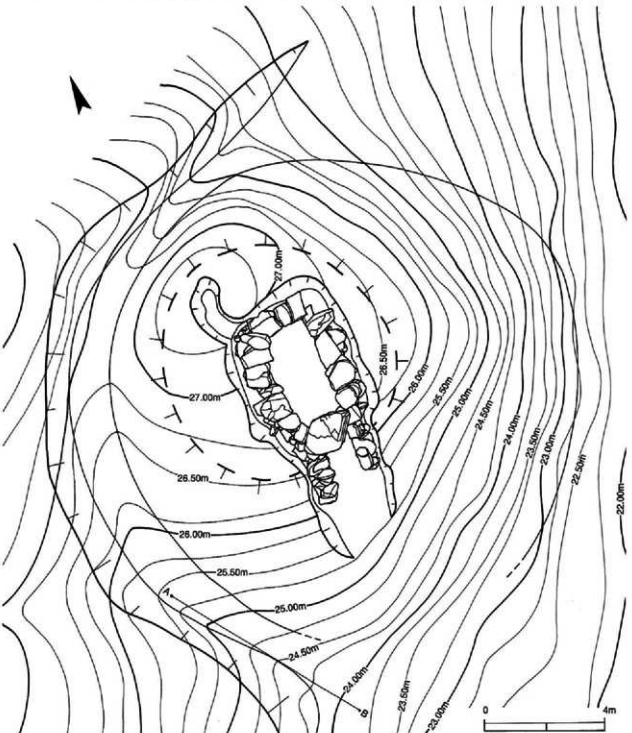
挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
42-332 25-332	提瓶 須恵器	墳丘上 (開口部北)	口径 8.5 器高 17.6 体部最大径 13.3	口頸部内外面は、回転ナデ。体部正面は、回転ヘラケズリ後回転ナデ。ヘラ状工具による重の刺突文を巡らす。ロクロ左回転。	密	不良	外 赤灰色 内 灰色	
42-333 25-333	提瓶 須恵器	墳丘上 (開口部北)	口径 不明 器高 不明 体部最大径 9.7	口頸部内外面は、回転ナデ。体部正面は、カキメ。背面は、回転ヘラケズリ。頸部に波状文を施す。	粗	不良	外 灰白色 内 灰白色	
43-334 26-334	鉢 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 13.7 器高 5.0	口縁部外面は、ミガキ。体部外面は、ハケ後ミガキ。内面は、ミガキか？	密	良好	外 橙色 内 淡黄橙色	336と重なって出土。
43-335 26-335	鉢 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 13.6 器高 4.9	器面剥落により調整不明。	密	不良	外 橙色 内 橙色	
43-336 26-336	鉢 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 14.4 器高 4.9	口縁部外面は、静止ナデ。体部外面は、ハケ後ミガキ。内面は、ミガキか？	密	良好	外 橙色 内 橙色	334と重なって出土。
43-337 26-337	鉢 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 13.6 器高 4.9	体部外面は、ミガキ。他は、器面剥落により調整不明。	密	良好	外 橙色 内 橙色	
43-338 26-338	台付把手付鉢 須恵器	墳丘上 (開口部北)	口径 12.0 器高 11.7 台脚部径 8.6	体部外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。台部・把手は貼り付け。	密	不良	外 暗赤褐色 内 暗赤褐色	焼きひずみ有り。
43-339 26-339	高坏 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 14.8 器高 9.7 脚裾部径 11.7	脚筒部内面は、ヘラケズリ。外面は、ヘラケズリ後ミガキ。脚裾部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。	密	良好	外 橙色 内 橙色	
43-340 26-340	高坏 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 14.0 器高 10.0 脚裾部径 12.0	脚筒部内面は、ヘラケズリ。外面は、ヘラケズリ後ミガキ。脚裾部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。	密	良好	外 橙色 内 橙色	
43-341 26-341	高坏 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 14.5 器高 9.7 脚裾部径 12.0	脚筒部内面は、ヘラケズリ。外面は、ヘラケズリ後ミガキ。脚裾部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。	密	良好	外 赤橙色 内 赤橙色	
43-342 26-342	高坏 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 14.4 器高 9.5 脚裾部径 11.2	脚筒部内面は、ヘラケズリ。外面は、ヘラケズリ後ミガキ。脚裾部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。脚筒部内面に絞り痕残る。	密	良好	外 淡赤橙色 内 淡赤橙色	
43-343 26-343	高坏 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 14.8 器高 9.4 脚裾部径 11.4	脚筒部内面は、ヘラケズリ。外面は、ヘラケズリ後ミガキ。脚裾部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。	密	良好	外 赤橙色 内 赤橙色	
43-344 26-344	高坏 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 14.5 器高 9.4 脚裾部径 11.8	脚筒部内面は、ヘラケズリ。外面は、ヘラケズリ後ミガキ。脚裾部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。	密	良好	外 淡橙色 内 淡橙色	
43-345 26-345	高坏 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 15.0 器高 13.1 脚裾部径 11.0	脚筒部内面は、ヘラケズリ。外面は、ヘラケズリ後ミガキ。脚裾部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。脚筒部内面に絞り痕残る。	粗	良好	外 橙色 内 橙色	
43-346 26-346	高坏 土師器	墳丘上 (開口部北)	脚裾部径 10.9	坏部外面底部は、回転ヘラケズリ後回転ナデ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。脚筒部内面に絞り痕有り。	粗	不良	外 橙色 内 橙色	須恵器の手法を使い成形している。
43-347 26-347	短頸壺 土師器	墳丘上 (開口部北)	口径 11.7 器高 10.4 体部最大径 12.4	外面底部は、ケズリ後ミガキ。上半部は、ミガキ。口頸部内面は、ハケ後ミガキ。他は、静止ナデ。	密 含砂粒少	良好	外 明赤褐色 内 明赤褐色	
43-348 26-348	高坏 土師器	墳丘上 (開口部北)	脚裾部径 17.5	回転ナデ。	粗	不良	外 淡黄橙色 内 淡黄橙色	須恵器の手法を使い成形している。
44-349 26-349	甕 須恵器	墳丘上 (開口部北)	口径 22.0 器高 45.3 体部最大径 46.6	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面は、タタキ。内面にタタキの際の当て具痕残る。	密	良好	外 灰オリーブ色 内 灰色	自然釉。 外面下位に、坏が付着。
44-350 26-350	甕 須恵器	墳丘上 (開口部北)	口径 26.4 器高 45.0 体部最大径 46.0	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面は、タタキ。内面にタタキの際の当て具痕残る。	粗	不良	外 灰色 内 灰色	自然釉。 外面下位に、坏が付着。
44-351	甕 須恵器	墳丘上 (開口部北)	口径 22.6 器高 50.3 体部最大径 43.3	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面は、タタキ。内面にタタキの際の当て具痕残る。体部外面にハケ状工具による横線を6段巡らす。	粗	不良	外 暗青灰色 内 暗青灰色	
45-352 23-352	器台 須恵器	墳丘上 (開口部北)	脚裾部径 22.0	回転ナデ。ロクロ右回転。脚部に4条を1組とする長方形と三角形（底下部）の透かし孔を4段施す。	密	良好	外 青灰色 内 青灰色	坏部欠損
45-353 23-353	提瓶 須恵器	墳丘上 (開口部北)	口径 9.0 器高 30.9 体部最大径 24.4	器面剥落により調整不明。把手は貼り付け。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	

4．4号墳

（1）調査前の状況

4号墳は、調査区最上部の北西から南東へ緩やかに傾斜する尾根上に築造された円墳である。石室中央部は標高約27mで、大浦古墳群Ⅰ地区の中では標高が4番目に高い位置に築造されている。4号墳の北西部には1号墳と2号墳が隣接している。また、西側の標高差約1m上位には3号墳が、さらに南側斜面下位には5号墳が位置している。

調査前の付近一帯は、古墳の北西から南東方向へ傾斜する緩斜面に、うっそうとした雑木林が広



第46図　4号墳墳丘遺存状況図　（S＝1/125）

がっていた。その中で、4号墳は明らかに墳丘らしき高まりは確認できたが、天井石はなく、天井石や側壁の石材が玄室内に落ち込み、土砂が流入堆積し、直径約2.2m、深さ約0.7mほどの円形に近い凹地になっていた。また墳丘頂部付近にも、表土中に崩れ落ちた石材が多数露出していた。

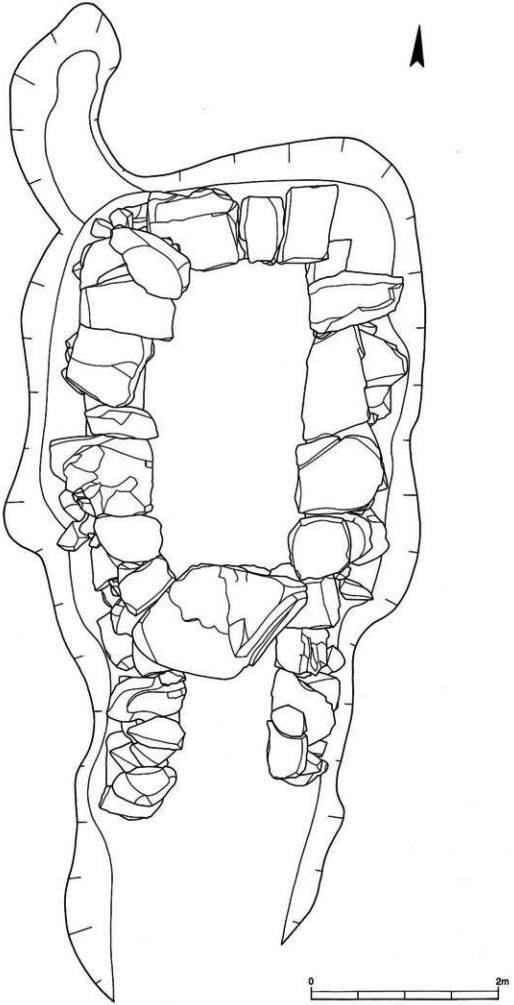
（2）墳丘

墳丘は、後世の攪乱により墳丘頂部付近が削平を受けていたが、他の部分はほとんど築造時に近い状態で遺存している。南東側斜面下位の墳丘裾部から遺存する墳丘頂部までの比高差は約4.5mである。その下に等高線に沿ってやや細長い平坦地があり、比高差約7mを測る。そこから墳丘を見上げると本古墳群の中では一回り大きい墳丘であることに気付く。一方、斜面上位の北側から斜面下位の南西側にかけては、馬蹄形の周溝が明瞭に残っていた。周溝の幅は約1.4～2.2m、深さは約0.5～0.8mで、断面形は皿状を呈していた。トレンチの土層を観察すると、斜面上位の西側と北側の築造時の地表面の一部が削られ、斜面下位の北東から南東にかけて掻き出されており、墓坑を掘る前に地表面の整形を行ったことが窺えた。西側は、墓坑端から約2.2mの所に長径3.75m、短径2.5m、深さ0.3～0.8mほどの楕円状の土坑が確認された。北側にも、石室中心部から約7.1mの所の周溝から、また東側にも、石室中心部から約8.9mの所から立ち上がる墳丘裾部のラインが残っていた。これをもとにすると、墳丘は東西にやや長い楕円状で、直径15.8m程度の円墳と推定できる。また、石室外面左奥に、地山から墓坑の基底面に向かって掘り込んだ盗掘坑とみられる斜坑の落ち込みが長さ2.1m、幅0.9mにわたって確認された。

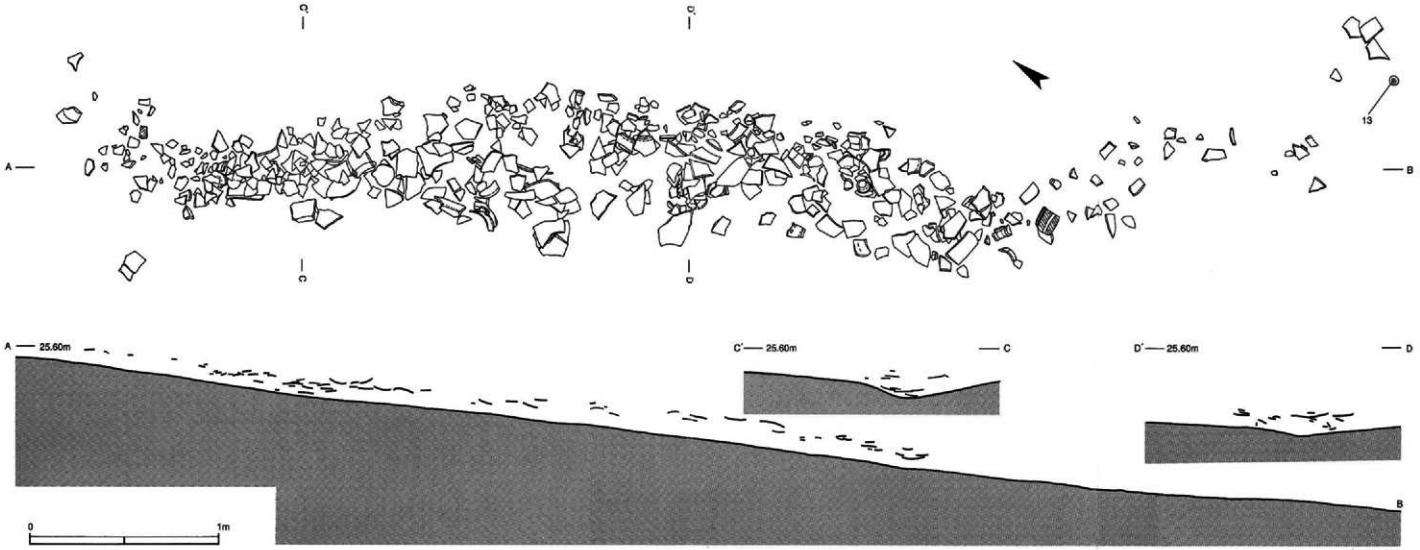
（3）石室

内部主体は南に開口する両袖式単室の横穴式石室である。主軸はN5°Wを指し、南側斜面下位に位置する5号墳とほぼ同じ方向に開口している。石室残存長6.0mで、奥壁側の幅に比べて袖部の幅がわずかに狭い羽子板状の玄室に、細長く短い羨道を付設する平面形をもつ。墓坑は玄室の周りではその形状に合わせた隅丸長方形に近く、袖部付近でややすぼまり、羨道付近では直線的になっている。墓坑の全長約9m、幅約3.8mで、築造時の地表面を整形して掘り込んでいる。石材は付近で入手容易な花崗岩を使用している。

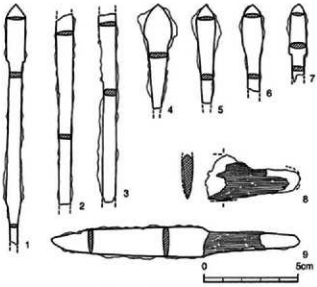
玄室　平面形はほぼ羽子板状を呈し、玄室長3.4m、奥壁幅2.14m、袖部幅1.98mで、奥壁幅が袖部より約16cm長い。奥壁は、2枚の大型の鏡石が縦置きに、双方の長辺を合わせて山形に据えられ、その上に重心が左右に分かれるように塊石が小口積みにされていた。側壁の腰石は、大型の石材を横置きにし、左壁は2枚、右壁は3枚据えてある。腰石の上には、目地を通すため扁平な石を詰めて高さを調節していた。そして、その上に2石ほど小口積みした後、天井石を覆っていたと考えられる。持ち送りの角度は、現存する高さまで左壁が17°、右壁が9°である。残存高は、床面から奥壁が約1.7m、左壁が約1.3～1.8m、右壁が約1.4～1.6mを測る。玄門部は左側は0.96m、右側は0.8mの柱状の石を縦長に据え、その上にもう1石ずつ積んで、中央部の玄門高1.18mを確保する。その両袖石の上に、最大長1.9m、最大幅1.26m、最大厚0.6mの大型の楣石を置いていたが、それを支える左右の袖部の高さと楣石の形状が微妙にバランスが悪く、やや不安定な状態であった。また、両袖石の羨道側には、それと同等の石材を密着させて疑似袖石としていた。框石は最大長77cm、最大幅61cmの台形状の比較的大きな割石を用い、それに密着させた5個の拳大の塊礫を使用している。



第47図　4号墳石室平面図　（S＝1/40）



第48図　4号墳遺物出土状況図　（S＝1/20）



第49図　4号墳出土鉄製品実測図　（S＝1/2）

第50図　4号墳出土耳環実測図（S＝2/3）

羨道　平面形は、右壁側は直線的であるが、左壁側はわずかに「ハ」の字状に開く。残存左壁長は2.6m、残存右壁長は2.1mを測るが、自然崩落が進んでおり築造時にはもう少し長かった可能性もある。左右両壁とも、5～10cm程度の盛土をして石材を置いている。石材について見ると左壁の方が面の整わない自然石の角礫が乱積されていた。なお、羨道先端部付近の平坦地は確認できたが、墓道については確認されなかった。

第23表　4号墳出土鉄鏃計測表　（　）は残存値

挿図	図版	出土位置	全長	身部		茎部		基部		備考
				長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	
49-1	27-1	玄室内	(12.6)	3.0	1.0	9.6	0.5	－	－	鏃箭式
49-2	27-2	玄室内	(10.0)	4.2	0.9	5.8	0.6	－	－	片刃箭
49-3	27-3	玄室内	(9.9)	(3.5)	1.0	(6.4)	0.7	－	－	片刃箭
49-4	27-4	玄室内	(5.5)	2.0	1.5	(3.5)	1.1	－	－	柳葉式
49-5	27-5	玄室内	(5.6)	5.0	1.0	(0.6)	0.5	－	－	鏃箭式
49-6	27-6	玄室内	(4.6)	2.7	1.1	(1.9)	0.6	－	－	柳葉式
49-7	27-7	玄室内	(4.6)	2.2	0.9	(2.4)	0.6	－	－	柳葉式

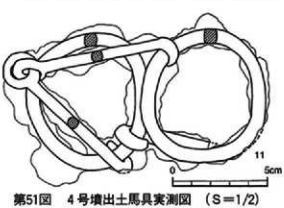
閉塞施設　最大長108cm、最大幅78cm、最大厚12cmの1枚の扁平な板石を、框石の上にのせて羨道側から縦に据え置き閉塞石としていた。この石は、羨道側わずかに6°傾いており、床面からの高さ約1.2mまでは、非常に堅い暗褐色粘質土によって密閉し固定されていた。

（4）遺物

出土状況　出土遺物には、須恵器の坏蓋、坏身、短頸壺、長頸壺、提瓶、横瓶、甕と鉄鏃、刀子、耳環、馬具の他、滑石製紡錘車、石匙等がある。

玄室内は後世の撹乱を受けて破壊された状態で、完形品は残っていなかったが、坏蓋1点、鉄鏃7点、刀子2点が出土した。坏蓋は小さく割れて、破片が玄室全体から散らばった状態で出土した。鉄鏃と刀子も撹乱層の中から出土したが、鉄鏃については身部が残っているものが5点確認された。刀子の1点はほぼ完形に近く、もう1点は関部のみ残存しており、共に木片が付着していた。

羨道内には、盗掘の際に剝がされたと思われる天井石が崩落しており、当時の表土等が大量に流入堆積していたが、羨道右壁端部から石室外側へ約80cmの床面上で、破砕された須恵器の短頸壺が出土した。また、それより一回り小さい短頸壺と坏身が、前述の短頸壺の出土位置から同じく石室側へ約2.5mの床面上で破砕された状態で出土した。



第51図　4号墳出土馬具実測図　（S＝1/2）

石室外からは、墳丘北西側の斜面上位、すなわち2号墳の南側付近から、墳丘南側の斜面下位、すなわち5号墳側に向かって、馬蹄形の周溝内から約14

m以上の長さにわたって多量の須恵器片ならびに土師器片が帯状に出土した。特に、標高24.4～25.5mの比高差1.1m、水平距離4.75mの間は出土密度が極めて高く、幅約35～90cm、最大厚18cmに積み重なっているという状況であった。それより上位側では、遺物は周溝内の底部だけでなく、周溝内の斜面上にも全体的に散らばって残っていた。この中には、斜面上位に位置する1号墳や2号墳からの流れ込みによる遺物も含まれているものと考えられる。一方、下位側について言えば、周溝の傾斜角度がやや増すために遺物遺存の割合も低くなり、さらに下方へ転がっていった可能性が高い。

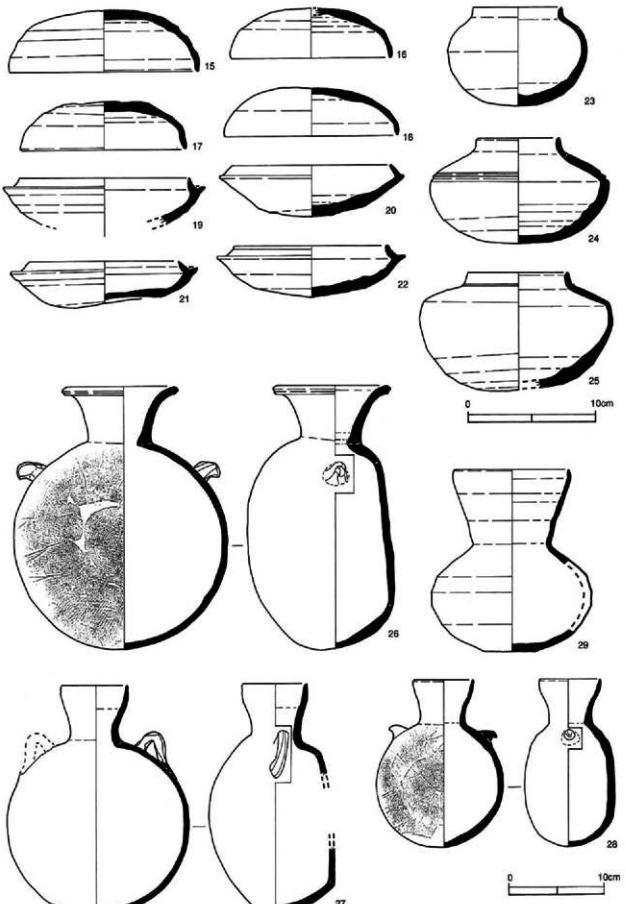
これらの破片から復元された遺物は、坏蓋3点、坏身3点、短頸壺1点、長頸壺1点、提瓶4点、横瓶1点、甕6点などである。坏蓋の時期については6世紀中頃－6世紀末頃に比定されるが、玄室内で出土した1点は6世紀末のものであり、少なくとも2回以上の追葬が行われたことは確実である。短頸壺については、羨道に置かれていた2点は出土状況から見て供献土器の可能性が高い。提瓶4点は、全て把手の形状が異なり、6世紀中頃～6世紀後半と推定できる。そのうちの1点については、口縁の形状が他の提瓶と大きく異なり、どちらかといえば壺の口縁の形状に似ており異質である。また、後世に石室西側の墳丘上から掘り込まれた土坑の底部付近で、鳥形を呈した石匙が見つかった。おそらく縄文期の遺物であるが、特徴としては刃部中央部に突起があり、刃部背面にも粗雑な加工痕が確認できる。一方、墳丘北東部の標高26m付近では、表土中から耳環が1点出土したが、おそらく撹乱時等に石室外に投げ捨てられたものと考えられる。同じく南東部からは、馬具（轡）1点、滑石製紡錘車2点などが見つかった。馬具は標高24.8m付近から墳丘検出中に発見されたが、銹化が進んでおり、鏡板及び銜にいくつもの錆ぶくれが見られた。この位置は、羨道右壁掘り方上端（築造時の表土面）とほぼ一致し、墳丘祭祀との関係も考えられる。滑石製紡錘車は墳丘上の標高24.0m付近と23.25m付近で出土したが、上位からの流れ込みであろう。

出土遺物（第49～55図　図版27～29）

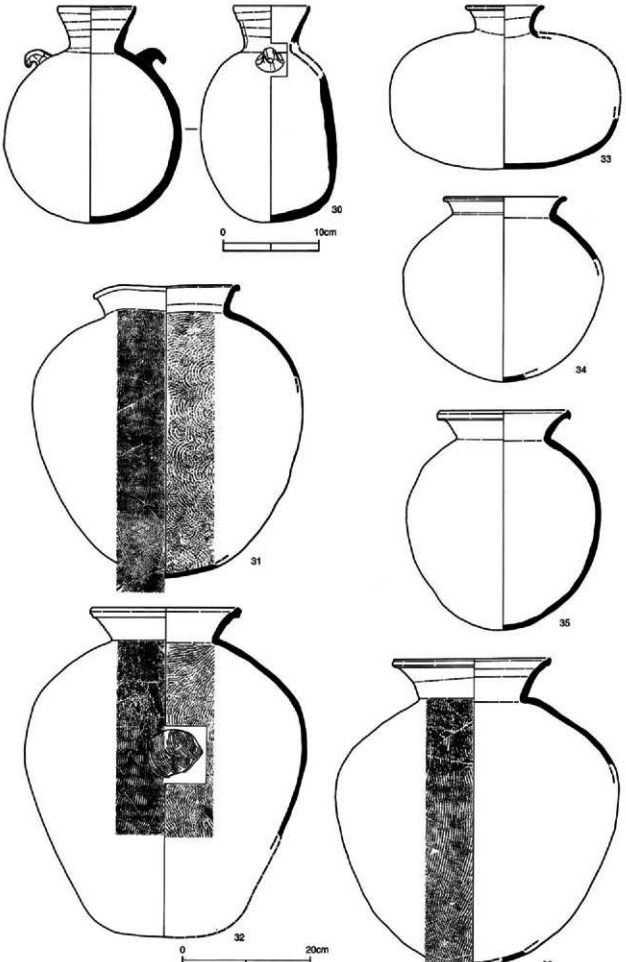
土器（第53～54図　図版28、30）　計測表は第24表、第25表に掲げる。

15～18は坏蓋。15、16、18は西側周溝内から出土し、全体的に口径が大きく、口縁部は外下方に開き、中位でゆるく屈曲し端部に至る。端部は丸くまとめている。17は玄室内から出土した唯一の土器で、大きさと形状から6世紀末に近く、追葬時の遺物だと思われる。19～22は坏身で、20は羨道内床面から短頸壺29と共伴して出土し、外面底部に2本の平行したヘラ記号が見られた。23～25は短頸壺。29は長頸壺。23は西側周溝内から、24と25は羨道内床面から出土し、24は頸部に他の遺物が焼成時に被さって焼かれた跡が残り、体部中央上部に2段の沈線が入っている。26～30は提瓶で、把手の形状が全て異なり、少しずつ製作時期に差があると考えられる。33は横瓶で、胴部外面に格子状のタタキ後ハケメの跡が残る。31～37は甕で、全て破砕された状態で周溝内から出土したが、上位の古墳からの流れ込み、または4号墳の墳丘上から滑落した可能性がある。体部外面に自然釉のかかっているものが3点あり、全体的には外面はタタキ後ハケメ、内面はタタキの際の同心円状

第52図　4号墳出土石製品実測図　（S＝1/2）



第53図　4号墳出土土器実測図①　（S＝1/3、S＝1/4）



第54図　4号墳出土土器実測図②　（S＝1/4、S＝1/6）

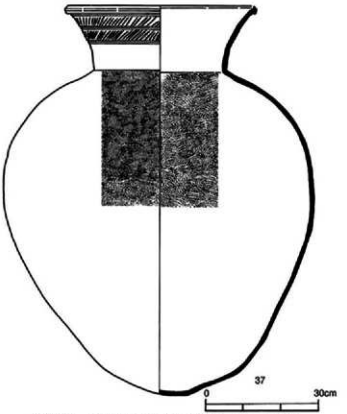
の当て具痕が残り、頸部は回転ナデの調整をとるものが多かった。31の口縁部と32の体部には、別の甕の一部が貼り付いていた。37は今回出土した遺物の中では最大法量で、形状と大きさが類似する甕が、梅ケ崎古墳群3号墳でも出土している。出土した土器の編年について主なものをあげてみる。まず、坏蓋についてみると、15と22は6世紀中頃。18、19、20、21は6世紀後半。16と17は6世紀末。次に提瓶について見ると、27は6世紀中頃、26と30は6世紀後半と推定されよう。

装身具（第50図　図版27）

耳環　10は外法径の長径26mm、短径25mm、内法径の長径19.5mm、短径17mm、断面形は5mm。突合部幅は1.5mmである。銅芯銀張り。

鉄製品（第50図　図版27）

鉄鏃（1～7）　計測表は第23表に掲げる。



第55図　4号墳出土土器実測図③　（S＝1/10）

第24表　4号墳出土土器観察表①

棟図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
53-15 28-15	坏 蓋 須恵器	周溝内 (南西)	口径 14.8 器高 4.9	天井部外面は、回転ヘラケズリ後静止ナデ。天井部内面は、静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
53-16 28-17	坏 蓋 須恵器	周溝内 (南西)	口径 12.5 器高 4.0	天井部外面は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 金砂粒少	やや良	外 灰白色 内 灰白色	天井部外面にヘラ記号有り。
53-17 28-17	坏 蓋 須恵器	玄室内	口径 12.6 器高 3.5	天井部外面は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	やや良	外 緑灰色 内 緑灰色	焼きひずみ有り。
53-18 28-18	坏 蓋 須恵器	周溝内 (南西)	口径 13.6 器高 3.9	天井部外面は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 金砂粒少	やや良	外 灰白色 内 灰白色	
53-19 28-19	坏 身 須恵器	周溝内 (南西)	口径 (13.4) 受部径 (16.0) 器高 (4.3)	底部外面は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	不良	外 明緑灰色 内 灰白色	
53-20 28-20	坏 身 須恵器	周溝内 (南西)	口径 12.6 受部径 14.7 器高 4.1	底部外面は、回転ヘラケズリ。内面底部は、静止ナデ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。	密	不良	外 オリーブ色 内 灰白色	底部外面にヘラ記号有り。
53-21 28-21	坏 身 須恵器	周溝内 (南西)	口径 11.6 受部径 14.6 器高 3.7	底部外面は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 金砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	焼きひずみ有り。
53-22 28-22	坏 身 須恵器	周溝内 (南西)	口径 14.9 受部径 12.2 器高 4.1	底部外面は、回転ヘラケズリ。底部内面は、静止ナデ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外 青灰色 内 青灰色	
53-23 28-23	短頸壺 須恵器	周溝内 (南西)	口径 7.1 器高 7.8 体部最大径 11.0	底部外面は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 金砂粒少	良好	外 青灰色 内 青灰色	
53-24 28-24	短頸壺 須恵器	羨道部	口径 6.4 器高 8.5 体部最大径 14.2	底部外面は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 金砂粒少	良好	外 オリーブ灰色 内 灰白色	

第25表　4号墳出土土器観察表②

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
53-25 28-25	壺形書 須恵器	表面部	口径　7.9 器高　9.2 体部最大径 15.4	底部外面は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 金砂砂少	良好	外 灰色 内 灰白色	
53-26 29-26	提瓶 須恵器	周溝内 (南西)	口径　11.4 器高　26.0 体部最大径 22.7	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面は、カキメ。 内面は、回転ナデ。内面に指頭圧痕残る。 カギ状把手。	密	良好	外 灰色 内 灰白色	
53-27 29-27	提瓶 須恵器	周溝内 (南西)	口径　6.3 器高　24.5 体部最大径 19.7	口頸部・体部正面は、回転ナデ。背面は、回転ヘラケズリ。 輪状把手。	密	良好	外 青灰色 内 青灰色	
53-28 28-28	提瓶 須恵器	周溝内 (南西)	口径　6.4 器高　17.6 体部最大径 13.4	口頸部は、回転ナデ。体部は、カキメ。 小型のカギ状把手。	密	良好	外 暗オリーブ灰 内 灰色	
53-29 28-29	長頸壺 須恵器	周溝内 (南西)	口径　11.9 器高　(19.4) 体部最大径 16.9	底部外面は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 頸部と体部の接合部は、静止ナデ。	密	良好	外 明青灰色 内 明青灰色	
54-30 28-30	提瓶 須恵器	周溝内 (南西)	口径　8.0 器高　23.0 体部最大径 18.5	口頸部内外面は、回転ナデ。体部正面は、タタキ後カキメ。背面は、カキメ。 カギ状把手。	密	良好	外 青灰色 内 青灰色	
54-31 29-31	甕 須恵器	周溝内 (南西)	口径　22.6 器高　45.6 体部最大径 42.3	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面は、タタキ後カキメ。内面にタタキの際の当て具痕残る。	密	良好	外 灰オリーブ色 内 灰色	体部外面に自然釉有り。 焼きひずみ有り。
54-32 29-32	甕 須恵器	周溝内 (南西)	口径　22.8 器高　51.5 体部最大径 44.2	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面は、タタキ。 内面にタタキの際の当て具痕残る。	粗	良好	外 灰オリーブ色 内 黄黄灰色	体部外面に自然釉有り。外面中位に粘の器の片付着。
54-33 29-33	横瓶 須恵器	周溝内 (南西)	口径　12.0 器高　25.3 胴部長径　(36.4)	口頸部内外面は、回転ナデ。頸部外面は、タタキ後カキメ。内面にタタキの際の当て具痕残る。	密	良好	外 黒色 内 暗灰色	頸部にヘラ記号有り。
54-34 29-34	甕 須恵器	周溝内 (南西)	口径　18.3 器高　29.0 体部最大径 31.0	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面は、タタキ。 内面にタタキの際の当て具痕残る。	密	良好	外 灰オリーブ色 内 黄灰色	
54-35 29-35	甕 須恵器	周溝内 (南西)	口径　19.5 器高　34.6 体部最大径 30.0	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面は、タタキ。 内面にタタキの際の当て具痕残る。	粗	不良	外 灰白色 内 灰白色	
54-36 29-36	甕 須恵器	周溝内 (南西)	口径　24.4 器高　48.2 体部最大径 44.4	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面は、タタキ。 内面にタタキの際の当て具痕残る。	密	良好	外 灰色 内 黄灰色	体部外面に自然釉有り。
55-37 29-37	甕 須恵器	周溝内 (南西)	口径　48.2 器高　102.0 体部最大径 80.7	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面は、タタキ。 内面にタタキの際の当て具痕残る。 頸部外面を2条の凹線で3段に分け、上位2段にヘラ状工具により刺突文を巡らす。	密	良好	外 灰白色 内 灰オリーブ色	焼きひずみ有り。

刀子　8は茎部から身部にかけて欠失。残存長5.2㎝、残存幅2.6㎝で、木質残存。9はほぼ完形に近く、全長13.4㎝、最大幅1.7㎝で木質残存。いずれも棟関を有し、刃部の断面は二等辺三角形で鎬は持たない。

馬具（第51図　図版27）

轡　11は鉄製の轡である。2連の銜、銜先には鏡板が取り付く。鏡板は7.0×6.7㎝の素環の楕円形で、立聞は確認できない。

石製品（第52図　図版27）

紡錘車　12は直径4.2㎝、高さ2.0㎝で、円孔形は一方が0.7×0.6㎝で、もう一方は0.6㎝。全体的に工具の加工痕が残っている。13は直径4.1㎝、高さ2.3㎝で、円孔形は一方が0.8×0.7㎝、もう一方が0.8×0.6㎝。表面は工具の加工痕を消すために丁寧に磨いている。共に滑石製。

石匙　14は石匙で材質はサヌカイト。長さ33.0㎝、幅4.4㎝、厚さ0.4㎝。二等辺三角形状の横長剥片の下側を両面から調整して刃部とし、上辺の打点部分を摘み状に作り出している。刃部正面並びに背面には、粗雑な調整加工があり、また刃部中央部には突起を作り出している。　（奥原）

5．5号墳

（1）調査前の状況

5号墳は、Ⅰ地区のほぼ中央部、4号墳の真南に隣接する円墳である。斜面上位側に当たる北西方向には3号墳の墳丘裾部が続き、南東方向の斜面下位側には、やや離れて6号墳が位置している。

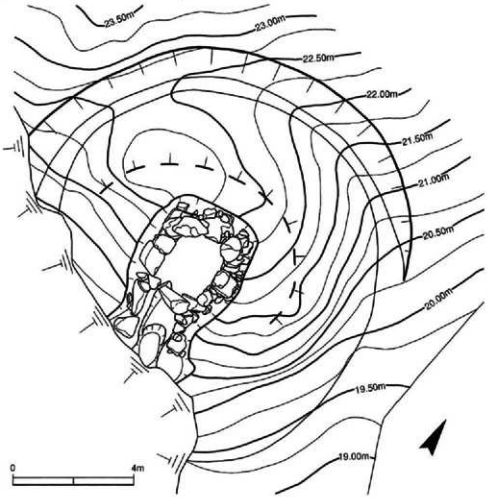
5号墳の南西から南側方向は、Ⅰ地区とⅡ地区の間を走る谷筋に続いており、石室の開口方向でもある南側から南西側にかけては自然崩落が著しく、急な崖面となっていた。一方、調査前の5号墳周辺の現況は雑木林で、しかも、3号墳から4号墳側の急斜面がやや緩斜面に変換する地点に当たることもあって、見かけだけでは墳丘らしき高まりは確認できなかった。しかし、南側の崖落ちの部分にわずかに石が露出していたことから、ボーリング探査を行ったところ石列を認め、トレンチにより古墳の存在を確認した。なお、標高は、石室近辺で約22mを測る。

（2）墳丘

土層観察用に設定した4本のトレンチのうち、北及び東西方向トレンチに、築造時の地表面が残っていた。トレンチ壁面で、北側約1.7m、東側約4mと築造時の地表面の残存状況が大きく違うのは、斜面上位側の北側は地山まで削平して平坦面を造ったためと推定される。特に、3号墳の墳丘裾部へ続く北西側から、4号墳に続く北東側にかけての斜面上位側では、地山を深く掘り込んで、幅1.9～2.1m、深さ30cm前後の周溝を巡らせていた。一方、南西及び南側は崩落のため地山整形の様子は定かではないが、墳丘南東側では築造時の地表面が途中で切れており、斜面下位側の墳丘裾部については、旧地形を削り出していた可能性が高い。

墳丘は、南西及び南側で崩落、流失の度合いが著しいが、東側及び北側では比較的よく残っていた。特に、石室構築段階から墳丘構築に至るまでの段階が、土層断面に極めてよく残っていたのは特筆されてよかろう。

石室裏込め及び墳丘の盛土は、



第56図　5号墳墳丘遺存状況図　（S＝1/125）

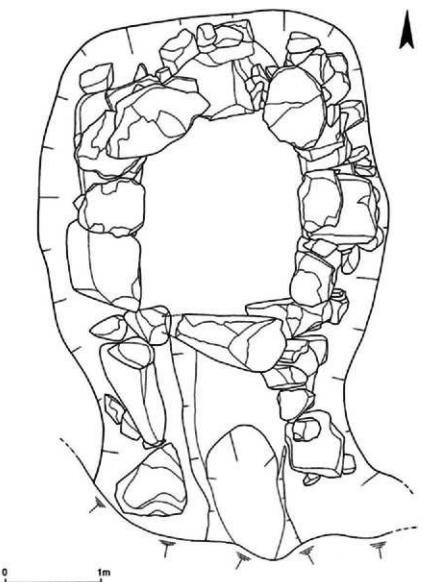
地山土と同じ花崗岩の風化土を中心にしている。それぞれは、腐植土の混ざり具合や色、質の違いで微妙に違うことから、細かく分けることができるが、大きくは、赤褐色粘質の地山土と、褐色及び橙色系の砂質土に大別できた。概略すると、まず、石室構築段階での石室の裏込めを兼ねたよく締められた盛土は、赤褐色土とにぶい褐色砂質土が交互に版築状に積み重ねられており、これを1次墳丘と判断した。次に、赤褐色土と橙色土、にぶい褐色砂質土を、これも版築状に盛った段階が確認でき、これは、石室上部を完全に覆う高さに続くことが推定できたことから、石室構築後の2次墳丘と考える。最後に、円墳としての整形段階の盛土が赤褐色土と黄褐色砂質土を中心に盛られており、これが最終墳丘と思われる。墳丘径は、東側トレンチでは石室中心から6.5m、北側トレンチでは同じく5.5mを確認できたことから、直径12～13mと推定されるが、やや東西に長い可能性もある。墳丘残存高は、残りのよい東側墳丘裾部からの比高差が1.9mであった。

（3）石室

4号墳と同じく、等高線と斜交して石室を構築し、開口方向も4号墳と同方向である。

墓坑は、不整長方形を呈し、長さは推定で6m前後、幅は最大で3.7m、築造時の地表面から掘り込んだ深さは、斜面上位側の奥壁左隅側で約1.4m、下位側の右袖石側で約0.2mを測る。地形の傾斜から見て、右袖石から羨道右壁近辺の削平はわずかで、奥壁左隅方向に深く墓坑を掘ることにより石室床面を平坦化したことが窺える。

主体部は主軸をN1°Eにとり、ほぼ真南に開口する単室の両袖式横穴式石室である。盗掘とその後の崩落により、天井石の全てと、左壁側の上部部分のかなりを失っていた。実際、玄室内掘り込みの時点で、天井石と思われる大振りな崩落石を5石検出している。石



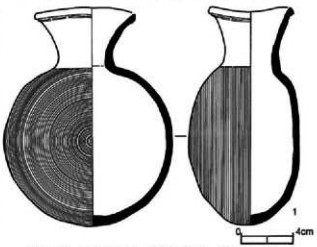
第57図　5号墳石室平面図　（S＝1/40）

室は、不整形の長方形プランで、全長は左壁で4.4m、右壁で4.2mを測り、石材は花崗岩である。

玄室　奥幅1.6m、前幅1.9m、左壁長2.15m、右壁長2.25m、奥壁から框石までは2.35mを測り、平面形はやや傾いた不整長方形である。

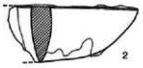
奥壁は幅1.6m、高さ1.6mの三角形状に形取った鏡石を、玄室内側に傾けて据え、側壁と鏡石との隙間は割石を水平に積み上げることにより埋めていた。その割石の上に、鏡石の頂点とほぼ同じ高さになるように大振りな石を左右に配している。

側壁は、左壁が2石、右壁が3石の大振りな石材を横長に据えて腰石とするが、石材の大きさはまちまちであり、腰石上面のレベルも不均一である。さらに、腰石上部の石も、積み方に雑な印象を受ける。残存高は、左壁側が0.9m前後、右壁側が1.2m前後で、比較的残りのよい右壁側で見る限り、ほぼ垂直に積み上げてあった。

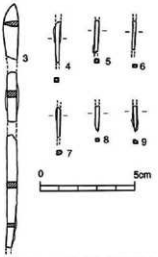


第58図　5号墳出土土器実測図　(S＝1/3)

両袖の玄門部は、右袖石が約60cm、左袖石は約25cm、それぞれ側壁から突出する。当初は、両袖石の上に載っていたはずの柱状の楣石は、左袖石側を欠失して袖石上には載っていず、わずかに右袖石端にかかったまま羨道側にずれており、むしろ、2石あった閉塞石のうち直立して据えられていた左側の閉塞石に支えられているという状況であった。そのため、閉塞石除去に際しては、やむを得ず安全のため楣石を除去せざるを得なかった。袖石間は約80cmで、幅14cm、長さ30cmと、幅20cm、長さ50cmの石を2石渡して框石とする。



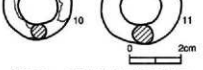
玄室床面には敷石が敷いてあった。玄門近くの大きな平石を別にすると、大部分が10－15cm程度の塊石を用いている。奥壁側左右隅の整然とした配石に対して、大きな平石を含む玄門側はやや乱雑な印象で、攪乱を受けた可能性が高い。一方、奥壁中央から玄室中央部にかけてと、左袖石近辺には、敷石のない部分が見られた。後者はともかく、前者はほぼ円形な空白を呈しており、何らかの意図を持つ人工的なものである可能性もある。



第59図　5号墳出土鉄製品実測図　(S＝1/2)

羨道　玄門からやや南東方向に振って延びる。左壁長2.2m、右壁長1.8m。共に2石の腰石を横長に地山に据える。右壁側にはその上にもう1段の雑な石積みが見られるが、左壁側には左袖石側の一石のみしか見られず、他は崩落したものと思われる。羨道部から南東方向に傾斜しながら延びる、断面U字形の墓道を確認したが、続きは崖面で、長さについては不明である。なお、羨道部の天井石の有無については、確認できなかった。

閉塞施設　2石の縦長の石を袖石間に並べ、隙間には塊石を込める。右側の閉塞石は、右の框石の外側から右の袖石側に大きく傾いた状態で立ち、左側の閉塞石は、左の框石に載った状態でほぼ直立



第60図　5号墳出土耳環実測図　(S＝2/3)

していた。右側の閉塞石も本来直立の状態だったが、石室上部崩落の際の榧石のずれと共に、閉塞石が動いたものと考えられる。

（4）遺物

出土状況　玄室内から、提瓶、耳環、鉄器類が、北東周溝部から鉄刀と土器片が出土した。周溝内の土器片は、復元できるものはなかった。

出土遺物（第58－60図　図版30）

提瓶（1）は、口径7.5cm、器高17.2cm、胴部最大幅13.3cmで、最大幅は胴部中央。頸部は外反し、調整は、胴部が前・背面ともカキメ、他はナデ。色調は青灰色。右袖石に接して床面据え付けの状態で出土した。12は、銅芯の銀環で外法27.3mm、内法15.4mm、断面は円形で径6mm、突合部幅2mm。1の近くの右壁側敷石上で検出。13も銅芯の銀環で、外法径31.6mm、内法径16.5mm、断面は円形で径7.8mm、突合部幅2.5mm。右壁側ほぼ中央敷石上で検出。2は鉄刀の刃先。北東墳丘裾部の周溝内で検出。3は柳葉式鉄鏃の身部、4～5は茎部。共に玄室中央部やや玄門よりの敷石上にまとまって出土。6～11は鉄製の針片で、玄室中央部左壁よりの敷石上に散らばった状態で出土した。（大村）

6．6号墳

（1）調査前の状況

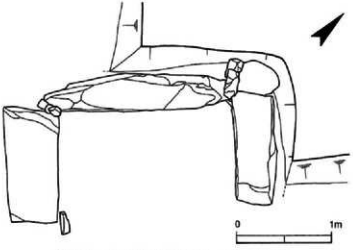
6号墳は南東に張り出す尾根上、調査区の南に位置し、標高は17mである。北西に5号墳、東に7号墳、南東に8号墳が隣接する。

調査前は畑地廃棄後の雑木林で、残存する石室部は段々畑の斜面に位置し、左壁側は崖面となっており、側壁と奥壁の一部は露呈していた。特に、側壁は裏側の掘り方の基部面が削り取られており、かろうじて木根によって崩落を免れているような状況であった。

墳丘の大部分は、畑地造営の際に削平されており、全く残存していなかった。

（2）墳丘

前述の通り、畑地造成の際に大規模な地山整形を行っており、墳丘、周溝は全く確認されなかった。そのため、墳丘規模、形状は不明である。特に、石室南東部は、石室床面より深く地山整形が行われており、トレンチ調査による土層観察でも、地山上部に若干の耕作土が確認できるだけであった。



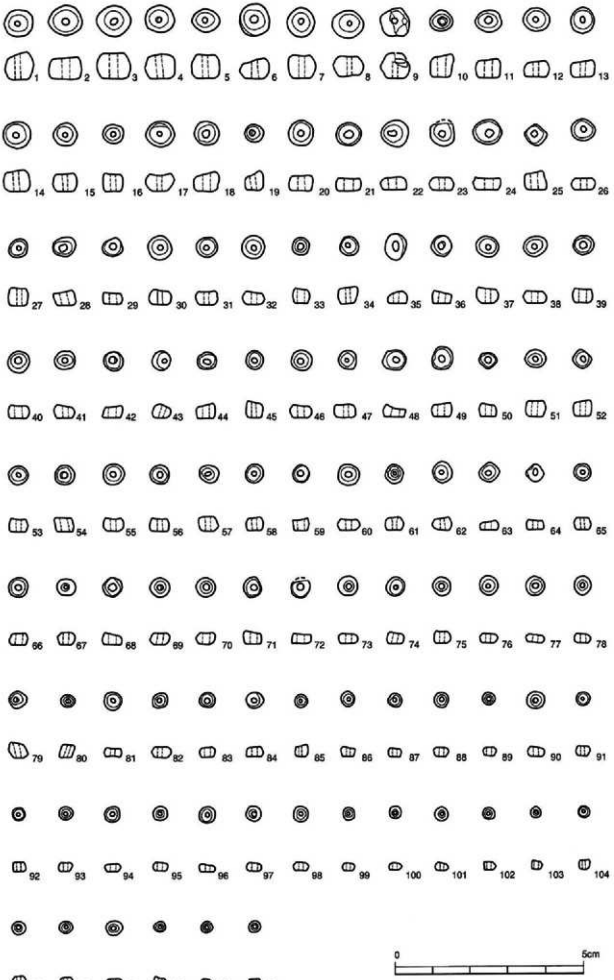
第61図　6号墳石室平面図　（S＝1/40）

また、北西の斜面上位側も同様で、地山上部に斜面高位からの流入土が確認できるだけであった。

（3）石室

石室も墳丘同様壊滅的な状態で、石室の大部分が破壊されており、かろうじて奥壁、左右側壁の各1石の基部石が残存していた。

そのため石室の形態、規模ともに不明である。



第62図　6号墳出土装身具実測図　（S＝1/1）

第26表　6号墳出土小玉計測表

挿図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材質	色調
62-1	7.7	1.3	7.2	ガラス	コバルトブルー
62-2	8.9	2.0	5.7	ガラス	コバルトブルー
62-3	9.3	2.4	6.7	ガラス	コバルトブルー
62-4	8.0	1.3	6.2	ガラス	コバルトブルー
62-5	7.4	1.5	6.3	ガラス	コバルトブルー
62-6	8.2	2.2	5.1	ガラス	コバルトブルー
62-7	7.6	1.6	6.4	ガラス	コバルトブルー
62-8	8.2	1.2	5.2	ガラス	コバルトブルー
62-9	7.6	1.5	6.8	瑪瑙	オレンジ
62-10	6.2	2.5	6.0	ガラス	コバルトブルー
62-11	6.7	2.1	5.0	ガラス	青緑色
62-12	6.8	1.5	4.4	ガラス	コバルトブルー
62-13	6.6	1.8	4.4	ガラス	コバルトブルー
62-14	7.2	1.3	5.7	ガラス	コバルトブルー
62-15	6.3	1.3	4.8	ガラス	コバルトブルー
62-16	5.6	1.6	4.6	ガラス	コバルトブルー
62-17	7.6	1.3	4.4	ガラス	コバルトブルー
62-18	6.4	2.1	5.0	ガラス	コバルトブルー
62-19	5.0	1.4	4.0	ガラス	コバルトブルー
62-20	6.4	1.8	4.1	ガラス	青緑色
62-21	6.5	2.6	3.2	ガラス	コバルトブルー
62-22	6.0	2.5	3.2	ガラス	コバルトブルー
62-23	7.1	1.8	3.2	ガラス	コバルトブルー
62-24	7.5	2.5	3.1	ガラス	コバルトブルー
62-25	5.9	2.0	4.8	ガラス	コバルトブルー
62-26	6.5	1.8	3.0	ガラス	コバルトブルー
62-27	5.3	1.4	3.8	ガラス	コバルトブルー
62-28	6.1	2.2	4.1	ガラス	コバルトブルー
62-29	5.2	2.0	3.1	ガラス	コバルトブルー
62-30	6.2	1.7	4.0	ガラス	コバルトブルー
62-31	5.8	1.5	3.6	ガラス	ライトブルー
62-32	6.0	1.7	3.7	ガラス	コバルトブルー
62-33	4.8	2.0	4.0	ガラス	コバルトブルー
62-34	5.0	1.5	4.5	ガラス	コバルトブルー
62-35	7.0	1.8	3.3	ガラス	コバルトブルー
62-36	5.5	2.3	3.5	ガラス	黒色
62-37	6.1	1.5	4.4	ガラス	コバルトブルー
62-38	6.4	1.8	3.1	ガラス	コバルトブルー
62-39	5.4	2.0	3.9	ガラス	コバルトブルー
62-40	5.9	2.0	3.4	ガラス	コバルトブルー
62-41	5.5	1.5	3.4	ガラス	青緑色
62-42	5.1	2.3	3.1	ガラス	コバルトブルー
62-43	4.9	1.0	3.8	ガラス	コバルトブルー
62-44	5.1	2.0	4.0	ガラス	コバルトブルー
62-45	4.7	1.5	4.4	ガラス	コバルトブルー
62-46	5.9	1.9	3.2	ガラス	コバルトブルー
62-47	5.2	1.2	3.3	ガラス	コバルトブルー
62-48	6.0	2.4	3.1	ガラス	青緑色
62-49	5.7	2.0	3.7	ガラス	コバルトブルー
62-50	4.5	1.7	3.6	ガラス	青緑色
62-51	5.3	1.5	4.1	ガラス	青緑色
62-52	4.9	1.8	4.2	ガラス	黒色
62-53	5.0	1.4	3.7	ガラス	コバルトブルー
62-54	5.3	2.0	3.6	ガラス	黒色
62-55	5.5	1.5	3.3	ガラス	コバルトブルー
62-56	5.2	1.8	3.4	ガラス	コバルトブルー
62-57	5.2	1.8	3.8	ガラス	コバルトブルー
62-58	5.1	1.5	3.6	ガラス	青緑色
62-59	4.3	1.8	3.3	ガラス	青緑色
62-60	5.9	1.8	3.0	ガラス	コバルトブルー
62-61	4.9	1.5	3.3	瑪瑙	オレンジ
62-62	5.5	1.2	3.8	ガラス	コバルトブルー
62-63	5.2	1.8	2.5	ガラス	コバルトブルー
62-64	4.7	1.8	2.7	ガラス	黒色
62-65	4.2	0.8	3.0	ガラス	コバルトブルー
62-66	5.2	2.0	3.2	ガラス	コバルトブルー
62-67	5.0	1.5	3.4	ガラス	青緑色
62-68	5.2	2.4	3.4	ガラス	コバルトブルー
62-69	5.3	1.5	3.2	ガラス	コバルトブルー
62-70	5.3	1.8	3.1	ガラス	暗褐色
62-71	5.2	1.8	3.7	ガラス	黒色
62-72	5.2	1.9	2.9	ガラス	コバルトブルー
62-73	5.3	1.8	2.9	ガラス	コバルトブルー
62-74	5.1	1.4	3.2	ガラス	コバルトブルー
62-75	4.6	1.6	3.5	ガラス	コバルトブルー
62-76	4.8	1.5	2.7	ガラス	コバルトブルー
62-77	5.0	1.6	2.4	ガラス	コバルトブルー
62-78	4.5	1.5	2.5	ガラス	コバルトブルー
62-79	5.0	1.2	4.0	ガラス	コバルトブルー
62-80	3.3	1.0	3.6	ガラス	純スカイブルー
62-81	4.7	1.6	2.8	ガラス	コバルトブルー
62-82	4.0	1.3	2.8	ガラス	グリーン
62-83	4.2	1.7	2.8	ガラス	スカイブルー
62-84	4.6	1.3	2.7	ガラス	ライトブルー
62-85	3.7	0.8	3.2	ガラス	コバルトブルー
62-86	3.8	1.0	2.8	ガラス	コバルトブルー
62-87	3.8	1.3	2.2	ガラス	純スカイブルー
62-88	4.0	1.4	2.5	ガラス	青緑色
62-89	3.5	1.5	2.5	ガラス	コバルトブルー
62-90	4.5	1.4	2.7	ガラス	コバルトブルー
62-91	3.8	1.3	2.7	ガラス	コバルトブルー
62-92	3.5	1.0	2.4	ガラス	コバルトブルー
62-93	3.7	1.4	2.4	ガラス	コバルトブルー
62-94	4.0	1.4	2.0	ガラス	コバルトブルー
62-95	3.9	1.5	2.3	ガラス	コバルトブルー
62-96	4.3	1.5	2.2	ガラス	黒色
62-97	4.0	1.5	2.3	ガラス	青緑色
62-98	4.0	1.3	2.7	ガラス	黒色
62-99	3.4	1.3	2.3	ガラス	青緑色
62-100	3.4	1.3	2.0	ガラス	黒色
62-101	3.7	1.0	2.7	ガラス	コバルトブルー
62-102	3.2	1.3	2.3	ガラス	コバルトブルー
62-103	3.1	1.3	2.6	ガラス	マリンブルー
62-104	2.7	1.1	2.5	ガラス	純スカイブルー
62-105	3.4	1.3	2.1	ガラス	青緑色
62-106	3.4	1.2	2.0	ガラス	コバルトブルー
62-107	4.3	1.7	1.8	ガラス	純スカイブルー
62-108	3.3	1.3	2.2	ガラス	コバルトブルー
62-109	3.3	1.5	1.6	ガラス	コバルトブルー
62-110	3.2	1.4	1.5	ガラス	青緑色
62-111	5.0	2.0	2.8	ガラス	青緑色

残存する墓坑は、奥壁側で0.9mの深さをとどめる。

玄室　奥壁は、床面を若干掘り窪めて1.9×1.1mの板石を横長に用い、内面をやや内傾させて腰石としている。

側壁は、奥壁よりやや小形の板石を床面を掘り窪めることなく、横長に用い腰石としている。側壁については、内傾することなくほぼ垂直に立てている。

石室残存長1.3m、幅1.8mである。

（4）遺物

出土状況　玄室内からは、刀子が1点、ガラス小玉が109点、瑪瑙製小玉が2点出土した。

それらは後世の撹乱を受けており、残存する床面全体に散乱して出土した。

また、石室より東へ6m付近の地山が傾斜した部分には、畑を造成した際に6号墳周辺の地山を削り取った土砂（鈍い橙色土）が堆積している。その中から大量の須恵器片が出土した。

出土遺物

装身具（第62図　図版30）

小玉（1～110）計測表を第26表に掲げる。

鉄製品（第63図　図版30）

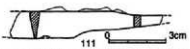
刀子（111）　刃関の刀子で、身部と茎部の一部を欠損する。残存長8.0cm、うち身部長3.8cm、茎部長4.2cm、身の厚さ0.5cmを測る。

土器（第64図　図版30）

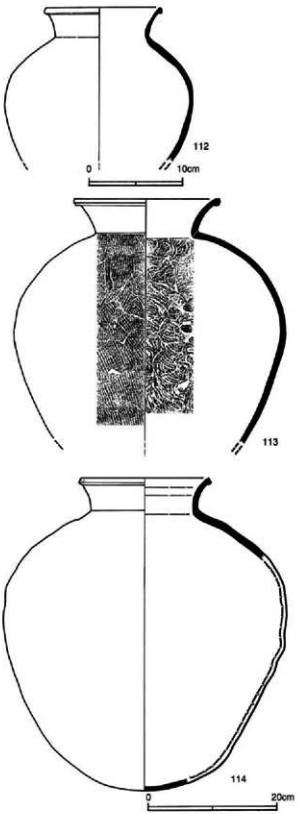
甕（112～114）　112は口径12.0cm、残存高16.1cm、体部最大径20.0cm。内面は回転ナデ、外面は回転ナデ後カキメを施す。

113は口径22.8cm、残存高38.0cm、体部最大径42.5cm。口頸部内外面は回転ナデ、体部内外面はタタキ。

114は口径20.2cm、器高48.8cm、体部最大径44.5cm.。口頸部内外面は回転ナデ、体部面はタタキ後カキメ。　（豊島）



第63図　6号墳出土鉄製品実測図　（S＝1/2）



第64図　6号墳出土土器実測図　（S＝1/4、S＝1/6）

7．7号墳

（1）調査前の状況

7号墳は、調査区の東南端に位置し、標高は約15mである。8号墳の北側に隣接する。古墳の西半分は畑の開墾に伴って整地され墳丘頂部は失われ、東半分は畑の開墾に伴う土砂の採取で削り取られ崖となっている。調査前は雑木が茂り、古墳の存在は判然としなかった。8号墳の周溝を検出中に崖面に石材が露出しているのが確認され、トレンチ調査を行ったところ古墳の存在が明らかとなった。

（2）墳丘

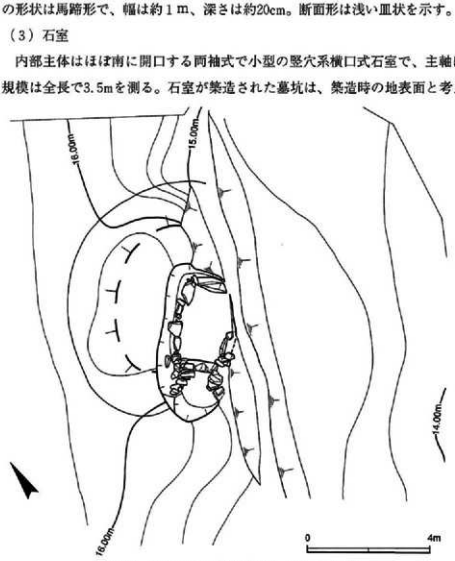
墳丘の頂部と東半分は畑の開墾の際に破壊されているが、西半分の裾部は比較的良く残っていた。トレンチの土層観察から径約8mの円墳と考えられる。古墳の基底面は古墳築造時の地表面である褐色粘質土層で、厚さは50cm程度である。基底面上には墳丘盛土が50cmばかり残っていた。

古墳の基本的な築造方法はトレンチの土層観察から、まず上位である西側斜面を掘削し、地山整形を行う。古墳築造時の地表面から墓坑を掘り込み石室を構築する。この際、石材裏込め部分は版築により築いている。最後に、墳丘盛土を行った後、古墳築造時の地表面から周溝を掘り込んだとみられる。

石室の西側に地山整形をした周溝が確認できたが、東側では削平のために確認できなかった。周溝の形状は馬蹄形で、幅は約1m、深さは約20cm。断面形は浅い皿状を示す。

（3）石室

内部主体はほぼ南に開口する両袖式で小型の竪穴系横口式石室で、主軸はN41°Eである。石室の規模は全長で3.5mを測る。石室が築造された墓坑は、築造時の地表面と考えられる褐色粘質土層を掘り込んでいる。平面形はほぼ隅丸長方形に近いが、開口部側が丸い形状を呈す。石室の右壁側と奥壁側の上部は削平により失われているが、推定で長さ5.0m、幅は奥壁側で2.8m、玄室中央部付近で2.6m、羨道部で2.4m。深さは奥壁側で1.2m、玄室中央付近で1.3m、羨道で1.1mである。墓坑壁面は傾斜をつけて掘られ、玄室の右壁との間隔は狭いが左壁側との間隔は広い。

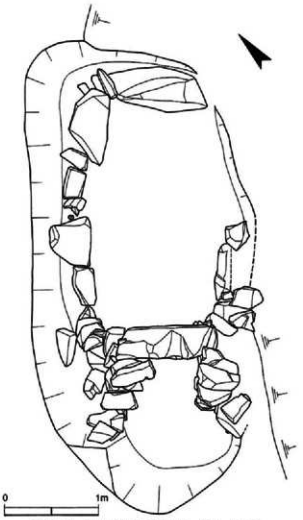


第65図　7号墳墳丘遺存状況図　（S＝1/125）

玄室　玄室の長さは2.3m、中央部の幅は1.5m、框石付近で1.3mである。玄室の床面は明黄褐色の地山を利用しており、敷石はない。玄室を構成する基部石は地山を掘り込むことなく、玄室床面と同じ高さで置かれている。奥壁は幅100cm、高さ80cmの基部石のみが残る。両側壁は幅50cm、高さ30～50cmの石を横長に置いている。

玄門部は、高さ70cmと60cmの石が各１個、壁に接して立てられ袖石としている。玄門幅は約50cm。この間に１枚の板石が置かれ、框石として石室の内外を区画している。

羨道　羨道の長さは1.2m、幅は0.7m。袖石から開口部に向かってハの字状に広がっている。羨道の左壁側の上段の石は西側、つまり斜面上位側からの圧力によって内側にずれ込んでいるが、ほぼ原位置を留めていると考えられる。羨道の床面のレベルは玄室床面とほぼ同じであるが、徐々に上がっていき、框石から1.2mのところで、急に上がり約60cm高くなっている。



第66図　７号墳石室平面図　（S＝1/40）

閉塞施設　框石の上に１枚の板石が置かれ、玄門を閉塞している。この閉塞石の外側には、框石の上30cmの位置に塊石が板石にほぼ張り付いた状態で置かれており、閉塞石の一部と考えられる。この他にも、板石と羨道の側壁の隙間に小礫を詰めている。

（４）遺物

遺物は石室内及び羨道部からは全く検出されなかった。開口部の西側の周溝部分から数点の須恵器片が出土した。

甕（第67図　図版31）　口頸部の基部は太く、口縁部は外反したのち、さらに外反しながら屈曲し、端部は内傾する明瞭な稜をもつ。口縁部に沈線状のくぼみをもつ。底部は平坦に近く内湾気味に外上方に開いた後、なだらかに内傾し、口頸部に至る。外面底部は回転ヘラケズリ。体部中央部にカキメ調整。他は回転ナデ。円孔は欠損して不明だが、カキメの中央部に穿っていると考えられる。口径は12.6cm、器高は13.0cm、体部最大径は11.2cm。胎土は粗く暗青灰色であり、焼成は不良で口縁部に焼きひずみがある。

（安部）

第67図　７号墳出土土器実測図
（S＝1/3）

8．8号墳

（1）調査前の状況

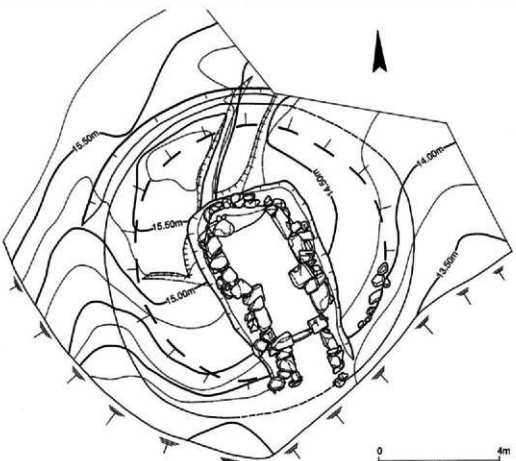
8号墳はⅠ地区の南東端に位置し、標高は15mである。北側に7号墳、北東側に6号墳が隣接する。Ⅰ地区においては、唯一の複室の横穴式石室を持つ古墳である。

調査前は、畑地として整地されており墳丘の高まりが全く認められなかった。しかし、天井石と思われる石材が露呈しており、当古墳の存在が確認できた。

（2）墳丘

墳丘の大部分は、畑地造成の際に削平されており消失していたが、北東側については、畑地の上段となるため比較的遺存状況が良好であった。トレンチによる土層観察から、直径10.2×10.8mの円墳であったと思われる。

古墳の築造方法は、まず、高位の北東斜面の地山整形を行い、墓坑を掘り込む。石室を構築しながらほぼ水平に盛土を行い、1次墳丘を築く。次に、周辺を掘り込み墳丘の形を整えながら最終盛土を



第68図　8号墳墳丘遺存状況図　（S＝1/125）

行う。その後、斜面上位側に周溝を掘り込み墳丘を完成させたと思われる。

周溝は、後世の削平等によりそのほとんどは消失していた。北東側に若干残存している周溝は、幅約70cm、深さ20cm、断面形は浅い皿状を示す。

（3）石室

内部主体は、南東に開口する両袖式の横穴式石室である。玄室に前室が付設された複室構造で、主

軸はN27°Wを示す。石材は花崗岩である。石室内には、天井石と思われる巨石が崩落し土砂が充満していた。

また、石室の遺存状況が悪く、玄室の左壁側を除いてほとんどが基部石のみ残る。

墓坑は、高位の北西部のみ地山より約1.0m掘り込み、他は構築時の地表面より掘り込み、ほぼ開口部付近で終結している。

玄室　玄室の平面形は方形で、長さ2.1m、幅2.2mである。

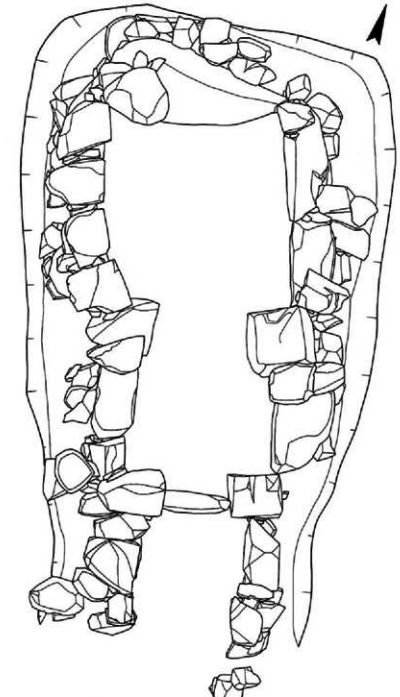
奥壁は、床面を若干窪めて2.0×1.5mの不整形な板石を横長に用い、内面をやや内傾させて鏡石としている。

側壁は、左右それぞれ板石を2石を横長に用い腰石としている。その上部は、やや小型の石材を小口積みにし壁体を構築している。

玄門は、左右に約1.0mの石材を縦長に用い袖石としている。

前室　前室はやや横に長い長方形で、右壁に1石、左壁に2石を用い腰石としている。

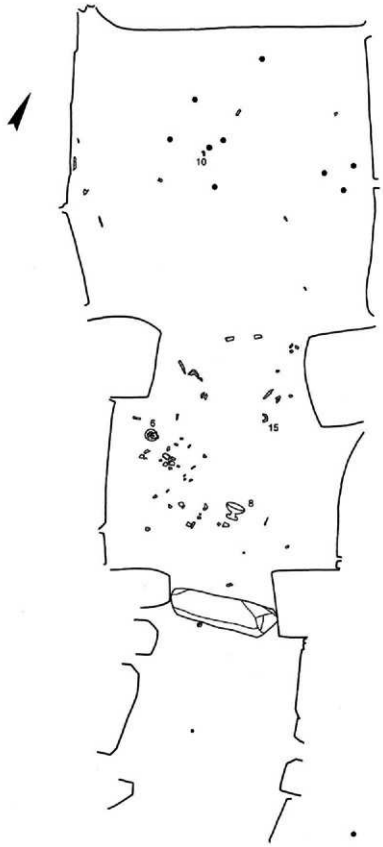
前門は、左右に約0.8mの石材を縦長に用い袖石としている。前門幅は0.7mで、間に1石置き框石としている。



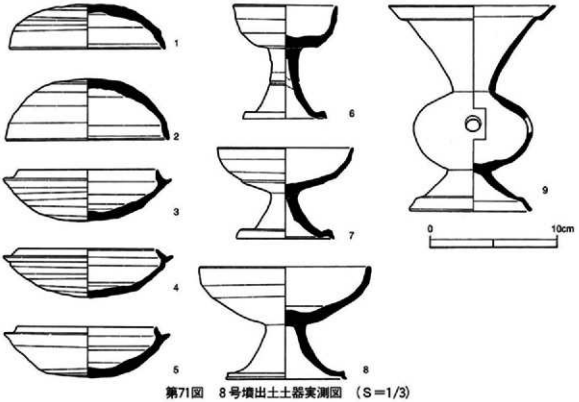
第69図　8号墳石室平面図　(S＝1/40)

羨道　羨道は、使用している石材もその積み方も玄室前室とは違い、大小様々な塊石を積み上げている。

排水施設　羨道床面に、中位に段を有して2段に掘り込み、中位の段に蓋石を置き開口方向に傾斜させ排水溝を構築している。石室内の掘り方が開口方向に向かって傾斜するように掘り込んであり、前門の框石の両袖石側に若干の隙間があることなどから、石室内に流入した水を掘り方を利用して流し、羨道の排水溝に集めて石室外に排水したものと推測される。



第70図　8号墳石室内遺物出土状況図　（S＝3/80）



第71図　8号墳出土土器実測図　(S＝1/3)

第27表　8号墳出土土器観察表

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)		手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
71-1 31-1	坏 蓋 須恵器	墳裾部 (南)	口径 器高	12.2 3.5	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	口縁部に焼きひずみ。
71-2 31-2	坏 蓋 須恵器	墳裾部 (南)	口径 器高	12.7 4.9	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	焼きひずみ。
71-3 31-3	坏 身 須恵器	墳裾部 (南)	口径 受部径 器高	10.9 13.2 3.9	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 褐灰色 内 灰白色	焼きひずみ有り。
71-4 31-4	坏 身 須恵器	墳裾部 (南)	口径 受部径 器高	10.9 13.4 3.9	外面底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 内面底部に指頭圧痕が残る。 ロクロ右回転。	密	やや良	外 灰白色 内 灰白色	
71-5 31-5	坏 身 須恵器	墳裾部 (南)	口径 受部径 器高	10.9 13.1 4.0	外面底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 褐灰色 内 灰白色	
71-6 31-6	高 坏 須恵器	前室内	口径 器高 脚部径	8.2 8.9 6.7	坏部・脚部ともに回転ナデ。ロクロ左回転。 脚部内側基部にシボリ痕有り。 脚部ハリツケ。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	口縁部に焼きひずみ有り。
71-7 31-7	高 坏 須恵器	前室内	口径 器高 脚部径	10.6 7.1 7.8	回転ナデ。ロクロ右回転。 脚裾部上端に面取りがなされている。 脚部ハリツケ。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
71-8 31-8	高 坏 須恵器	前室内	口径 器高 脚部径	13.3 8.8 9.5	坏部内面、脚部内面及び外面の一部は回転ナデ。 他は摩滅し不明。ロクロ右回転。 脚部ハリツケ。	粗 含砂粒少	不良	外 灰白色 内 灰白色	
71-9 31-9	台付瓶 須恵器	閉道部	口径 器高 脚部径	12.9 16.2 9.7	体部外面底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰色 内 灰色	

（4）遺物

出土状況　石室内からは主に須恵器と装身具、鉄製品が出土した。それらは、全体に散乱し出土しており、古墳築造以後に攪乱をうけているものと思われる。その中で、比較的まとまって出土したものは、前室の中央から左壁にかけて馬具があるくらいで、他は、元位置をとどめていない。

また、開口部西側の墳丘裾部から、木根に絡まって須恵器の坏が5個出土している。そのうち、坏

身の上に坏蓋をともに内面を上にして出土したものが2セット（第71図　1と5、2と4）あり、出土した下位の崖面からも坏の破片が出土していることなどから、これらは祭祀に関するものと考えられる。

出土遺物

土器（第71図　図版31）

計測表は第27表に掲げる。

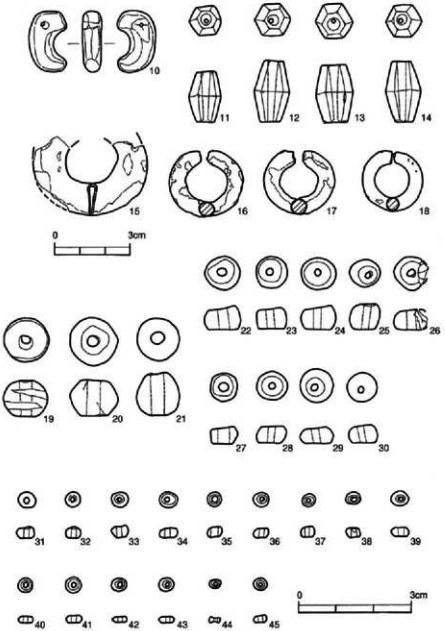
装身具（第72図　図版32）

勾玉　10は水晶製。玄室より出土。

切子玉　11～14は水晶製。断面は6角形で、表面は丁寧に仕上げており、片面穿孔である。

耳環　15は中空銅芯金張りの大型の耳環である。前室より出土。16は奥壁裏側の掘り方埋土中から出土、古墳築造の際の混入と思われる。17は玄室内、18は羨道より出土。

計測表は第28表に掲げる。



第72図　8号墳出土装身具実測図　（S＝2/3、S＝1/1）

第28表　8号墳出土耳環計測表

挿図	図版	外法径（cm）長径・短径	内法径（cm）長径・短径	断面径（cm）長径・短径	突合部（cm）幅	備　考
72-15	32-15	4.58	2.00	1.31×0.39	—	中空銅芯金張
72-16	32-16	2.94×2.63	1.66×1.57	0.63×0.59	0.21	銅芯
72-17	32-17	2.94×2.55	1.54×1.36	0.68×0.61	0.3	銅芯
72-18	32-18	2.42×2.33	1.38×1.36	0.55×0.52	0.05	銅芯

第29表　8号墳出土小玉計測表

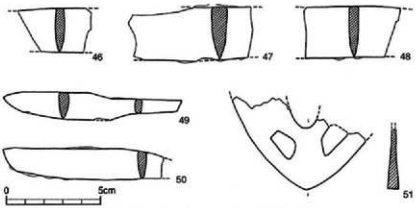
（　）は残存値

挿　図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材　質	色　調
72-19	12.0	3.5	9.4	ガラス	銅記
72-20	12.9	3.4	9.4	ガラス	オリーブ
72-21	11.4	3.5	10.4	ガラス	コバルトブルー
72-22	9.8	3.0	6.5	ガラス	コバルトブルー
72-23	8.4	2.0	5.6	ガラス	コバルトブルー
72-24	9.3	2.0	6.5	ガラス	コバルトブルー
72-25	8.1	1.9	6.8	ガラス	コバルトブルー
72-26	(8.8)	2.7	(5.6)	ガラス	コバルトブルー
72-27	7.4	2.8	4.6	ガラス	コバルトブルー
72-28	8.4	1.8	4.9	ガラス	コバルトブルー
72-29	9.1	2.0	4.5	ガラス	コバルトブルー
72-30	7.9	1.7	4.8	ガラス	コバルトブルー
72-31	4.8	2.0	2.8	ガラス	青緑色
72-32	4.1	1.5	2.6	ガラス	青緑色
72-33	4.6	1.5	3.2	ガラス	青緑色
72-34	4.8	1.8	2.7	ガラス	グリーン
72-35	4.0	2.0	2.8	ガラス	青緑色
72-36	4.2	1.5	2.4	ガラス	青緑色
72-37	3.5	1.2	2.8	ガラス	青緑色
72-38	3.8	1.8	2.5	ガラス	青緑色
72-39	4.8	1.7	2.5	ガラス	青緑色
72-40	3.9	1.5	1.7	ガラス	スカイブルー
72-41	4.2	1.5	2.1	ガラス	青緑色
72-42	3.9	1.8	1.9	ガラス	スカイブルー
72-43	4.0	1.3	1.7	ガラス	スカイブルー
72-44	3.1	1.2	1.6	ガラス	純スカイブルー
72-45	3.5	1.3	2.1	ガラス	青緑色

小玉　19は雁木玉。玄室内より出土。コバルトブルーを基調にし、青緑色の帯が巡る。他の小玉の計測表は第29表に掲げる。

鉄器類（第73図　図版32）

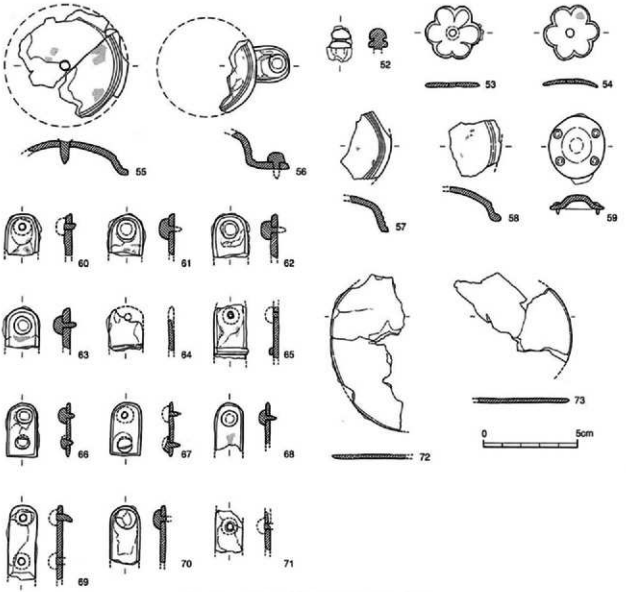
鉄刀　46、47、48は鉄刀片。ともに玄門付近から出土。



第73図　8号墳出土鉄製品実測図　（S＝1/2）

鐏　51は平面形が倒卵形の鐏と思われる。2窓の透孔が残る。

刀子　49、50は刀子。ともに前室から出土。49は完形で、全長9.5cm、身部長6.6cm、身の厚さ0.5cm、両関である。50は茎部欠損。残存長8.5cm、身部長8.5cmで、身の厚さ0.5cmである。



第74図　8号墳出土馬具実測図　（S＝1/2）

馬具（第74図　図版32）

52は宝珠飾りである。上段径0.8cm、厚さ0.5cm、下段径0.9cm、厚さ0.3cmの２段の鋲頭を持つ。鉄地金銅張りで、55もしくは56の宝珠飾りの可能性がある。

53・54は花形座である。53は直径2.9cm、厚さ0.3cm。54は直径2.8cm、厚さ0.4cmでやや内湾する。ともに６弁で鉄地金銅張り。

55・56・57・58は辻金具で、全て前室から出土した。55は鉢部の推定径6.5cm、高さ1.8cmを測り、脚部は欠損している。鉢部側面に沈線が３条巡り、鉢内部には鋲が残る。56より一回り大きく雲珠の可能性もあろう。56は鉢部の大半を欠失するが、脚部が１脚だけ残存していた。鉢部は推定の径が5.3cmで、側面には沈線が３条巡っている。脚部は長さ1.9cm、幅1.8cm、厚さ0.35cmを測り、鋲頭径0.9cmの鋲が残っていた。57は鉢部の推定径5.0cm、高さ2.0cm。鉢部の断面は半球状で、脚部は全て欠失している。鉢部には３条の沈線が巡り、鉢部の推定径もほぼ等しいことから、56と同一個体の可能性が有る。58は鉢部側面に沈線が２条巡る。以上４点の辻金具は、いずれも鉄地金銅張りである。

59は鉄地金銅張りの飾金具である。長さ3.2cm、幅8cm。中央を長径1.8cm、短径1.4cm、高さ0.4cmの楕円形に打ち出す。四隅に鋲頭径0.5cmの笠鋲を持つ。８号墳の馬具の中で、ただ一つ羨道部から出土した。

60・61・62・63・64・65・68・70は辻金具の脚である。60は長さ2.2cm、幅1.8cm、厚さ0.35cm。鋲頭は欠失する。鉄地金銅張りで一部鍍金が残る。61は長さ2.0cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm。鋲頭の径は1.0cmで、鋲端は欠失している。鉄地金銅張りで一部鍍金が残る。62は長さ2.2cm、幅1.8cm、厚さ0.35cm。鋲頭の径は1.0cmで、これも鋲端は欠失する。鉄地金銅張りで一部鍍金が残る。63は長さ2.0cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm。径が0.9cmの鋲頭を持ち、鋲端も残っている。鉄地金銅張りで一部鍍金が残る。64は長さ1.8cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm。鋲は欠失しているが基部に責金具痕が残り、これも鉄地金銅張りである。以上の５点は法量的にもほぼ同じで、56の脚と同じタイプである。

65は長さ2.8cm、幅1.8cm、厚さ0.25cm。鋲頭、鋲端共に欠失しているが、基部に責金具が残る。鍍金が残り、鉄地金銅張りである。68は長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm。径が0.9cmの鋲頭と鋲端が残る。鉄地金銅張りで一部鍍金痕有り。70は長さ3.0cm、幅1.5cm、厚さ0.25cm。径が1.0cmの鋲頭が残るが鋲端は欠失。鉄地金銅張りで一部鍍金が残る。

66・67・69・71は革帯端金具である。66は長さ2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm。径が0.9cmと0.7cmの２つの鋲頭が残るほぼ完形品である。67は66と同タイプであるが、鋲頭は2つとも欠失している。長さ2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmと法量も同じである。共にかすかに鍍金痕が有り、鉄地金銅張りと思われる。69は長さ3.9cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm。鋲頭は欠失しているが、鋲痕が２カ所残り、鋲端も１つだけ残っていた。66・67と比べて、全長、鋲間とも長目である。71は長さ2.1cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm。端部を欠失し、鋲痕も1カ所しか残っていないが、幅と厚さから69と同タイプだと思われる。共に鉄地だが、鍍金痕は確認できなかった。

72と73は厚さ0.2cm。鉄地で、鏡板片と思われる。

（豊島）

9．9号墳

（1）調査前の状況

9号墳は、東に張り出す丘陵の北端に位置し、標高は約13mである。10号墳の北側に位置する。丘陵の先端部は土砂を採取されたため、崖となっており、本墳は奥壁側の右壁の一部が露出していた。

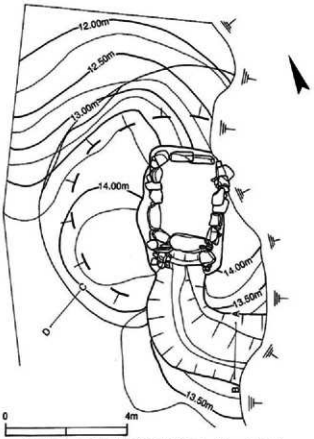
調査前は雑木が茂っていたが、墳丘の高まりははっきりと認められた。

（2）墳丘

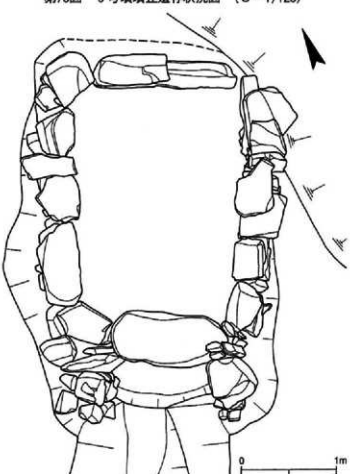
墳丘の頂部は後世の削平により破壊されており、東側の裾部は土砂の採取によって削り取られている。北側は急斜面になっており、土砂が流出していると考えられる。よって、裾部が旧状を留めているのは南西部と南東側の一部のみである。トレンチの土層観察から、径9.4mの円墳と考えられる。古墳の基底面は古墳築造時の地表面であるにぶい黄褐色土層で、厚さは30cm程度である。基底面上には墳丘盛土が20cmばかり残っている。

古墳の基本的な築造方法は、まずトレンチの土層観察から、上位である西側斜面を掘削し、地山整形を行う。次に、古墳築造時の地表面から墓坑・墓道を掘り込む。南西側の墳丘裾部は整形した地山から墓道を掘り込んでいる。さらに、墳丘盛土を行った後、周溝を掘り込み、掘削した地山の土を封土として用いている。

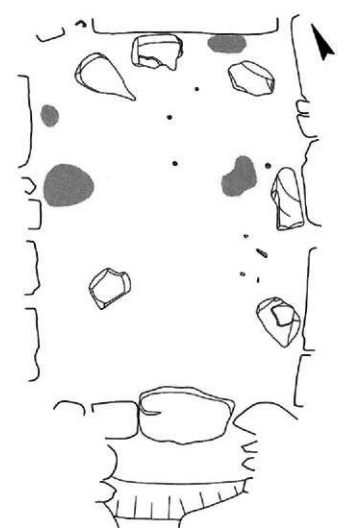
石室の西側に地山整形を行った周溝が確認できた。形状は馬蹄形



第75図　9号墳墳丘遺存状況図　（S＝1/125）



第76図　9号墳石室平面図　（S＝1/40）



第77図　9号墳石室内遺物出土状況図　（S＝3/80）

と思われる。幅は周溝の西端が調査区外にかかるため確認できないが推定で、1.4m、深さは推定で30cmで、断面形は浅い皿状を示すと思われる。東側は墓道が東へ巡るようだが、崖によって削られている。

（3）石室

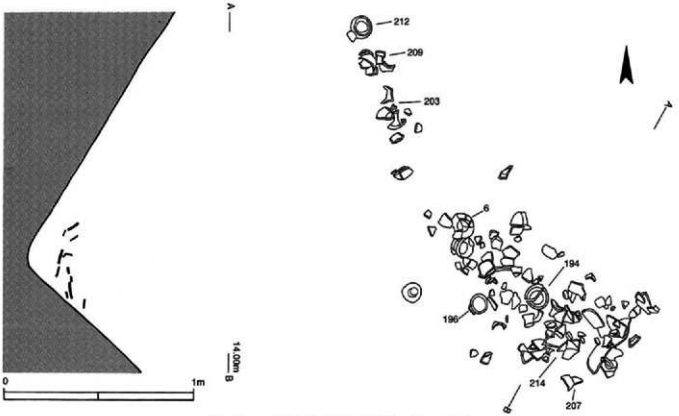
内部主体は、ほぼ南西に開口する両袖式の竪穴系横口式石室である。主軸はN26°Eである。石室の規模は全長で3.6m、玄室の長さは2.6m、幅は奥壁側で1.9m、中央部で1.85m、框石付近で1.8mである。石材は花崗岩である。

玄室　玄室の奥壁は床面を15cm程度掘り下げて、1.6×70cmの石を横長に置いて腰石をとしている。その上に80×40cmの石が左壁側に残っているが、右壁側は崩落している。石の間には小石を詰めている。右壁側は奥壁より幅は半分の大きさの石を横長に用い、その上に15×50cmの石を、さらに30×60cm内外の石を3段にわたって積んでいる。石の間には小石を詰めている。左壁側は奥壁側の腰石が右壁側よりも一回り大きいが、その他の基部石は右壁側とほぼ同じ大きさである。腰石の上には30×60cmの石を3段にわたって積んでいる。石の間には小石を詰めている。右壁側、左壁側とも水平方向に目地をそろえている。

床面は墓坑底の地山に若干の砂礫を敷いており、敷石はない。玄門部の右壁側は50×70cmの石の上に50×20cmの石と、50×15cmの石を壁に接するようにして立てているが、左壁側は40×100cmの石と30×75cmの2つの石を壁に接するように立てている。この内側の石の上には50×15cmの石を積み、袖石の上を120×30cmの石を楣石として置いている。玄門幅は70cm。袖石の間には1枚の板石が置かれ、框石として石室の内外を画している。

また、玄室床面上に50×40cm程度の石が平坦面を上側に向けて左壁側に2つ、右壁側に3つ、奥壁中央部に接するように1つ置かれている。埋葬時に木棺を置くための棺台の可能性がある。

羨道　羨道の長さは1.0m、幅は0.9m。袖石から外側に向かってハの字状に広がっている。両側壁とも床面から数cm高い状態で幅40cm、高さ30cm程度の石を4段にわたって玄室の側壁と水平方向に



第78図　9号墳遺物出土状況図①　(S＝1/20)

目地をそろえて据えている。右壁側の1段目の石の下には小さな角石を詰めている。羨道の床面は、玄室の床面とほぼ同じ高さで開口部側に40cmほどのぴたところで10cmほどあがり、墓道へと続く。

閉塞施設　框石の上に5cm程度の土を盛り、3枚の板石と数個の塊石が据えられて閉塞石を構成している。

墓道　羨道部の床面が10cmほどあがったところからまっすぐ墓道が伸び、約2mのところで墳丘裾部を巡るように東側、つまり古墳築造時は海であった方向へ伸びているが、約1.5mのところで盛によって失われている。墓道の深さは約1.2m、幅は上端で1.8m、下端で0.3mである。この墓道からは多くの土器が出土している。

（4）遺物

出土状況　玄室内からは、床面から装身具と鉄製品が出土した。いずれの遺物も玄室の中央から奥壁との間で出土している。装身具のうち、ガラス小玉は玄室中央の両側壁側に分かれて出土し、土玉は奥壁のやや右壁寄りでまとまって出土している。耳環は、玄室中央やや奥壁寄りのところと右壁側で出土している。出土した鉄製品は鉄鏃、刀子、釘。装身具は耳環4点、ガラス小玉134点、土玉49点。

また、開口部の西側の周溝部分から須恵器片がまとまって出土した。墓道部分からも土器がまとまって出土している。古墳築造時、もしくは追葬時の祭祀に関連するものとみられる。墓道からの出土遺物に関しては、墓道の上位側にあたる墳丘上からほぼ完形の須恵器の高坏が2点出土しており、墓道の斜面上からも土器片が出土していることから、墳丘上で祭祀を行った可能性もある。

出土遺物

鉄製品（第80図　図版33）

鏃（1・2）　1は柳葉式鉄鏃で、残存長4.6cm。2は残存長2.3cmで、箆被部と茎部の一部のみ残る。

釘（3）　残存長3.5cmで断面幅は0.2×0.3cmである。

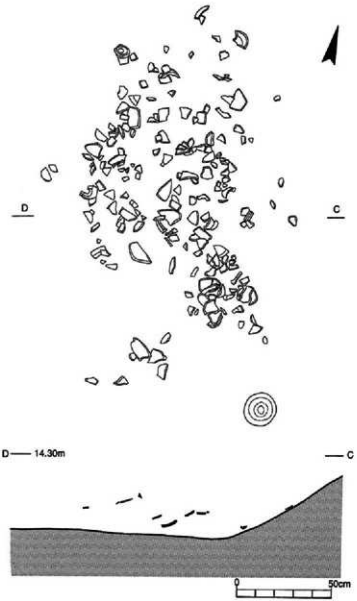
刀子（4・5）　4は残存長8.7cm、身部長4.9cm。両関で棟関はなだらかである。責金具が残る。5は残存長8.0cmで身部長は7.4cm。

装身具（第81・82図　図版33）

耳環（6～9）　計測表を第30表に掲げる。

小玉（11～183）　11～49は土玉、50～183はガラス小玉である。ガラス小玉は直径2mm前後のものが多く、玄室中央部に左右に分かれて出土していることから手玉の可能性もある。計測表は第31、32表に掲げる。

土製品（10）　10は切子玉を模しており、円形に近い四角形である。

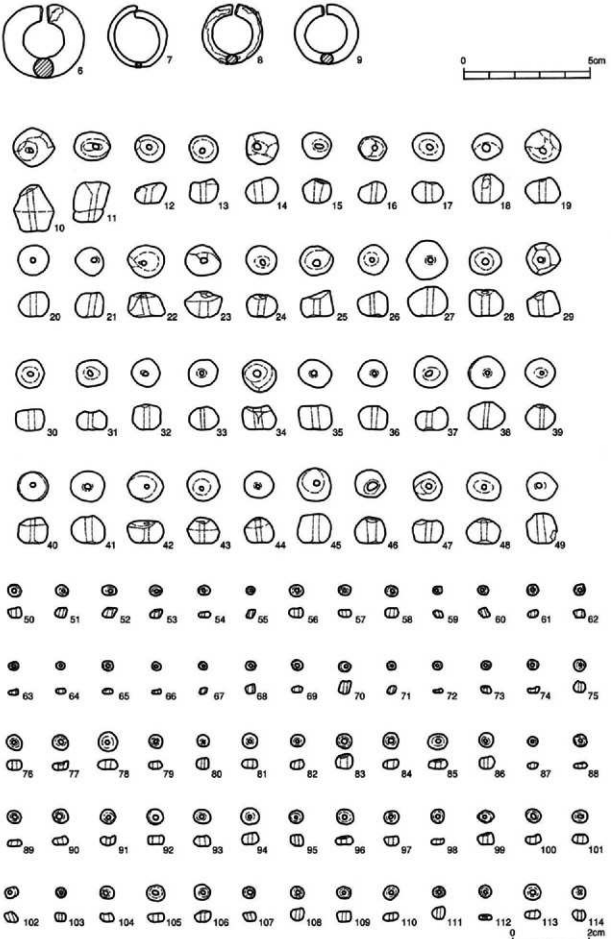


第79図　9号墳遺物出土状況図②　（S＝1/20）

第80図　9号墳出土鉄製品実測図　（S＝1/2）

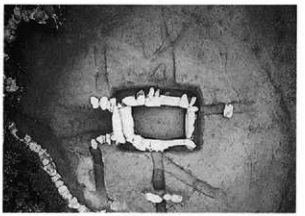
第30表　9号墳出土耳環計測表

挿図	図版	外法径（cm） 長径・短径	内法径（cm） 長径・短径	断面径（cm） 長径・短径	突合部（cm） 幅	備　考
81-6	33-6	3.30×2.93	1.69×1.40	0.82×0.81	0.2	銅芯銀張り
81-7	33-7	2.50×2.38	1.95×1.73	0.27	－	鉄芯
81-8	33-8	2.47×2.36	1.67×1.48	0.50×0.45	0.08	銅芯金張り
81-9	33-9	2.55×2.35	1.68×1.50	0.50×0.40	0.07	銅芯銀張り



第81図　9号墳出土装身具実測図①　（S＝2/3、S＝1/1）

3号墳調査前



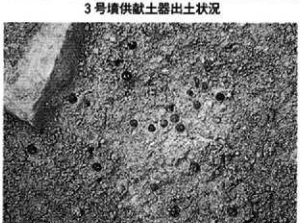
3号墳全景

3号墳墳丘

3号墳周溝部遺物出土状況

3号墳供献土器出土状況

3号墳羨道部遺物出土状況



3号墳玄室内小玉出土状況

3号墳石室完掘

4号墳調査前

4号墳全景

4号墳墳丘

4号墳北側周溝部遺物出土状況

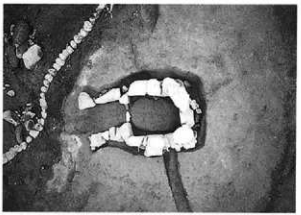
4号墳玄門閉塞

4号墳玄門閉塞除去後

4号墳玄室内遺物出土状況

4号墳石室完掘

5号墳調査前



5号墳全景

5号墳墳丘

5号墳玄室内提瓶出土状況

5号墳玄室内耳環出土状況

5号墳玄室内敷石

5号墳玄門閉塞

5号墳石室完掘

6号墳調査前

6号墳全景

6号墳石室完掘

7号墳調査前

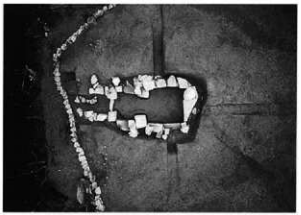
7号墳墳丘

7号墳玄門閉塞

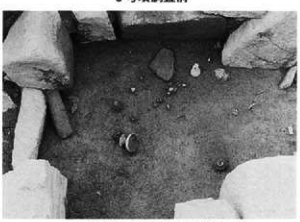
7号墳玄門閉塞除去後

7号墳石室完掘

8号墳調査前



8号墳全景



8号墳前室遺物出土状況

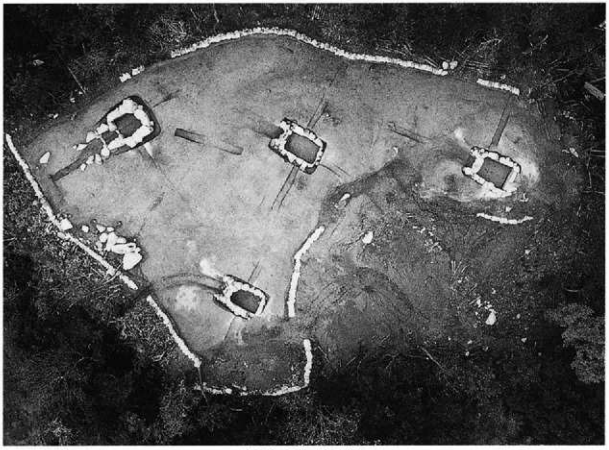
8号墳玄室内雁木玉出土状況

8号墳西側墳丘裾部遺物出土状況

8号墳玄室内馬具出土状況

8号墳東側列石

8号墳石室完掘



大浦古墳群Ⅱ地区全景

9号墳調査前

9号墳全景

9号墳墳丘

9号墳西側周溝部・東側墓道遺物出土状況

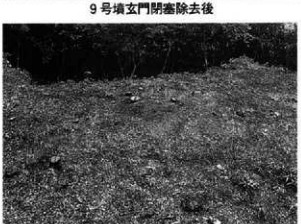
図版16

9号墳墓道遺物出土状況

9号墳玄門閉塞

9号墳玄門閉塞除去後

9号墳石室完掘

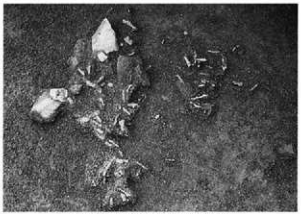


10号墳調査前

10号墳全景

10号墳墳丘

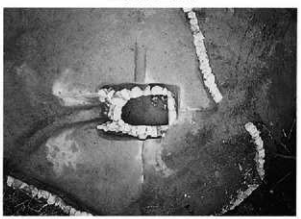
10号墳玄門閉塞



10号墳玄室内鉄鏃出土状況

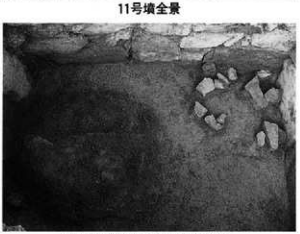
10号墳石室完掘

11号墳調査前



11号墳全景

11号墳墳丘



11号墳玄室内砂礫層検出状況

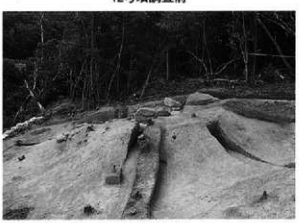
11号墳玄門閉塞

11号墳玄門閉塞除去後

11号墳開口部東側遺物出土状況

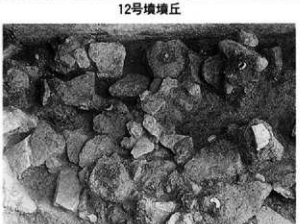
12号墳調査前

12号墳全景



12号墳墳丘

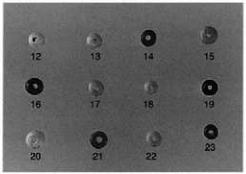
12号墳開口部東側供献土器出土状況

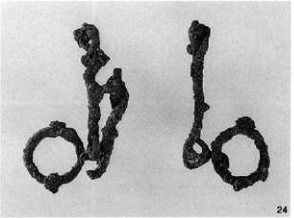


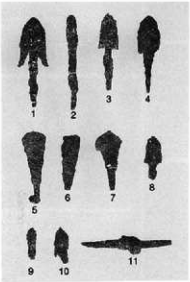
12号墳玄室内遺物出土状況

12号墳玄室内敷石

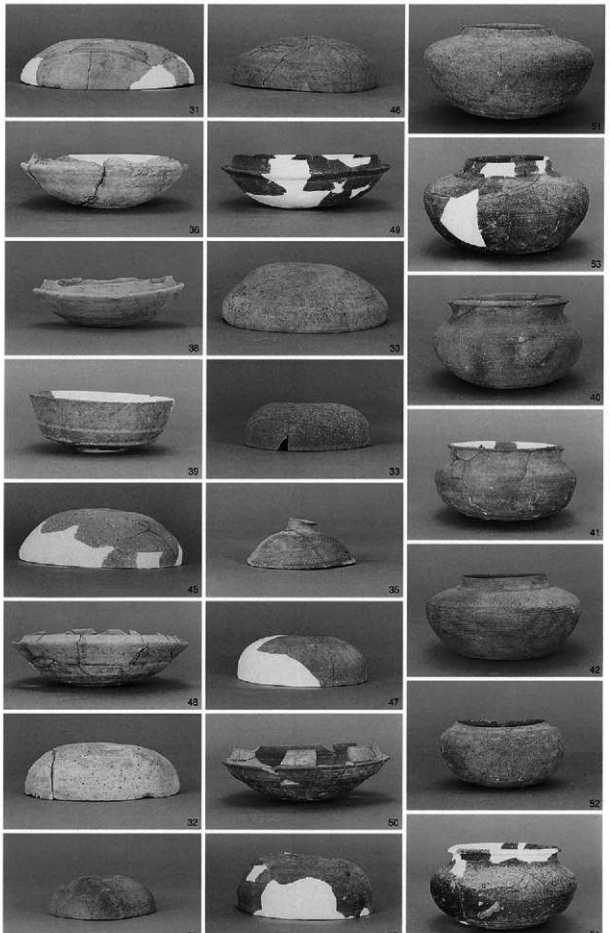
12号墳前室内排水溝



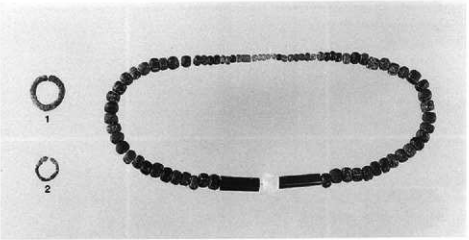


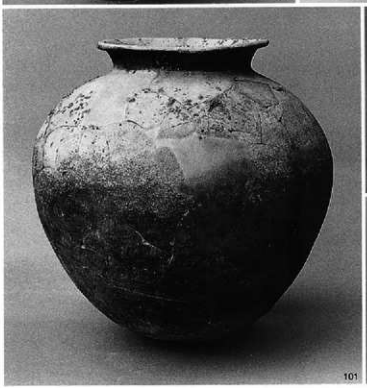


1号墳出土遺物①

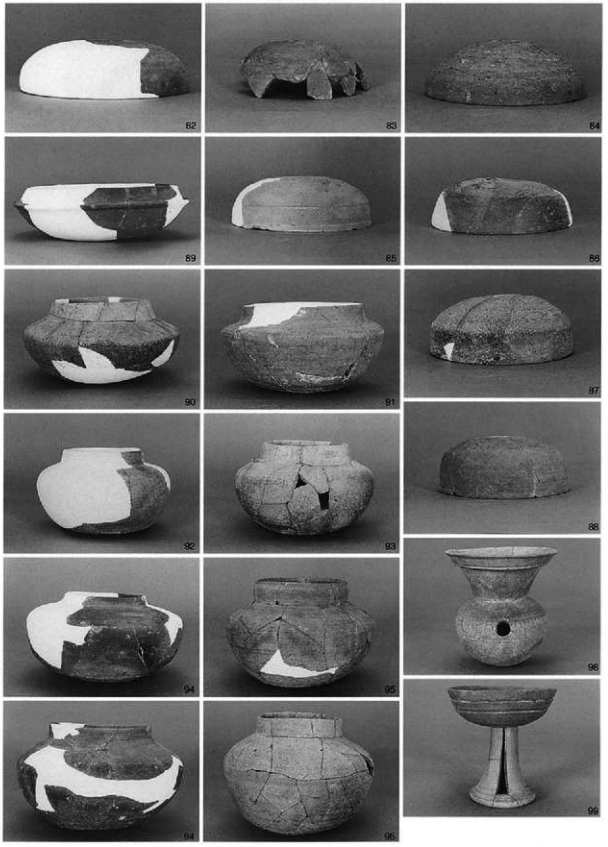


1号墳出土遺物②

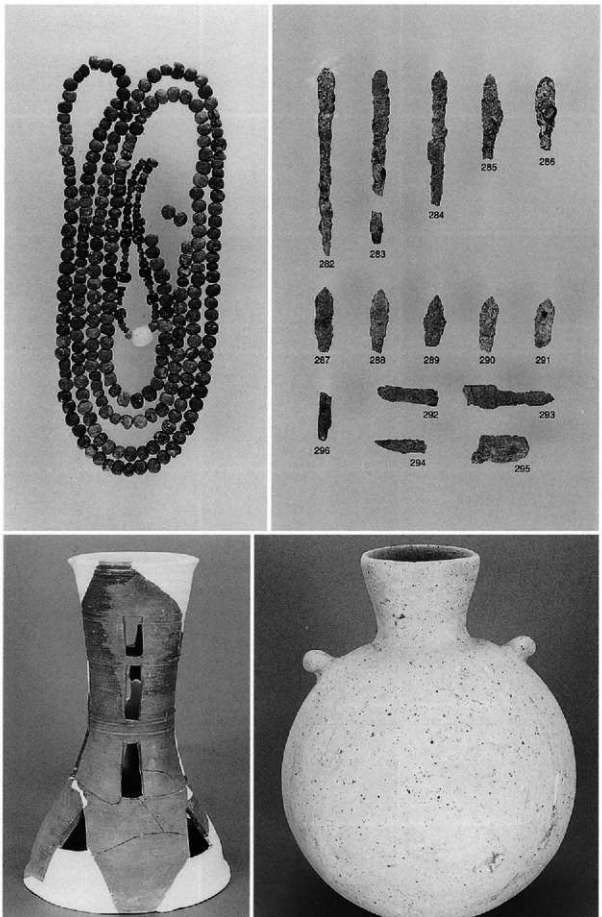




2号墳出土遺物①



2号墳出土遺物②

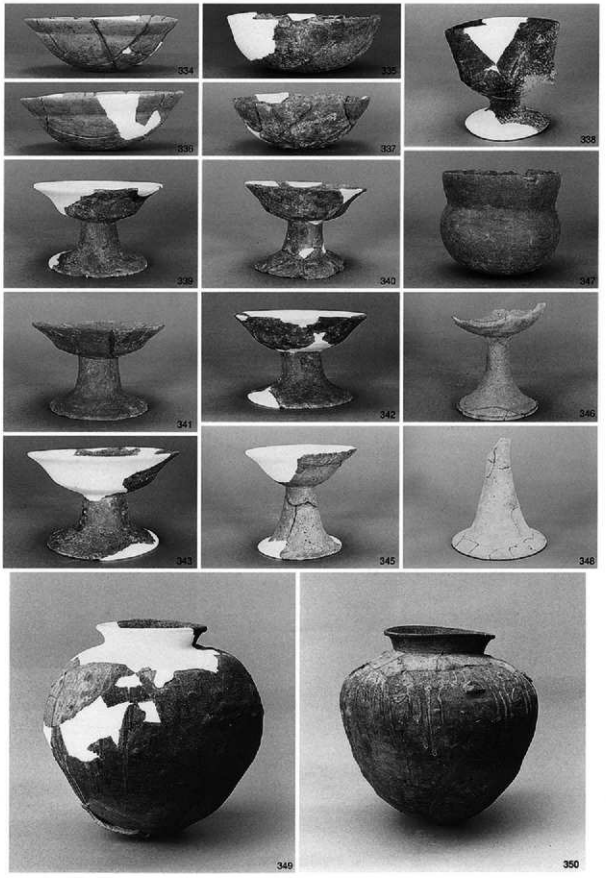

282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
352
353

3号墳出土遺物①

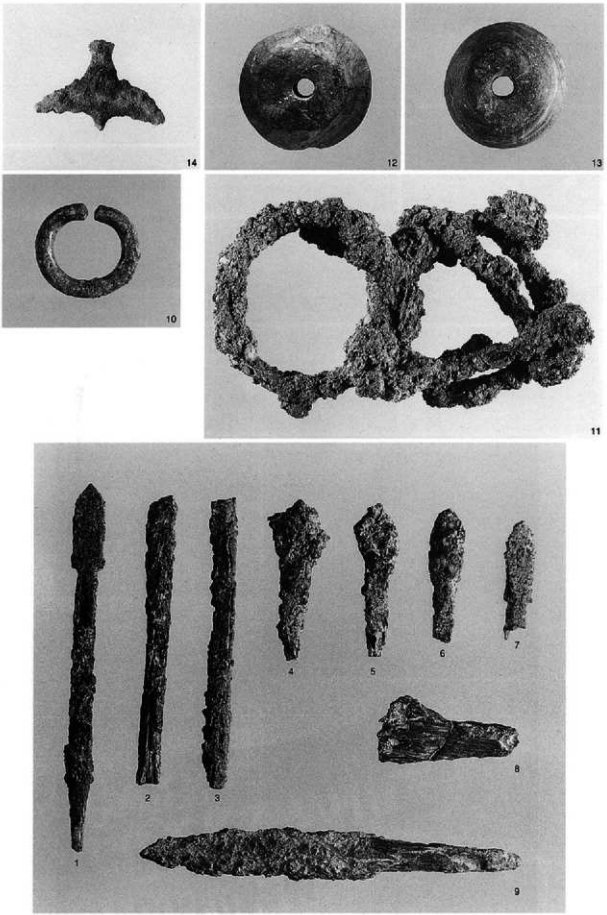
297
298
299
300
301
307
308
309
310
311
302
303
304
305
306
312
313
314
315
316
317
318
319
320

3号墳出土遺物②

3号墳出土遺物③



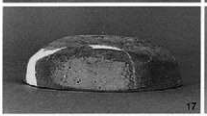
3号墳出土遺物④



4号墳出土遺物①

15

16


17

18

19

20

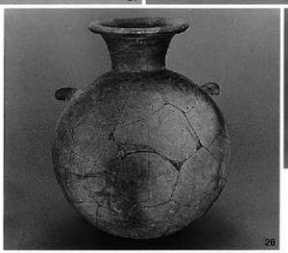
21

22

23

24

25


26

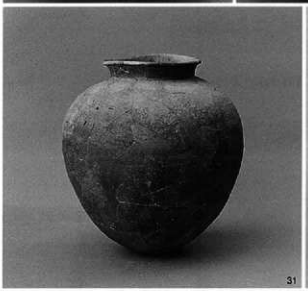
29

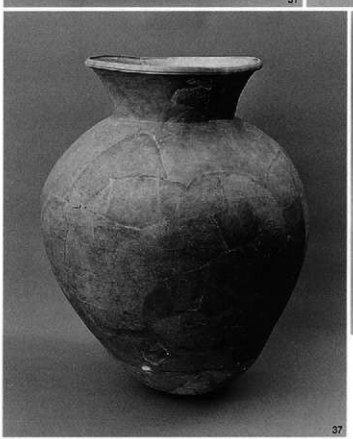
28

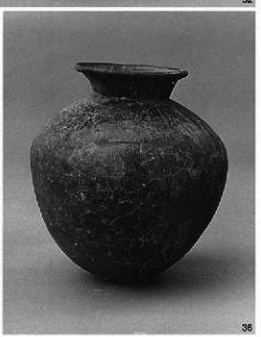
27

30

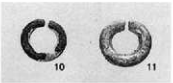
4号墳出土遺物②

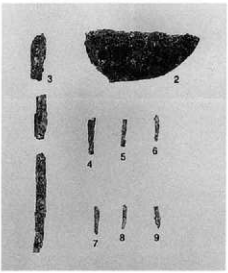




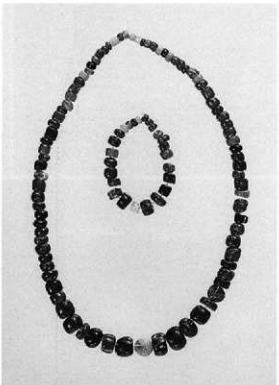


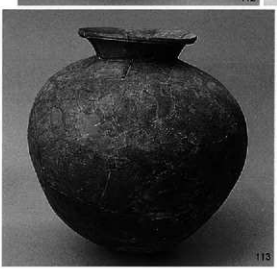
4号墳出土遺物③





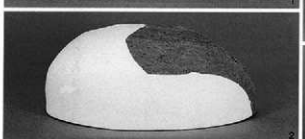
5号墳出土遺物





6号墳出土遺物

7号墳出土遺物



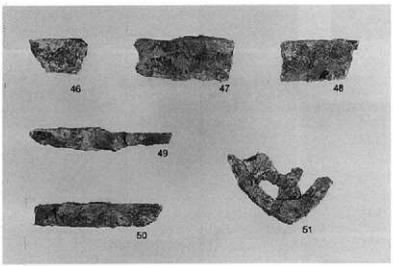
8号墳出土遺物①

15

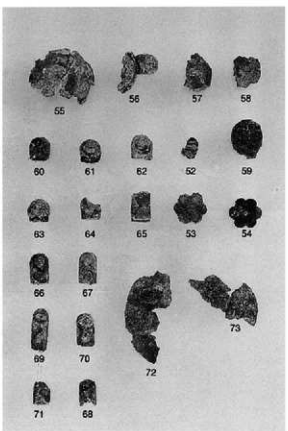
16

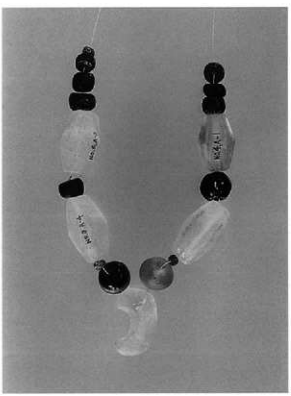
17

18

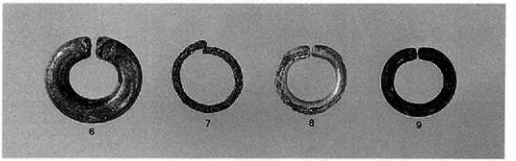

46
47
48
49
50
51

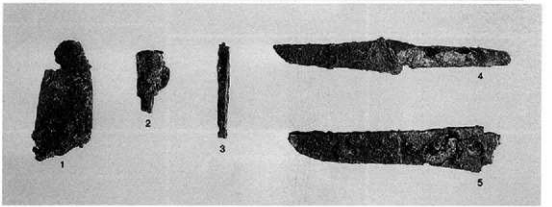
19


55
56
57
58
60
61
62
52
59
63
64
65
53
54
66
67
73
69
70
72
71
68

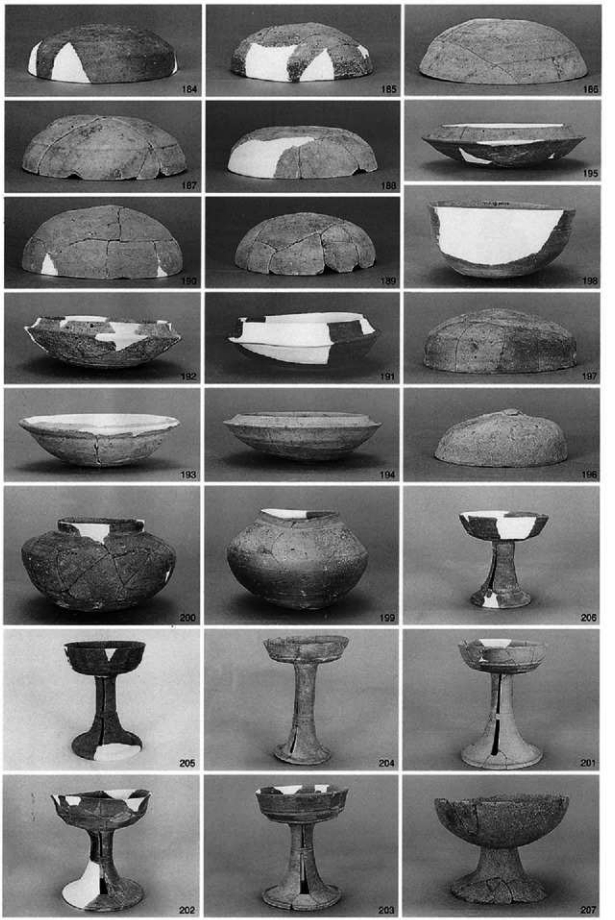


8号墳出土遺物②

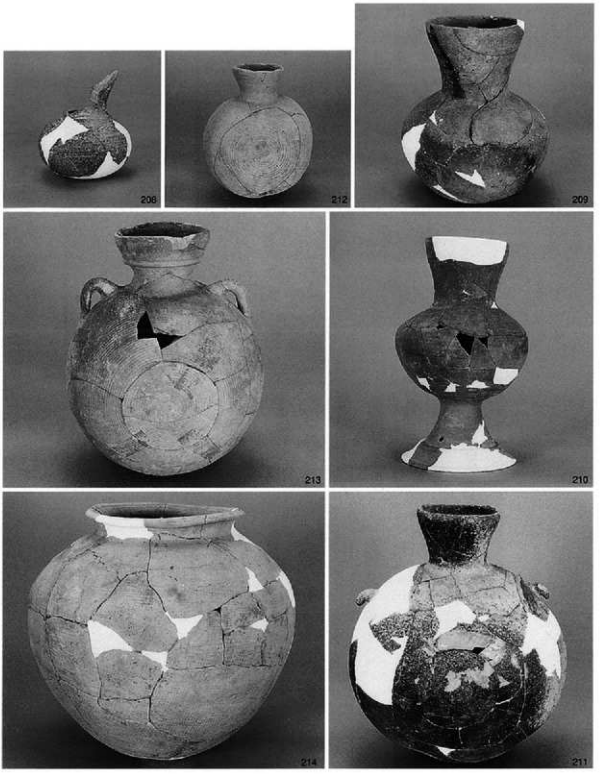




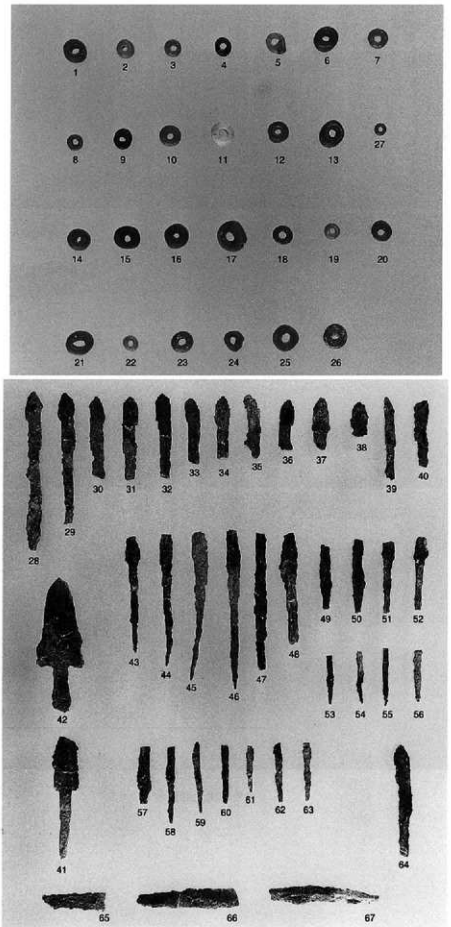
9号墳出土遺物①


184
185
186
187
188
195
190
189
198
192
191
197
193
194
196
200
199
206
205
204
201
202
203
207

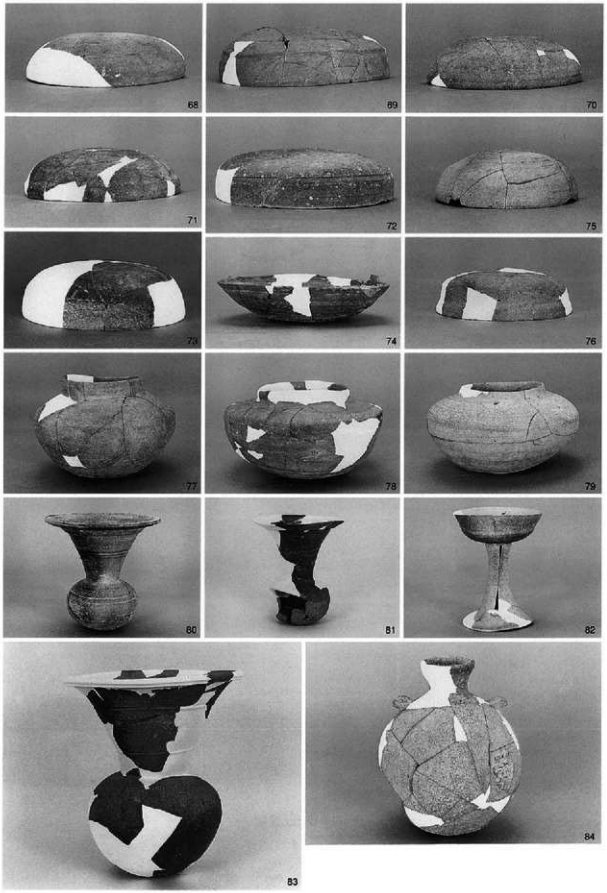
9号墳出土遺物②



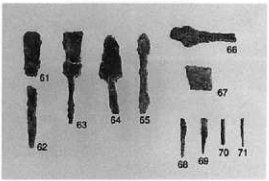
9号墳出土遺物③

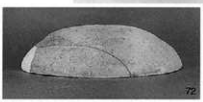

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
27
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67

10号墳出土遺物①

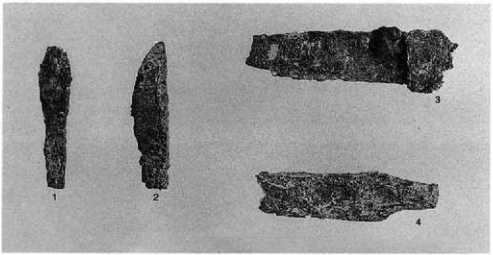


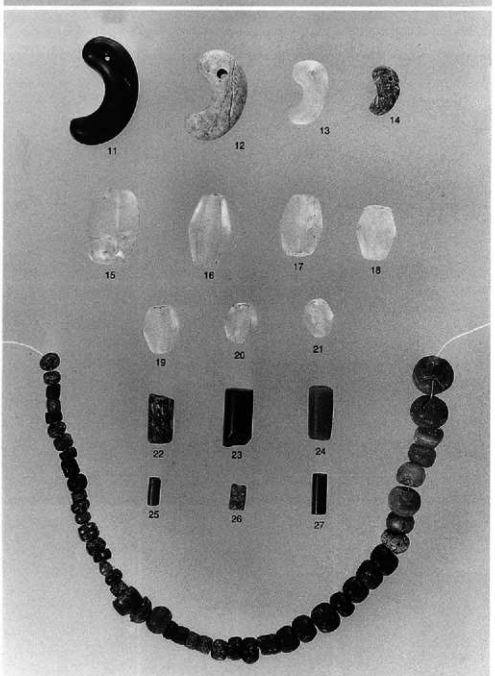
10号墳出土遺物②



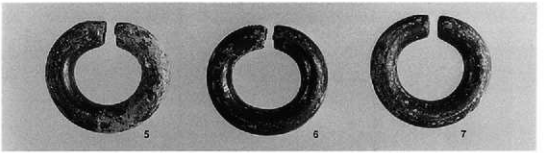


11号墳出土遺物

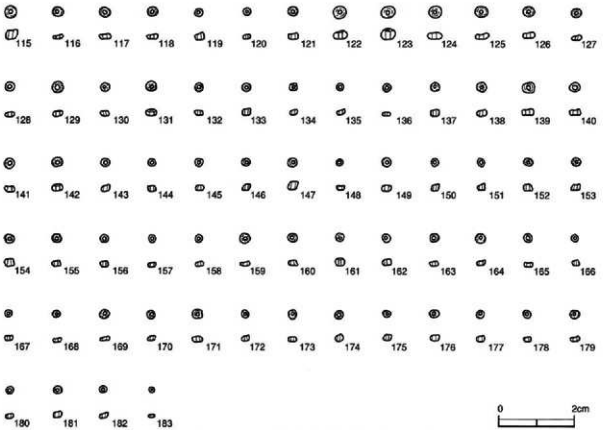




12号墳出土遺物①



12号墳出土遺物②



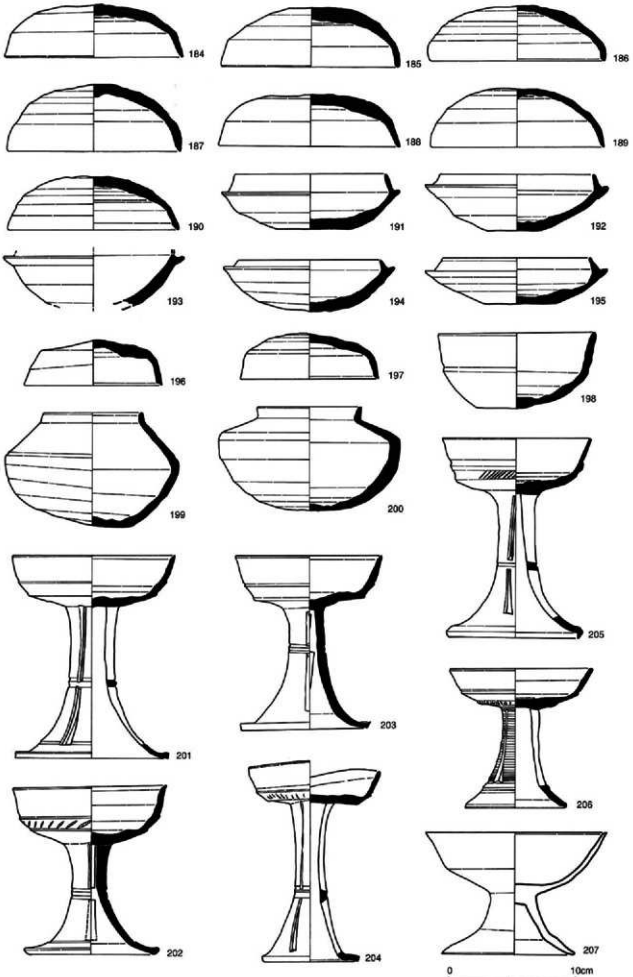
第82図　9号墳出土装身具実測図②　(S＝1/1)

第31表　9号墳出土小玉計測表①

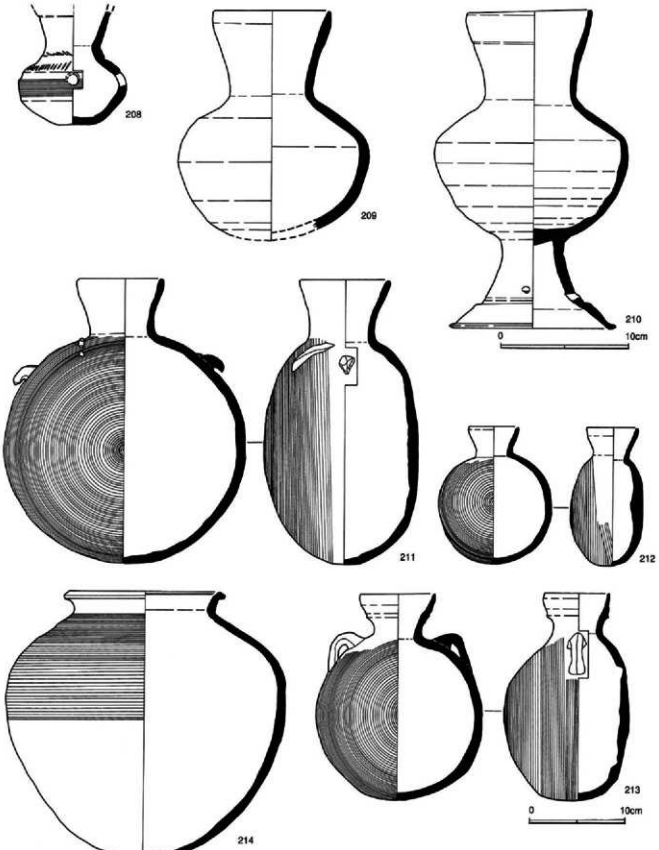
挿図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材質	色調
81-11	8.6	5.0	10.7	土	黒褐色
81-12	8.0	1.8	5.5	土	黒褐色
81-13	7.8	1.8	6.5	土	黒褐色
81-14	8.8	2.0	7.0	土	黒褐色
81-15	7.5	2.5	6.2	土	黒褐色
81-16	7.5	1.2	5.5	土	黒褐色
81-17	8.2	1.8	5.5	土	黒褐色
81-18	7.7	2.0	7.7	土	黒褐色
81-19	8.9	1.6	6.7	土	黒褐色
81-20	7.0	1.7	6.6	土	黒褐色
81-21	7.6	1.4	6.7	土	黒褐色
81-22	9.8	1.7	6.5	土	黒褐色
81-23	9.7	2.6	6.8	土	黒褐色
81-24	8.0	1.6	6.2	土	黒褐色
81-25	8.7	2.0	7.0	土	黒褐色
81-26	8.0	1.3	6.5	土	黒褐色
81-27	10.6	1.6	(7.9)	土	黒褐色
81-28	8.8	2.0	7.0	土	黒褐色
81-29	8.6	1.5	6.9	土	黒褐色
81-30	7.6	1.7	5.5	土	黒褐色
81-31	7.8	1.5	5.0	土	黒褐色
81-32	7.6	1.5	6.5	土	黒褐色
81-33	7.8	1.1	6.1	土	黒褐色
81-34	9.3	2.0	6.6	土	黒褐色
81-35	8.7	1.9	6.5	土	黒褐色
81-36	7.8	1.3	6.6	土	黒褐色
81-37	8.7	2.0	6.0	土	黒褐色
81-38	9.5	1.0	7.3	土	黒褐色
81-39	8.0	1.0	6.3	土	黒褐色
81-40	8.1	1.2	6.7	土	黒褐色
81-41	9.0	1.6	7.3	土	黒褐色
81-42	9.4	1.2	6.0	土	黒褐色
81-43	8.4	1.0	7.0	土	黒褐色
81-44	7.7	1.2	6.8	土	黒褐色
81-45	9.0	1.5	7.7	土	黒褐色
81-46	8.0	3.5	6.8	土	黒褐色
81-47	7.8	2.0	6.0	土	黒褐色
81-48	8.8	1.3	7.0	土	黒褐色
81-49	8.1	2.0	8.1	土	黒褐色
81-50	3.7	1.5	3.0	ガラス	黄色
81-51	3.3	1.0	2.8	ガラス	コバルトブルー
81-52	3.7	1.2	2.6	ガラス	コバルトブルー
81-53	3.1	1.2	2.3	ガラス	ダークオリーブ
81-54	3.0	1.0	1.7	ガラス	スカイブルー
81-55	2.2	0.8	2.1	ガラス	暗褐色
81-56	3.7	1.2	2.8	ガラス	青緑色
81-57	3.3	1.0	2.2	ガラス	コバルトブルー
81-58	3.4	1.2	2.6	ガラス	青緑色
81-59	2.3	1.0	1.8	ガラス	暗褐色
81-60	2.7	1.2	2.4	ガラス	暗褐色
81-61	2.8	1.0	1.9	ガラス	スカイブルー
81-62	2.9	1.2	2.1	ガラス	青緑色
81-63	2.3	1.2	1.6	ガラス	暗褐色
81-64	2.3	1.0	1.5	ガラス	暗褐色

第32表　9号墳出土小玉計測表②

挿図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材質	色調
81-65	2.8	1.1	1.3	ガラス	ダークオリーブ
81-66	2.3	1.2	1.2	ガラス	暗褐色
81-67	2.2	0.9	1.7	ガラス	暗褐色
81-68	2.6	1.1	2.3	ガラス	暗褐色
81-69	2.8	1.4	1.8	ガラス	コバルトブルー
81-70	3.3	1.1	3.5	ガラス	暗褐色
81-71	2.3	0.9	2.0	ガラス	暗褐色
81-72	2.5	1.0	1.3	ガラス	暗褐色
81-73	2.5	1.1	1.8	ガラス	暗褐色
81-74	2.9	1.4	1.7	ガラス	ブルー
81-75	3.2	0.9	2.8	ガラス	青緑色
81-76	4.0	1.3	2.8	ガラス	スカイブルー
81-77	4.1	1.4	2.3	ガラス	純黄緑色
81-78	5.2	1.2	2.7	ガラス	青緑色
81-79	3.7	1.4	2.3	ガラス	ダークオリーブ
81-80	3.2	0.8	3.0	ガラス	ダークオリーブ
81-81	4.0	1.5	2.6	ガラス	青緑色
81-82	3.5	1.2	2.5	ガラス	ダークオリーブ
81-83	4.2	1.7	3.8	ガラス	青緑色
81-84	4.0	1.7	2.6	ガラス	青緑色
81-85	5.0	1.4	2.5	ガラス	コバルトブルー
81-86	4.0	1.0	3.6	ガラス	暗褐色
81-87	2.6	1.0	1.8	ガラス	青緑色
81-88	3.7	1.3	1.5	ガラス	青緑色
81-89	3.6	1.6	1.8	ガラス	スカイブルー
81-90	3.9	1.6	2.5	ガラス	ダークオリーブ
81-91	3.8	1.1	2.3	ガラス	黄色
81-92	4.0	1.8	2.5	ガラス	スカイブルー
81-93	4.3	1.6	3.0	ガラス	黄色
81-94	4.5	1.0	3.2	ガラス	コバルトブルー
81-95	3.9	1.2	3.1	ガラス	青緑色
81-96	4.6	1.6	2.2	ガラス	コバルトブルー
81-97	3.8	1.3	2.5	ガラス	グリーン
81-98	3.6	1.2	1.6	ガラス	青緑色
81-99	4.2	1.3	3.1	ガラス	スカイブルー
81-100	4.0	1.5	2.4	ガラス	ダークオリーブ
81-101	4.1	1.3	2.5	ガラス	スカイブルー
81-102	3.3	1.0	2.7	ガラス	暗褐色
81-103	2.3	0.8	2.1	ガラス	青緑色
81-104	3.7	1.4	2.1	ガラス	ダークオリーブ
81-105	4.4	1.7	2.2	ガラス	青緑色
81-106	4.2	1.2	3.0	ガラス	ダークオリーブ
81-107	3.0	1.0	2.5	ガラス	グリーン
81-108	3.8	1.0	3.3	ガラス	青緑色
81-109	3.9	1.0	2.8	ガラス	ダークオリーブ
81-110	4.0	1.0	2.3	ガラス	ダークオリーブ
81-111	3.5	1.2	3.2	ガラス	ダークオリーブ
81-112	3.4	1.2	1.3	ガラス	ダークオリーブ
81-113	4.2	1.4	2.3	ガラス	青緑色
81-114	3.4	1.0	2.8	ガラス	青緑色
82-115	3.1	1.1	2.8	ガラス	暗褐色
82-116	2.8	1.0	1.2	ガラス	暗褐色
82-117	2.8	1.2	1.2	ガラス	青緑色
82-118	2.5	0.9	1.0	ガラス	暗褐色
82-119	2.2	0.9	1.9	ガラス	暗褐色
82-120	2.0	0.7	1.2	ガラス	暗褐色
82-121	2.5	1.0	1.7	ガラス	コバルトブルー
82-122	3.7	1.0	2.2	ガラス	青緑色
82-123	3.8	1.0	2.8	ガラス	ダークオリーブ
82-124	3.5	1.3	1.9	ガラス	ブルー
82-125	3.4	1.1	1.4	ガラス	スカイブルー
82-126	2.8	1.0	1.7	ガラス	暗褐色
82-127	2.3	1.1	1.4	ガラス	暗褐色
82-128	2.5	1.1	1.3	ガラス	暗褐色
82-129	2.7	1.2	1.3	ガラス	暗褐色
82-130	2.2	0.7	1.5	ガラス	暗褐色
82-131	2.4	1.1	1.7	ガラス	暗褐色
82-132	2.0	1.0	1.2	ガラス	暗褐色
82-133	2.0	0.9	1.9	ガラス	暗褐色
82-134	2.0	0.8	1.5	ガラス	暗褐色
82-135	2.0	1.0	1.6	ガラス	暗褐色
82-136	2.1	1.0	0.9	ガラス	暗褐色
82-137	2.2	1.0	1.7	ガラス	青緑色
82-138	2.6	0.8	1.9	ガラス	ブルー
82-139	3.0	1.1	1.7	ガラス	暗褐色
82-140	2.7	1.3	1.4	ガラス	暗褐色
82-141	2.5	1.2	1.3	ガラス	暗褐色
82-142	2.4	1.1	1.4	ガラス	暗褐色
82-143	2.2	0.9	1.5	ガラス	暗褐色
82-144	1.9	0.8	1.3	ガラス	暗褐色
82-145	2.1	1.0	1.3	ガラス	暗褐色
82-146	2.0	0.8	1.5	ガラス	暗褐色
82-147	2.4	1.0	2.1	ガラス	暗褐色
82-148	1.9	1.0	1.2	ガラス	暗褐色
82-149	2.3	0.9	1.3	ガラス	暗褐色
82-150	2.0	1.0	1.6	ガラス	暗褐色
82-151	1.9	1.0	1.7	ガラス	暗褐色
82-152	2.3	0.9	1.5	ガラス	暗褐色
82-153	2.3	0.8	1.5	ガラス	暗褐色
82-154	2.5	0.9	2.0	ガラス	暗褐色
82-155	2.2	0.9	1.4	ガラス	暗褐色
82-156	2.0	0.8	1.4	ガラス	暗褐色
82-157	1.9	0.9	1.1	ガラス	暗褐色
82-158	2.1	0.9	1.1	ガラス	暗褐色
82-159	2.5	1.1	1.3	ガラス	暗褐色
82-160	2.2	1.0	1.4	ガラス	暗褐色
82-161	2.2	0.7	1.8	ガラス	暗褐色
82-162	2.2	0.7	1.7	ガラス	暗褐色
82-163	2.2	1.0	1.2	ガラス	暗褐色
82-164	1.3	1.2	1.4	ガラス	暗褐色
82-165	2.2	1.0	1.0	ガラス	暗褐色
82-166	2.0	0.9	1.8	ガラス	暗褐色
82-167	2.0	0.7	1.5	ガラス	暗褐色
82-168	2.0	0.7	1.1	ガラス	暗褐色
82-169	2.5	1.2	1.1	ガラス	暗褐色
82-170	2.0	1.0	1.3	ガラス	暗褐色
82-171	2.5	1.0	1.3	ガラス	暗褐色
82-172	2.1	0.9	1.4	ガラス	暗褐色
82-173	2.1	0.9	1.3	ガラス	暗褐色
82-174	2.2	0.8	2.0	ガラス	暗褐色
82-175	1.9	0.7	1.5	ガラス	暗褐色
82-176	2.3	1.0	1.8	ガラス	暗褐色
82-177	2.0	0.9	1.4	ガラス	暗褐色
82-178	2.0	0.8	1.2	ガラス	暗褐色
82-179	2.3	0.9	1.4	ガラス	暗褐色
82-180	2.0	1.0	1.2	ガラス	暗褐色
82-181	2.2	1.0	1.6	ガラス	暗褐色
82-182	2.0	1.0	1.2	ガラス	暗褐色
82-183	1.7	0.6	0.9	ガラス	ダークオリーブ



第83図　9号墳出土土器実測図①　（S＝1/3）



第84図　9号墳出土土器実測図②　（S＝1/3、S＝1/4）

第33表　9号墳出土土器観察表①

遺構 図版	器種	出土位置	法量 (cm)		手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
83-184 34-184	坏　蓋 須恵器	周溝内 (南西)	口径 器高	13.9 4.1	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	良好	外 灰色 内 灰色	
83-185 34-185	坏　蓋 須恵器	周溝内 (南西)	口径 器高	14.0 4.7	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	良好	外 灰白色 内 灰白色	
83-186 34-186	坏　蓋 須恵器	周溝内 (南西)	口径 器高	13.8 4.3	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。指頭圧痕残る。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	不良	外 明緑灰色 内 明オリーブ灰	
83-187 34-187	坏　蓋 須恵器	墓道内 (周口部東)	口径 器高	13.4 5.2	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	粗	不良	外 明オリーブ灰 内 オリーブ灰色	
83-188 34-188	坏　蓋 須恵器	墓道内 (周口部東)	口径 器高	14.4 5.0	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	やや良	外 灰白色 内 灰白色	
83-189 34-189	坏　蓋 須恵器	墓道内 (周口部東)	口径 器高	13.7 4.5	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
83-190 34-190	坏　蓋 須恵器	墳丘上 (周口部東)	口径 器高	13.0 4.1	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。指頭圧痕残る。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
83-191 34-191	坏　身 須恵器	墳丘上 (西)	口径 受部径 器高	12.0 14.0 4.3	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	粗	良好	外 灰色 内 灰白色	
83-192 34-192	坏　身 須恵器	周溝内 (南西)	口径 受部径 器高	12.0 14.5 4.4	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	粗	良好	外 灰オリーブ色 内 灰色	
83-193 34-193	坏　身 須恵器	墳丘上 (周口部東)	口径 器高	14.2 4.4	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	粗	不良	外 灰白色 内 灰白色	
83-194 34-194	坏　身 須恵器	墓道内 (周口部東)	口径 受部径 器高	11.2 13.4 4.0	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰白色 内 灰白色	焼きひずみ有り。
83-195 34-195	坏　身 須恵器	墳丘上 (西)	口径 受部径 器高	11.4 14.3 3.6	外面底部は、回転ヘラケズリ。内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	不良	外 緑灰色 内 オリーブ灰色	
83-196 34-196	坏　蓋 須恵器	墓道内 (周口部東)	口径 器高	10.9 3.8	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
83-197 34-197	坏　蓋 須恵器	周溝内 (南西)	口径 器高	11.0 3.5	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰色 内 灰色	
83-198 34-198	坏　身 須恵器	墓道内 (周口部東)	口径 器高	11.9 6.0	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰色 内 灰色	
83-199 34-199	短頸壺 須恵器	周溝内 (南西)	口径 器高 体部最大径	7.4 8.9 13.6	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	不良	外 灰白色 内 灰白色	
83-200 34-200	短頸壺 須恵器	周溝内 (南西)	口径 器高 体部最大径	7.8 8.1 14.2	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	良好	外 緑灰色 内 明オリーブ灰	
83-201 34-201	高　坏 須恵器	墓道内 (周口部東)	口径 器高 脚裾部径	12.6 15.0 12.0	坏部外面底部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。 脚部に２段３方向の透かし孔有り。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
83-202 34-202	高　坏 須恵器	墓道内 (周口部東)	口径 器高 脚裾部径	11.4 13.2 9.8	坏部外面底部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。 脚部に２段２方向の透かし孔有り。	密	不良	外 暗青灰色 内 暗青灰色	焼きひずみ有り。
83-203 34-203	高　坏 須恵器	墓道内 (周口部東)	口径 器高 脚裾部径	11.0 14.7 9.9	坏部外面底部は、回転ヘラケズリ後回転ナデ。他は回転ナデ。ロクロ左回転。 脚部に２段２方向の透かし孔有り。	粗	不良	外 灰色 内 灰色	焼きひずみ有り。
83-204 34-204	高　坏 須恵器	墳丘上 (周口部東)	口径 器高 脚裾部径	10.4 15.7 7.4	回転ナデ。ロクロ左回転。 坏部外面底部にヘラ状工具による刺突文が巡る。 脚部に２条の凹線を挟に、上下２段３方向の透かし孔有り。	粗	不良	外 緑灰色 内 緑灰色	焼きひずみ有り。
83-205 34-205	高　坏 須恵器	墓道内 (周口部東)	口径 器高 脚裾部径	11.8 10.6 10.2	回転ナデ。ロクロ右回転。 坏部外面底部にヘラ状工具による刺突文が巡る。 脚部に１条の凹線を挟に、上下２段３方向の透かし孔有り。	密	不良	外 灰色 内 灰白色	
83-206 34-206	高　坏 須恵器	墳丘上 (周口部東)	口径 器高 脚裾部径	11.8 10.9 7.9	坏部内面底部は、回転ナデ後静止ナデ。脚部外面は、カキメ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。 坏部外面底部に櫛歯状工具による刺突文が巡る。 脚部に１段３方向の透かし孔有り。	密	良好	外 灰色 内 オリーブ灰色	

第34表　9号墳出土土器観察表②

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
84-207 34-207	高坏 土師器	墓道内 (開口部東)	口径 14.3 器高 9.5 脚部底径 10.4	脚端部内外面は、磨止ナデ。他は、ミガキ。	密	良好	外 明赤褐色 内 明赤褐色	
84-208 35-208	鉢 須恵器	墳丘上 (西)	体部最大径 8.3	外面底部は、回転ヘラケズリ。体部中位はカキメ。他は、回転ナデ。ロクロ左回転。 体部上位から頸部にかけて、櫛歯状工具による刺突文が2条巡る。	粗	不良	外 緑灰色 内 緑灰色	
84-209 35-209	長頸壺 須恵器	墓道内 (開口部東)	口径 8.6 器高 18.0 体部最大径 15.0	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。ロクロ左回転。	粗	不良	外 青灰色 内 青灰色	
84-210 35-210	脚付長頸壺 須恵器	周溝内 (南西)	口径 8.4 器高 25.1 体部最大径 13.4 脚部底径 13.1	体部外面底部は、回転ヘラケズリ。体部内面底部は回転ナデ後磨止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。 脚部下位に3個の穿孔有り。	粗	良好	外 灰色 内 灰白色	
84-211 35-211	提瓶 須恵器	周溝内 (南西)	口径 8.5 器高 30.2 体部最大径 22.7	体部外面正面は、カキメ。背面は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。 カキ状把手貼り付け。	密	不良	外 灰色 内 灰色	
84-212 35-212	提瓶 須恵器	墓道内 (開口部東)	口径 5.1 器高 14.6 体部最大径 11.9	体部外面は、カキメ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
84-213 35-213	提瓶 須恵器	周溝内 (南西)	口径 7.4 器高 22.0 体部最大径 17.5	体部外面は、カキメ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	不良	外 灰白色 内 灰白色	
84-214 35-214	甕 須恵器	墓道内 (開口部東)	口径 15.7 器高 27.9 体部最大径 29.5	外面下半部は、タタキ。上半部は、タタキ後カキメ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。	粗	良好	外 灰白色 内 灰白色	

土器（第83・84図　図版34・35）

高坏（204・206）　ともに須恵器で、204の坏部は若干内湾しつつ口縁が立ち上がる。口縁端部は丸い。坏部外面底部にヘラ状工具による刺突文が巡る。脚は長脚で下部でやや外反し端部に至る。脚部の2条の凹線を境に上下2段3方向の透かし孔あり。脚裾の径は坏部の口径よりも小さい。206の坏部は斜め上方に口縁が立ち上がり、端部は丸い。坏部外面底部に櫛歯状工具による刺突文が巡る。脚は下部で外反し、丸い端部に至る。脚部に1段3方向の透かし孔あり。脚部のほぼ全面にカキメ調整あり。

脚付長頸壺（210）　口頸部は比較的太い基部からやや外傾しながら口縁端部に至る。体部は内湾気味に外上方に開いた後、内傾して口頸部に至る。脚は太く、脚裾で段をなして下がり、端部は屈曲してわずかに外上方にのびる。段の上位に3個の穿孔あり。

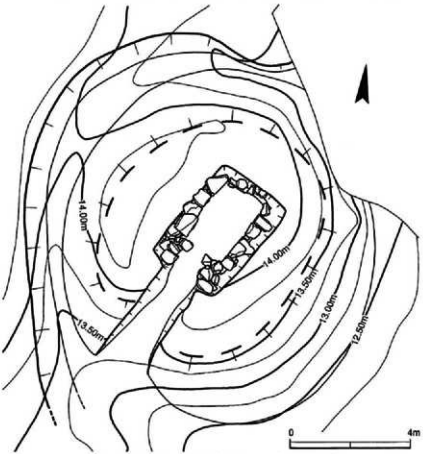
提瓶（211～213）　形態の異なる3点の提瓶が出土しており、把手の形状で分類すると、カギ状（211）・把手なし（212）・環状（213）になる。把手を有する211・213は南西側の周溝部分から出土しており、把手を持たない212は墓道から出土している。211の体部の正面はカキメ調整を行い、背面には回転ヘラケズリの跡が残存している。頸部から口縁部にかけては回転ナデを施す。体部の上部に粘土塊が付着している。213も同様に、体部の正面にはカキメ調整を施し、背面には回転ヘラケズリを行っている。頸部から口縁部にかけては回転ナデを施している。212は小型で、体部正面・背面ともにカキメ調整を施し、頸部から口縁部にかけて回転ナデを行っている。

観察表は第33・34表に掲げる。　（安部）

10. 10号墳

（1）調査前の状況

10号墳はⅡ地区の中央部に位置し、標高は13mである。北の墳丘裾部に9号墳、南東の墳丘裾部に11号墳、南の墳丘裾部に12号墳が隣接する。竪穴系横口式石室で9、11号墳と開口方向もほぼ同様である。調査前は雑木が茂り、わずかな高まりが認められ、墳丘の中央部にわずかなくぼみがあり、石材の抜き取りによる破壊が見うけられた。また、東側の墳丘裾部は土砂の採取により崖となっている。



第85図　10号墳墳丘遺存状況図　（S＝1/125）

（2）墳丘

墳丘頂部は削平によって大部分が消失していたが、墳丘裾部については比較的遺存状況が良好であった。トレンチ調査による土層観察から、径10.6mの円墳であったと思われる。

また、南に隣接する12号墳との関係は、土層観察から、10号墳の周溝を掘り込んで12号墳の周溝を構築しており、12号墳に比べ、10号墳の方が前に築造されたことが明らかとなった。南東に隣接する11号墳との関係は、11号墳の周溝の堆積土の上に、10号墳の周溝を掘り込んだときに掻き出したものと思われる地山色の赤褐色土を確認した。このことから、10号墳の方が11号墳よりも築造時期が新しいことが分かった。古墳の基底面は、古墳築造時の地表面である赤褐色土層で、厚さは15cm程度である。基底面上には墳丘盛土が50cmばかり残っている。

土層観察から、古墳の基本的な築造方法を推測すると、まず西側斜面を掘削し地山整形を行う。次に墓坑ならびに墓道を構築しながら版築により墳丘を築く。最後に周溝を掘り込み、主にその土砂を盛土として用い、墳丘を完成させたと思われる。

周溝の形状は馬蹄形で、幅1.0～2.0m、深さは0.2mで、断面形は浅い皿状を示す。

（3）石室

内部主体は南に開口する両袖式の竪穴系横口式石室である。主軸はN36°Eである。長方形の玄室に短い羨道と、羨道と同じ幅の墓道がのびる平面形で、石室の全長は3.6mである。石室内には大量の土砂が流入し、側壁の石材と思われる石が散在していた。

墓坑は、古墳築造時の地表面から約100cm掘り込んでいる。形状は隅丸方形である。

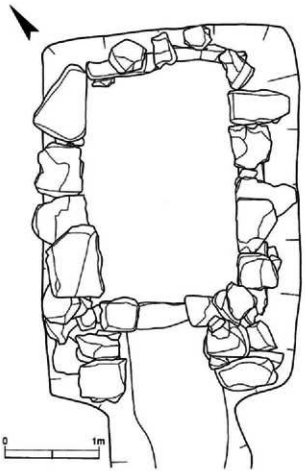
玄室　玄室の平面形はほぼ長方形であるが右壁側がやや長い。長さは、玄室中央で2.6m、右壁側で2.6m、左壁側で2.4mである。

奥壁は、地山を約10cm掘り下げて0.7×0.7mと0.8×0.7mの２つの板石を置き、腰石とし、側壁は0.8×0.5mの石材を横長に用い、腰石としている。0.6×0.2m程度の石材を３段にわたって積んでおり、石の間には小石を詰めほぼ垂直に積み上げ、水平方向に目地をそろえている。

床面には若干の砂礫を敷いている。

玄門は、左右に約100cmの石材を壁に接するように縦長に用い、床面から50cm近く掘り下げて置き、袖石としている。袖石の間には60×20cmの石材を置き、框石としている。楣石は削平により失われている。

なお、石室に用いられている石材は花崗岩である。



第86図　10号墳石室平面図　（S＝1/40）

羨道　羨道は袖石からハの字状に開いている。羨道長は1.0m。40×20cmの石材を３段にわたって積み上げている。この際、水平方向の目地を玄室の側壁とも合わせてそろえている。羨道の床面は框石の外側は玄室床面とほぼ同じであるが、羨道の先端までに20cm上がり、墓道へと続く。

墓道　墓道は羨道の幅とほぼ同じ幅で、床もほぼ水平である。2.2mのところで消失しているが、東側へ屈曲する可能性がある。

閉塞施設　60×40cmの板石が、框石から15cmほど外側から玄室側に傾いた状態で玄門を閉塞している。この板石の外側には一回り小さな板石があり、閉塞石を構成している。検出状況から推測すると、削平の際に原位置からずれ込んだ可能性がある。

（４）遺物

出土状況　玄室内からは床面から装身具と鉄製品が出土した。装身具はガラス小玉で玄室中央やや奥壁寄りでまとまって出土した。鉄製品はほとんどが鉄鏃で、右壁側の玄門部から玄室中央までにまとまって出土した。鉄製品は鉄鏃の他に刀子が３点、鉋が１点。

石室外では、羨道内から須恵器の坏、短頸壺の破片、西側の墳丘上から須恵器片、開口部東側の墳丘上から瓦が出土している。出土状況から、開口部東側で祭祀を行った可能性があると考えられる。

出土遺物

装身具（第88図　図版36）

第87図　10号墳石室内遺物出土状況図　（S＝3/80）

小玉（1～27）　すべてガラス小玉である。計測表は第35表に掲げる。

鉄製品

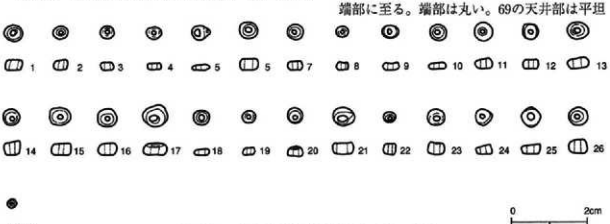
鎌（28～63）　計測表を第36表に掲げる。

鉋（64）　残存長10.8cm、身幅0.5cm、厚さ0.4cm、刃部は長さ1.1cm、最大幅1.0cmで、断面形は錆膨れのため明確ではないが、扁平な三角形状を呈すると思われる。身部から刃部にかけてなだらかに幅を広げている。

刀子（65～67）　65は残存長4.4cmで、身部のみ残る。身の厚さは0.3cmである。66も身部のみ残存し、残存長6.9cm、身の厚さは0.3cmである。67は残存長7.8cmで、身部の先端と茎部の先端が欠損している。身の厚さは0.4cmで、なだらかな棟関である。茎部に木質が残存する。

土器（第90図　図版37）

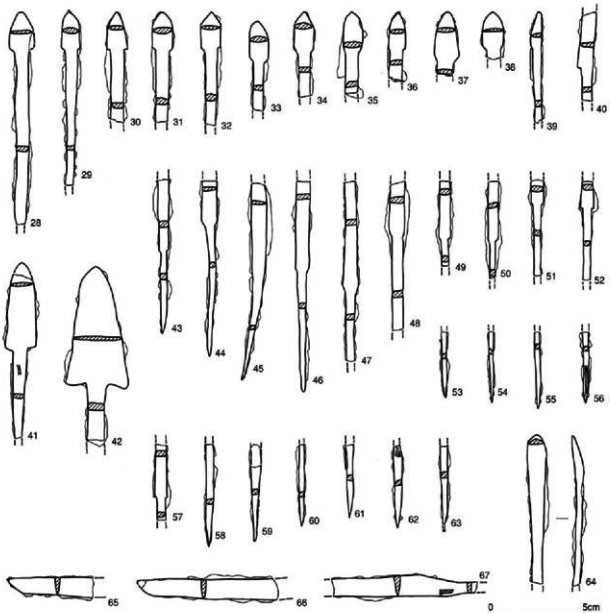
坏蓋（68・69・73）　68の口縁部は内湾気味に外下方に下がった後、垂直に下がって端部に至る。端部は丸い。69の天井部は平担



第88図　10号墳出土装身具実測図　（S＝1/1）

第35表　10号墳出土小玉計測表

挿図	図版	直径mm	孔径mm	厚さmm	材質	色調
88-1	36-2	4.9	2.2	3.7	ガラス	ブルー
88-2	36-2	3.9	1.3	2.8	ガラス	スカイブルー
88-3	36-3	3.7	1.4	2.2	ガラス	青緑色
88-4	36-4	3.8	1.5	1.8	ガラス	ダークオリーブ
88-5	36-5	4.9	1.9	1.6	ガラス	ダークオリーブ
88-6	36-6	5.2	2.2	3.1	ガラス	青緑色
88-7	36-7	4.3	1.4	2.4	ガラス	スカイブルー
88-8	36-8	3.3	1.3	2.0	ガラス	ブルー
88-9	36-9	4.4	1.6	2.0	ガラス	コバルトブルー
88-10	36-10	4.4	1.7	1.8	ガラス	スカイブルー
88-11	36-11	4.9	1.6	2.8	ガラス	黄色
88-12	36-12	4.2	1.7	2.7	ガラス	青緑色
88-13	36-13	5.8	2.0	3.1	ガラス	スカイブルー
88-14	36-14	4.5	1.5	3.9	ガラス	ダークオリーブ
88-15	36-15	5.3	1.5	3.3	ガラス	ブルー
88-16	36-16	5.0	1.5	3.3	ガラス	青緑色
88-17	36-17	6.4	2.2	3.3	ガラス	青緑色
88-18	36-18	4.3	1.8	1.8	ガラス	青緑色
88-19	36-19	3.4	1.3	2.1	ガラス	スカイブルー
88-20	36-20	4.2	1.7	2.6	ガラス	青緑色
88-21	36-21	5.7	3.0	3.1	ガラス	青緑色
88-22	36-22	3.3	1.2	0.9	ガラス	スカイブルー
88-23	36-23	4.6	1.9	3.2	ガラス	スカイブルー
88-24	36-24	4.5	1.8	2.7	ガラス	スカイブルー
88-25	36-25	5.4	2.0	2.7	ガラス	スカイブルー
88-26	36-26	4.9	1.7	4.0	ガラス	スカイブルー
88-27	36-27	2.4	1.0	1.4	ガラス	青緑色



第89図　10号墳出土鉄製品実測図　（S＝1/2）

でくぼみを持った後、口縁部に至る。口縁部はほぼまっすぐに下がり端部に至る。肩部は段を持つ。口縁部外面に、刷毛状工具による斜めの調整痕残る。73の口縁部は内湾気味に外下方に下がり、端部に至る。端部は鋭い。

短頸壺（77～79）　77の口頸部はやや長く外傾し端部に至る。端部は丸い。体部は内湾気味に立ち上がり、内傾して頸部に至る。最大径は中心に位置する。底部は平坦に近い。78の頸部は短く内傾し端部に至る。端部は丸い。体部は内湾気味に立ち上がり、鋭く内傾して頸部に至る。最大径は上位3/4に位置する。底部は平坦に近い。78の口頸部は短く内傾し端部に至る。端部は丸い。体部は内湾気味に立ち上がり、内傾して頸部に至る。底部は平坦に近い。最大径は上位3/4に位置する。体部上位にカキメ調整を施している。体部下半の一部に焼きひずみによるくぼみがある。

甕（80）　80の口頸部の基部はやや細く、外上方に開く。2段の段を成して口縁部に至る。口頸部の基部近くにカキメ調整、その上位に波状文を口縁部まで施す。底部は平坦に近く、体部は丸い。体部上位に櫛歯状工具によるノの字状文を施す。ノの字状文の中央部を沈線が巡る。沈線の下に円孔

第36表　10号墳出土鉄鏃計測表　　（　）は残存値　単位はcm

棒図	図版	出土位置	全長	身部		茎部		茎部		備考
				長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	
89-28	36-28	玄室内	(14.2)	2.0	1.2	8.5	0.7	—	—	片刃式
89-29	36-29	玄室内	(9.2)	2.0	1.0	(7.2)	0.6	—	—	柳葉式
89-30	39-30	玄室内	(5.9)	2.0	1.0	(3.9)	0.7	—	—	柳葉式
89-31	36-31	玄室内	(5.8)	2.1	0.8	(3.7)	0.7	—	—	柳葉式
89-32	36-32	玄室内	(6.1)	2.0	1.1	(4.1)	0.7	—	—	柳葉式
89-33	36-33	玄室内	(4.8)	2.3	1.0	(2.5)	0.8	—	—	柳葉式
89-34	36-34	玄室内	(4.6)	2.3	0.9	(2.3)	0.6	—	—	柳葉式
89-35	36-35	玄室内	(4.4)	2.2	1.0	(2.2)	0.7	—	—	柳葉式
89-36	36-36	玄室内	(4.2)	(2.0)	0.8	(1.7)	0.6	—	—	柳葉式
89-37	36-37	玄室内	(3.4)	2.6	1.4	(0.8)	0.8	—	—	柳葉式
89-38	36-38	玄室内	(2.4)	2.1	1.1	(0.3)	0.7	—	—	柳葉式
89-39	36-39	玄室内	(5.7)	1.9	0.6	(3.8)	0.4	—	—	片刃式
89-40	36-40	玄室内	(4.7)	(2.9)	0.8	(1.7)	0.6	—	—	片刃式
89-41	36-41	玄室内	(8.4)	(3.9)	1.7	(4.4)	0.7	—	—	長三角形式
89-42	36-42	玄室内	(7.5)	6.5	2.8	(3.2)	0.9	—	—	長三角形式
89-43	36-43	玄室内	(8.1)	—	—	(3.8)	0.5	4.3	0.4	
89-44	36-44	玄室内	(9.3)	—	—	(2.4)	0.7	6.9	0.5	
89-45	36-45	玄室内	(12.4)	—	—	(5.5)	0.8	4.8	0.5	
89-46	36-46	玄室内	(11.2)	—	—	(4.8)	0.7	6.4	0.4	
89-47	36-47	玄室内	(9.5)	—	—	(5.5)	0.9	(4.0)	0.5	
89-48	36-48	玄室内	(7.9)	—	—	(3.0)	0.7	4.9	0.6	
89-49	36-49	玄室内	(4.5)	—	—	(3.2)	0.6	(1.3)	0.4	
89-50	36-50	玄室内	(5.2)	—	—	(3.2)	0.5	(2.0)	0.4	
89-51	36-51	玄室内	(5.0)	—	—	(1.3)	0.7	(3.7)	0.4	
89-52	36-52	玄室内	(5.2)	—	—	(1.4)	0.7	(3.8)	0.4	
89-53	36-53	玄室内	(3.5)	—	—	—	—	(3.5)	0.2	
89-54	36-54	玄室内	(4.7)	—	—	—	—	(4.7)	0.2	
89-55	36-55	玄室内	(4.0)	—	—	—	—	(4.0)	0.3	
89-56	36-56	玄室内	(3.4)	—	—	—	—	(3.4)	0.3	
89-57	36-57	玄室内	(4.0)	—	—	(3.8)	0.5	(1.2)	0.4	
89-58	36-58	玄室内	(5.4)	—	—	—	—	(5.4)	0.5	
89-59	36-59	玄室内	(5.1)	—	—	—	—	(5.1)	0.5	
89-60	36-60	玄室内	(4.1)	—	—	—	—	(4.1)	0.2	
89-61	36-61	玄室内	(3.8)	—	—	—	—	(3.8)	0.3	
89-62	36-62	玄室内	(4.2)	—	—	—	—	(4.2)	0.5	
89-63	36-63	玄室内	(4.3)	—	—	—	—	(4.3)	0.4	

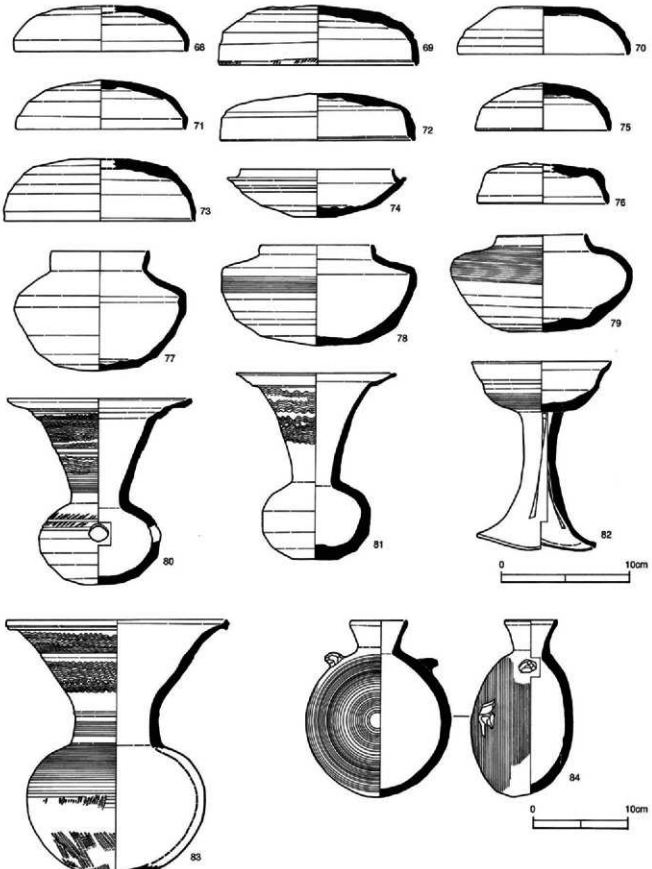
が穿ってある。

高坏（82）　坏部は内湾気味に外上方に開き、内側に湾曲しながら外傾して口縁端部に至る。脚部は細く、長脚である。脚部に1段3方向の透かし孔あり。坏部外面底部にカキメ調整を施す。脚裾部に焼きひずみあり。

広口壺（83）　丸い体部からまっすぐ頸部が立ち上がり、やや内湾しながらのび、突帯を境に外傾し、屈曲して短く外上方にのびた後、段を持ちながら短くまっすぐ立ち上がり、内傾して口縁端部に至る。口頸部の凹線を境に上に3段、下に3段の波状文を施している。口頸部の基部から体部中位にかけてカキメ調整を施す。底部には格子タタキ痕残る。

提瓶（84）　体部の正面はカキメ調整を施し、背面は回転ヘラケズリを行っている。体部の正面の中央に粘土塊が付着している。頸部から口縁部にかけては回転ナデを施している。体部上位にカギ状の把手を持つ。

観察表は第37表に掲げる。　　（安部）



第90図　10号墳出土土器実測図　（S＝1/3、S＝1/4）

第37表　10号墳出土土器観察表

挿図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
90-68 37-68	坏　蓋 須恵器	墳丘上 (南東)	口径　13.4 器高　3.6	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰色	
90-69 37-69	坏　蓋 須恵器	墳丘上 (南東)	口径　15.5 器高　4.7	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 口縁端部外面に、鋭毛状工具による斜めの調整痕残る。	粗	良好	外 オリーブ灰色 内 灰色	
90-70 37-70	坏　蓋 須恵器	周溝内 (南西)	口径　13.4 器高　3.7	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	良好	外 灰白色 内 灰色	
90-71 37-71	坏　蓋 須恵器	周溝内 (南西)	口径　13.1 器高　3.9	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	良好	外 灰色 内 灰白色	
90-72 37-72	坏　蓋 須恵器	墳丘上 (西)	口径　15.2 器高　3.7	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	粗	不良	外 灰色 内 灰白色	
90-73 37-73	坏　蓋 須恵器	墳丘裾部 (北東)	口径　15.0 器高　4.9	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	粗	良好	外 灰色 内 灰白色	
90-74 37-74	坏　身 須恵器	周溝内 (南西)	口径　12.1 器高　3.7 受部径　14.9	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	良好	外 灰色 内 灰色	
90-75 37-75	坏　蓋 須恵器	墳丘上 (南東)	口径　10.5 器高　3.8	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
90-76 37-76	坏　蓋 須恵器	墳丘上 (南東)	口径　10.1 器高　3.1	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	粗	良好	外 灰色 内 灰白色	
90-77 37-77	短頸壺 須恵器	奥道内 (北東)	口径　7.6 器高　9.4 体部最大径　13.4	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	粗	不良	外 灰白色 内 灰白色	焼きひずみ有り。
90-78 37-78	短頸壺 須恵器	墳丘上 (南東)	口径　8.8 器高　7.7 体部最大径　15.3	外面底部は、回転ヘラケズリ。体部上半はカキメ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	不良	外 灰色 内 灰色	焼きひずみ有り。
90-79 37-79	短頸壺 須恵器	墳丘裾部 (北東)	口径　6.6 器高　7.5 体部最大径　14.1	外面底部は、回転ヘラケズリ。体部上半はカキメ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	良好	外 灰白色 内 灰白色	
90-80 37-80	甕 須恵器	墳丘上 (南東)	口径　14.4 器高　14.5 体部最大径　9.5	外面底部は、回転ヘラケズリ。頸部下位はカキメ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。 頸部に3段の波状文。体部上位に櫛歯状工具によるノの字文を施す。	粗	良好	外 灰白色 内 灰白色	
90-81 37-81	甕 須恵器	墳丘上 (南東)	口径　12.6 器高　14.5 体部最大径　8.5	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。 頸部に波状文を施す。	粗	不良	外 灰色 内 灰色	穿孔部欠損 焼きひずみ有り。
90-82 37-82	高　坏 須恵器	墳丘上 (南東)	口径　11.0 器高　14.6 体部最大径　9.3	坏部底部は、カキメ。他は、回転ナデ。回転方向不明。 脚部に1段3条の透かし孔有り。	密	不良	外 灰色 内 灰白色	焼きひずみ有り。
90-83 37-83	広口壺 須恵器	墳丘上 (南東)	口径　23.0 器高　27.4 体部最大径　18.5	体部外面下位は、タタキ。中位は、タタキ後回転ナデ。上位は、タタキ後カキメ。 口径部内外面は、回転ナデ。頸部を四線と凸線で3段に区切り、上位2段に波状文。下位1段にカキメを施す。	密	不良	外 純黄褐色 内 灰白色	
90-84 37-84	提　瓶 須恵器	墳丘上 (南東)	口径　6.0 器高　18.5 体部最大径　15.4	体部外面は、回転ヘラケズリ後カキメ。他は、回転ナデ。カキ状把手貼り付け。	粗	良好	外 灰白色 内 灰色	

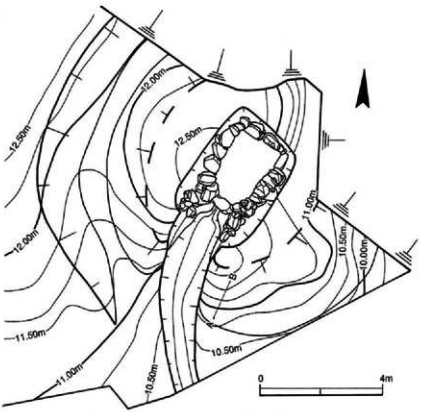
11. 11号墳

（1）調査前の状況

11号墳は、南東方向に張り出した丘陵上に展開するⅡ地区の古墳群中、最も南東側の丘陵先端部に位置する円墳である。北西側に10号墳が隣接しており、標高は石室中央部辺りで12mと低い。11号墳の北西から北東方向にかけては、近代の土取りにより大きく旧地形が削られ崖面となっており、墳丘の3分の1近くが既に欠失していた。調査前は一帯が雑木林で、10号墳との境に鞍部があり、よく観察すると周溝状に回り込んでいるように見え、トレンチ調査の結果古墳であることを確認した。

（2）墳丘

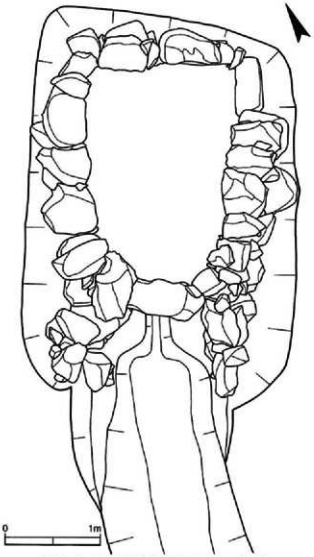
前述した通り、本墳の墳丘は、北西から北東方向はほとんど原型をとどめてはいない。さらに、南トレンチも、結果的に羨道部と墓道の中を断ち切っており、墳丘盛土の観察は西トレンチが唯一の手がかりとなった。それによると、墓坑端から西側約1.7mの範囲に、築造時の地表面が最大で厚さ35cm程ほぼ平坦面となって残っており、墓坑を掘る前に地表面の整形を行ったことが窺えた。さらにその平坦面の上部には、赤褐色の粘質土と褐色及び灰褐色の砂質土を主体の土盛りがあり、墳丘構築の段階差を明確に窺わせる土層ラインは確認はできなかったが、少なくともこの部分については、石室構築時の版築と思われる。また、西側周溝部では、周溝の堆積土と思われる灰褐色土の上に、赤褐色の土が掻き出された状態で載っているのが観察できた。赤褐色土はこの丘陵一帯の地山土であり、これは隣接する10号墳の墳丘裾部を整形した際の地山土と見なしてよいと思われる。なお、周溝は幅2.0～2.2m、深さ20cm前後で、11号墳の斜面上位側に当たる南西から北西側で検出した。なお、それに続くと思われる、北及び北東側は崖で不明である。墳丘径は、西トレンチの土層観察で石室中央から4.5mの長さがあったことから、10m弱と推定され、現存墳丘高は0.9mを測った。



第91図　11号墳墳丘遺存状況図　（S＝1/125）

（3）石室

9・10号墳と同じく、等高線に平行に石室を構築し、開口方向も同方向である。墓坑は、隅丸長方形で、左壁側4.1m、右壁側3.8mと左壁側がやや長く、幅は約2.9mである。ややオーバーハング気味に掘られた墓坑ぎりぎりに石室を構築しており、築造時の地表面から地山を深く掘り込んだ深さは、



第92図　11号墳石室平面図　（S＝1/40）

斜面上位側の左壁側で約1.5m、下位側の右壁側で約0.8mと推定される。なお、墓坑掘り込み前の地表面の整形は、斜面上位側では平坦面を造った跡を確認したが、下位側は、自然地形そのままと思われる。

主体部は主軸をN28°Eにとり、南西方向に開口する単室両袖の竪穴系横口式石室である。盗掘とその後の崩落に伴って、玄室部の天井石及び石室奥壁側と右壁側の上部部分のかなりを失っているが、玄門近辺の残存度は比較的良好であった。石室の全長は左壁側、右壁側とも3.6m、石材は花崗岩である。

玄室　奥幅1.65m、中央部幅1.75m、前幅1.5m、左壁長2.3m、右壁長2.45m、奥壁から框石までは2.4mを測り、平面形は玄門方向にややすぼまる朋張りの長方形プランである。奥壁は、横幅約80cm、高さ約60cmの分厚い石と、幅、高さとも80cmの板状の石を２石、玄室側の面をそろえてほぼ直立に据え腰石とする。腰石の上部は柱状の石を主体にほぼ水平に横積みし、隙間には小さな塊石を込めているが、石の大きさはまちまちである。上部は欠失するため、持ち送りの様子は定かではなく、床面からの残存高は95cmである。一方、側壁は、左壁が３石、右壁が４石で、それぞれ同じような大きさの石材を横長に据えて腰石としており、特に、右壁側は腰石上面レベルがほぼそろう。腰石上は、大きさの違う石を積み上げているが、概して合わせ目を互い違いにして、少しずつ上部へ持ち送りしていた。持ち送りの角度は、現存する高さまで左壁が８°、右壁が５°である。奥壁同様、隙間には小さな塊石を詰め、左壁側については横目地がよくそろっている。残存高は、左壁が床面から１m前後、右壁が同じく1.3m前後である。

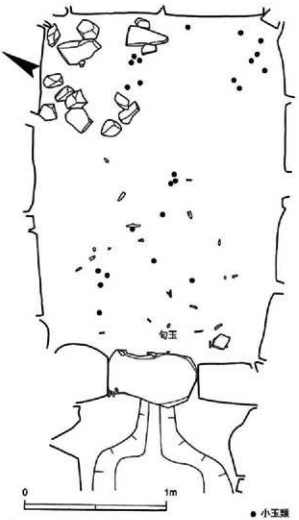
玄門部は両袖で、右袖は、幅40cm、厚さ36cm、長さ92cmの柱状の石を床面下18cmの墓坑掘り方に直立させ、その上に厚さ16cmの側石を載せて床面からの高さ90cmの玄門高を確保する。左袖は、幅46cm、厚さ41cm、長さ90cmの柱状の石を床面下20cmの地山面に据え、その上に厚さ20cmの側石を積んで右袖との高さをそろえている。左袖石が主軸側にやや傾いているため、玄門幅は床面上は64cmだが、楣石直下では48cmとなる。楣石は、長さ約105cm、幅38cm、厚さ34cmの柱状の石を横置きにし、両袖石間には、幅36cm、長さ60cm、厚さ14cmの石を渡して框石とする。

一方、玄室内には、盗掘後の石室崩落に伴って橙色の砂質土が大量に流入しており、床面検出に際しては、土層観察をしながら段階的に流入土を除去していった。その結果、玄室北側の主軸線の土層では、流入土が地山面まで堆積していることが確認され、玄室床面は一見地山面のように思われた。

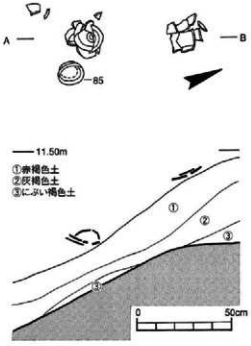
しかし、反対の南側では、玄室中央部から玄門部にかけて、最高部で19.5㎝の高さに砂礫が堆積しており、流入土を除去し平面的に砂礫層を検出したところ、その範囲は、長軸1.3m、短軸1.2mの南北に長い平面楕円形状であることを確認した。砂礫の大きさはほとんどが2～3mmで、この中には勾玉を含めた多数の玉類と鉄類が含まれていた。堆積状況から、人為的なものであるのは明らかだが、玄門部では砂礫層は両袖石間の閉塞石に接しており、追葬時の掻き出しとは考えにくい。盗掘の際に床面の砂礫層を玄門側に除けたものと思われ、もともとの玄室床面には砂礫が敷き詰められていた可能性が極めて高い。

羨道　石室前面に、袖石に続いて左壁長1.1m、右壁長1.2mの短い羨道側壁が付く。この羨道側壁は、玄室床面より約20㎝の墓坑床面上に、大きめの塊石を基部石にして、順次石材を垂直に積み上げて構成するが、平面形はいわゆる「ハ」の字状を呈す。一方、框石の下から羨道床面にかけては、地山を断面逆台形状に掘り込んだ排水溝を検出した。上部幅26㎝、底部幅8㎝、深さ約17㎝、框石下の長さを含めて全長72㎝を測り、ほぼ石室主軸状に掘られていた。排水溝の両側には、排水溝底面からの高さ約17㎝の棚状の平坦面が地山を削平して設けられており、羨道側壁はその上に積まれている。棚状の平坦面はそのまま上傾しながら墓道に続き、次第に幅を狭めて最後に終結していた。

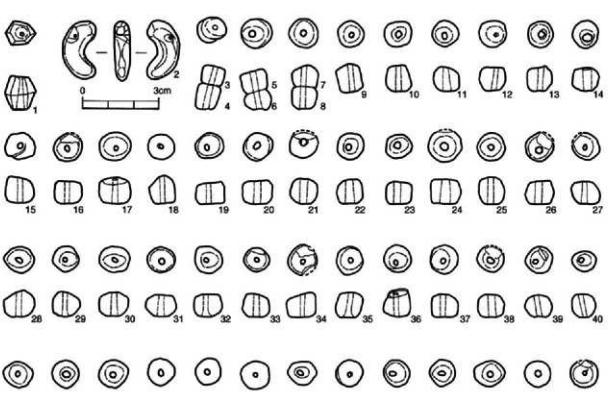
閉塞施設　長さ82㎝、幅48㎝、厚さ最大で11㎝の板状の一枚石を、2枚の平石を台にして、框石の外側から斜めに榧石に立てかける状態で閉塞石とする。2枚の平石の上面レベルはわずかに框石より高く、底面は羨道床面より14㎝高い。その2石を押さえるように、



第93図　11号墳石室内遺物出土状況図　（S＝3/80）



第94図　11号墳遺物出土状況図　（S＝1/20）



第95図　11号墳出土装身具実測図　（S＝2/3、S＝1/1）

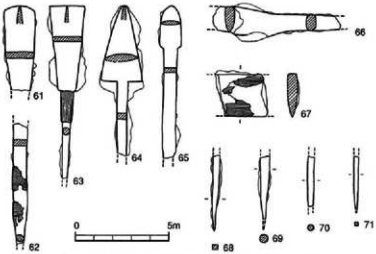
第36表　11号墳出土小玉計測表

（　）は残存値

挿図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材質	色調
95- 3	5.1	1.0	6.0	土	黒褐色
95- 4	6.2	1.5	6.0	土	黒褐色
95- 5	7.0	1.6	5.9	土	黒褐色
95- 6	7.1	1.4	5.6	土	黒褐色
95- 7	7.3	1.3	5.5	土	黒褐色
95- 8	7.5	1.8	6.2	土	黒褐色
95- 9	6.7	1.6	6.7	土	黒褐色
95-10	7.3	2.1	6.7	土	黒褐色
95-11	7.3	2.2	6.4	土	黒褐色
95-12	7.4	1.0	6.2	土	黒褐色
95-13	6.7	1.8	7.0	土	黒褐色
95-14	6.9	1.7	6.3	土	黒褐色
95-15	7.8	1.3	7.0	土	黒褐色
95-16	7.6	1.6	5.9	土	黒褐色
95-17	8.0	1.4	5.8	土	黒褐色
95-18	7.0	1.6	7.4	土	黒褐色
95-19	7.5	1.1	5.3	土	黒褐色
95-20	7.5	2.0	6.2	土	黒褐色
95-21	7.7	2.0	6.4	土	黒褐色
95-22	7.0	1.8	6.2	土	黒褐色
95-23	6.8	2.0	5.8	土	黒褐色
95-24	9.0	2.1	7.1	ガラス	コバルトブルー
95-25	7.5	1.3	7.0	土	黒褐色
95-26	7.5	2.0	6.2	土	黒褐色
95-27	7.0	1.6	5.8	土	黒褐色
95-28	6.8	1.6	7.0	土	黒褐色
95-29	7.3	1.8	6.5	土	黒褐色
95-30	7.3	1.3	6.8	土	黒褐色
95-31	7.4	1.6	6.0	土	黒褐色
95-32	7.8	1.2	6.0	土	黒褐色
95-33	6.8	2.1	6.0	土	黒褐色
95-34	7.8	1.7	6.5	土	黒褐色
95-35	7.3	1.3	6.8	土	黒褐色
95-36	7.0	1.5	7.2	土	黒褐色
95-37	7.5	1.5	6.2	土	黒褐色
95-38	7.0	1.6	5.8	土	黒褐色
95-39	7.4	1.2	5.8	土	黒褐色
95-40	6.4	1.8	5.6	土	黒褐色
95-41	6.9	1.6	6.5	土	黒褐色
95-42	6.8	2.0	6.8	土	黒褐色
95-43	7.8	1.4	6.4	土	黒褐色
95-44	7.3	1.7	6.4	土	黒褐色
95-45	7.0	1.8	6.7	土	黒褐色
95-46	7.4	1.0	7.1	土	黒褐色
95-47	6.7	1.3	6.4	土	黒褐色
95-48	7.4	1.5	6.9	土	黒褐色
95-49	7.4	1.9	6.4	土	黒褐色
95-50	6.7	1.3	6.3	土	黒褐色
95-51	6.6	2.1	6.0	土	黒褐色
95-52	7.0	2.0	6.5	土	黒褐色
95-53	7.6	1.2	5.8	土	黒褐色
95-54	7.2	1.8	6.0	土	黒褐色
95-55	7.2	1.6	6.7	土	黒褐色
95-56	7.5	1.5	6.2	土	黒褐色
95-57	7.8	1.7	5.9	土	黒褐色
95-58	7.3	1.4	6.1	土	黒褐色
95-59	6.4	1.5	5.1	土	黒褐色
95-60	3.0	1.2	1.8	ガラス	マリンブルー
	—	—	6.3	土	黒褐色
	8.0	1.7	(6.4)	土	黒褐色
	7.4	1.3	—	土	黒褐色
	7.6	1.5	6.5	土	黒褐色
	7.0	1.5	5.5	土	黒褐色
	7.2	1.8	6.4	土	黒褐色
	—	1.3	7.0	土	黒褐色
	—	1.6	5.6	土	黒褐色
	—	1.2	5.5	土	黒褐色
	—	1.3	—	土	黒褐色

大きめの板石が羨道床面に据えられ、その上部にも、閉塞石に寄りかかる状態で多数の塊石が積まれていた。また、南側トレンチの土層で、褐色粘質土と橙色粘質土が羨道部に交互に堆積しているのを確認した。この層は、墓道の流入土とは明確に違っており、閉塞の際、閉塞石の上に念入りに土を被せたことが推定できる。

墓道　墓坑に続いて、地山を断面U字形に掘り込んだ墓道が、南東側の墳丘裾部に回り込んで続いていた。羨道部近くでの上部幅1.70m、床面幅0.60m、深さ1.44m、羨道端から3mの地点で、上部幅1.25m、床面幅0.32m、深さ0.46mを測った。南東側は調査区外のため、残念ながら墓道の終結点については確認できなかったが、長さは少なくとも6mを越えるであろう。



第96図　11号墳出土鉄製品実測図　(S＝1/2)

第39表　11号墳出土鉄鏃計測表　　(　)は残存値　単位は㎝

挿図	図版	出土位置	全長	身部		篠被部		茎部		備考
				長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	
96-61	38-61	玄室内	(4.5)	(4.5)	1.6	—	—	—	—	方頭式
96-62	38-62	玄室内	(6.4)	—	—	—	—	(6.4)	0.8	61と同一個体の可能性有り。
96-63	38-63	玄室内	(9.1)	4.5	1.8	—	—	(4.5)	0.6	方頭式
96-64	36-64	羨道部	(7.9)	4.0	2.1	—	—	(3.9)	0.5	長三角形式
96-65	38-65	玄室内	(8.1)	2.2	1.1	5.3	0.6	(0.2)	0.4	柳葉式

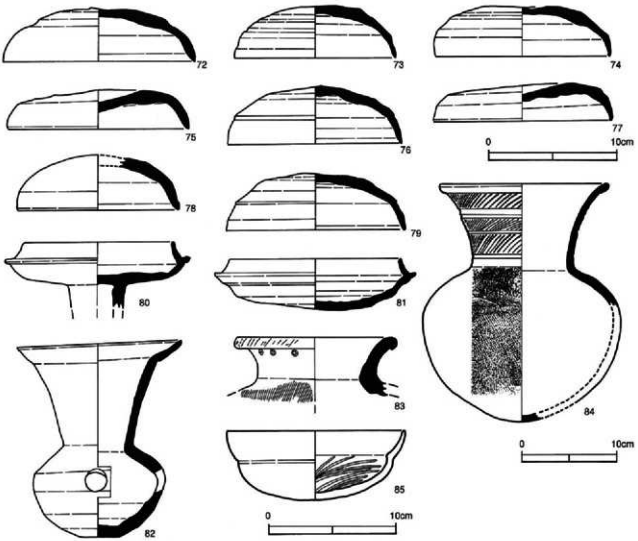
（4）遺物

出土状況　玄室内から、前述したように砂礫層を中心にして、多数の装身具と鉄器類が出土した。装身具は、勾玉1点、切子玉1点と土製及びガラス製小玉で、破片を含めた小玉の総個体数は66個、そのうち完全な個体は、合計58個を数える。出土場所は、北側の地山床面上で15個、砂礫層中から51個である。当初、床面には砂礫が敷いてあった可能性が高く、出土場所も玄室内各所に散らばっていることから、原位置を留めているものは少ないと思われる。また、玄室内から出土した鉄器類も、そのほとんどが砂礫層に含まれていた。その中で、3点ほど両袖石の間の框石の上で検出したが、これについても、砂礫層に載っていた。鉄類は総点数30点で、完全な形を保つものは1点もなく、鉄刀片と針片以外の25点は全て鉄鏃の部品で、そのうち身部は4点のみである。

墓道からも、須恵器片多数と鉄鏃が1点出土したが、鉄鏃を除いて、出土レベルは墓道床面から10㎝前後の高さであり、周囲から流入した可能性もある。一方、南西から西側へと回る周溝部には多量の土器が出土した。これも、墓道出土の土器片と同様に出土レベルが周溝底面より高く、上位からの流れ込みの可能性が高い。さらに、開口部南東側の墳丘上には、墳丘に張り付いた状態で須恵器と土師器を検出した。当古墳群では、他にも開口部側の墳丘上に土器が多量に埋設されている例が多く、当古墳の場合も、状況から見て墳丘祭祀に伴うものと見なしてよいと思われる。

出土遺物

装身具（第95図　図版38）



第97図　11号墳出土土器実測図　（S＝1/3、S＝1/4）

切子玉（1）　1は水晶製で、長さ12.8mm、上径7.7mm、中径10.5mm、下径7.4mm。孔径は上面で1.2mm、下面で3.3mm。玄室内中央部やや南西側の砂礫層上で検出した。

勾玉（2）　2は翡翠製で、色調は淺黄橙色を呈す。玄室内中央玄門側の砂礫層最上部で検出した。長さ23.3mm、径13.6mm。孔径は1.3mmと2.7mmで、片面に穿孔に失敗した痕跡がある。

小玉（3～62）　計測表は第38表に掲げる。

鉄器類（第96図　図版38）

鏃（61～65）　計測表を第39表に掲げる。64が唯一羨道部床面から出土した。

刀子（66）　66を玄室内右袖石近くの砂礫層上で検出した。片関で、茎端部と身部の大部分を欠失する。現存する身幅は、関部で1.8cm、背の厚さ0.5cmを測る。

刀（67）　67は直刀の刀片と思われる。身幅は2.3cm、背幅は0.5cmを測る。玄室内砂礫層の左壁側上層部で検出した。

針（68－71）　68は、断面方形で径は3mmを測る。針先を欠失し、基部も不明である。残存長は2.8cm。69は断面は円形を呈し、径は4.5mmを測る。これも針先をわずかに欠失している。残存長は3.4cm。70は断面は同じく円形で径は3.5mm。針先、基部共に欠失し、残存長は2.6cmを測る。71は断

第40表　11号墳出土土器観察表

掲図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)		手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
97-72 38-72	坏　蓋 須恵器	墳丘上 (開口部東)	口径 器高	15.0 4.5	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
97-73 38-73	坏　蓋 須恵器	墳丘上 (開口部東)	口径 器高	12.6 4.0	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	粗	良好	外 灰色 内 灰色	
97-74 38-74	坏　蓋 須恵器	表道部	口径 器高	13.8 3.8	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	不良	外 灰白色 内 灰色	
97-75 38-75	坏　蓋 須恵器	周溝内 (南西)	口径 器高	14.1 3.0	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	粗	不良	外 灰色 内 灰色	焼きひずみ有り。
97-76 38-76	坏　蓋 須恵器	墳丘上 (開口部東)	口径 器高	12.3 4.5	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
97-77 38-77	坏　蓋 須恵器	表道部	口径 器高	14.2 3.5	外面天井部は、回転ヘラケズリ。内面天井部は、回転ナデ後静止ナデ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	不良	外 灰色 内 灰色	焼きひずみ有り。
97-78 38-78	坏　蓋 須恵器	周溝内 (南西)	口径 器高	12.6 4.3	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	粗	不良	外 灰色 内 灰色	
97-79 38-79	坏　蓋 須恵器	墳丘上 (開口部東)	口径 器高	13.5 4.5	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	密	不良	外 灰色 内 灰色	
97-80	有蓋高坏 須恵器	周溝内 (南西)	口径 受部径	11.8 14.5	回転ナデ。ロクロ右回転。	粗	良好	外 灰白色 内 灰色	
97-81 38-81	坏　身 須恵器	墳丘上 (開口部東)	口径 受部径 器高	13.2 15.7 3.8	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	不良	外 灰白色 内 灰白色	
97-82 38-82	甕 須恵器	周溝内 (南西)	口径 器高 体部最大径	12.9 15.1 10.4	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。 ロクロ右回転。	粗	不良	外 灰白色 内 灰色	
97-83 38-83	甕 須恵器	周溝内 (南西)	口径	12.6	口頸部内外面は、回転ナデ。体部はタタキ後ハケ。頸部に竹状工具による刺突文有り。	密	不良	外 灰白色 内 灰色	
97-84 38-84	広口壺 須恵器	周溝内 (南西)	口径 器高 体部最大径	17.4 25.2 20.7	体部外面は、タタキ後カキメ。口頸部内外面は、回転ナデ。ロクロ右回転。 頸部外面を2条と1条の横線で3段に分け、それぞれ櫛歯状工具により刺文を巡らす。	密	良好	外 灰オリーブ色 内 灰オリーブ色	
97-85 38-85	鉢 土師器	墳丘上 (開口部東)	口径 器高	13.6 6.0	口縁部内外面は、ナデ。他はミガキ。	密	良好	外 赤褐色 内 赤褐色	

面は方形を呈し、径は2mmを測る。唯一針先が残っているが、これも基部は欠失して不明である。残存長は3.9cm。以上の4点は、いずれも玄室内砂礫層中に散らばって出土した。

土器（第97図　図版38）　観察表は、第40表に掲げる。

79は坏蓋。76と同じ器形の特徴を持つが、76に比べて口径が大きく、やや時代が遡るもので、11号墳に伴う坏蓋の中では最も古いタイプである。73の坏蓋は、天井部と体部との境及び口縁端部の段は不明瞭で、口縁端部はやや尖り気味となる。体部から口縁部にかけては内湾気味に直立し、口径は小さい。79とはかなりの時期差を持ち、11号墳に伴う坏蓋では最も時期が新しいものである。81の坏身は、底部は比較的平坦で、緩やかに内傾する体部を持つ。受部は端部が丸く短い。立ち上がりは長く緩やかに外湾する。時期は79よりわずかに下がるであろう。82の甕は、頸部と胴部の接合部が広く、口縁部との境に段を持つ。口縁部はやや内湾しながら開き、口唇部にも浅い段を持つ。穿孔は胴部やや上位にあり、器面には文様等による装飾はいっさい施されていない。

一方、85は土師器の鉢で、開口部東側の墳丘上に、72・73・76・79・81と共に墳丘面に貼り付いた状態で検出した。丸底で、体部中央から屈曲、外反する。口唇部はやや尖る。布留式の器形を踏襲したこのタイプの土師器は、関東地方に類例が広く見られるが、山口県では類例に乏しい。近くでは、福岡県遠賀郡岡垣町や同鞍手郡若宮町から宮田町にかけての後期の群集墳に同タイプのものを求めることができる。（大村）

12. 12号墳

（1）調査前の状況

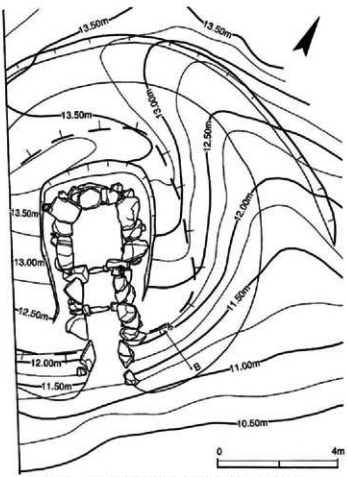
12号墳はⅡ地区の南の端に位置し、標高は12mである。北の墳丘裾部に10号墳、北東に11号墳が隣接する。Ⅱ地区においては、唯一の複室の横穴式石室を持つ古墳で他の３基の古墳と石室の形態、開口方向とも異にする。調査前は、雑木林でわずかな高まりが認められ、墳丘の中央部にわずかなくぼみと崩落した天井石と思われる石材が確認された。

（2）墳丘

墳丘は、墳丘頂部については後世の削平により大部分が消失していたが、墳丘裾部については比較的遺存状況が良好であった。トレンチによる土層観察から、直径10.8mの円墳であったと思われる。また、北に隣接する10号墳との関係は、土層観察から10号墳の周溝を掘り込んで12号墳の周溝を構築しており、10号墳に比べ12号墳の方が後に築造されたことが明らかになった。

古墳の基本的な築造方法は、上位である北側の傾斜を削り出すことにより墳丘のおおまかな形をととのえたと思われる。土層観察から、まず北側斜面を掘削し地山整形を行い、次に、墓坑を掘り込み石室を構築しながら、版築により１次墳丘を築く。最後に、周溝を掘り込み、主にその土砂を盛土として用い墳丘を完成したものと推定される。

周溝は、墳丘の西側が調査区外となるため確認できないが、検出された北側、東側の周溝の形や、斜面を利用して築造している古墳の一般的な例から推測すると、形状は馬蹄形であった可能性が高い。周溝の規模は、幅1.8－2.2m、深さ0.2～0.4mで、断面形は、浅い皿状を示す。



第98図　12号墳墳丘遺存状況図　（S＝1/125）

（3）石室

内部主体は、南東に開口する両袖式の横穴式石室である。玄室、前室の複室構造で、主軸はN30°Wを示す。長方形の玄室に幅の狭い前室がつき、同じ幅の羨道が付設する平面形で、石室の全長6.1mである。石室内には、大量の土砂が流入し、天井石や側壁の石材と思われる巨大な石が散在していた。

墓坑は、上位の北西側を地山整形の後、地山より約1.5m掘り込み、他は古墳築造時の地表面より掘り込んでいる。形状は隅丸方形で、左右とも前門付近で消滅する。

玄室　玄室の平面形はほぼ長方形で、長さ2.0m、幅1.8mである。

奥壁は、床面を約15cm掘り下げて2.0×1.0mの板石を横長に用い、内面をやや内傾させて鏡石としている。

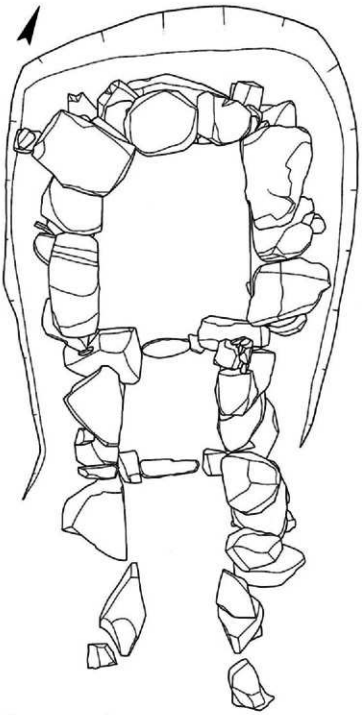
側壁は右壁に2.0×1.0mの板石を、左壁に1.0×0.9m、1.0×0.8mの板石をそれぞれ横長に用い、内面を垂直に立てて腰石としている。

それら腰石の上部にやや扁平な石を小口積みにし、石の間には小石を詰めほぼ垂直に積み上げている。

玄室の残存高は2.1mで、崩落した天井石の状況から、ほぼ構築時の玄室高と同様であると推定される。

床面には敷石が施されており、一部は攪乱を受けて消失しているが、ほぼ全面より検出された。敷石のほとんどは、長径が20cm前後の平たい角石を用いている。

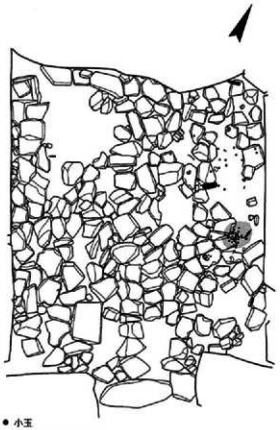
玄門は、左右に約1.0mの石材を縦長に用い袖石とし、幅0.7mの間に2個の石材を並べ框石としている。



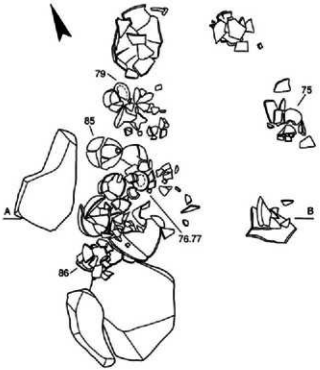
第99図　12号墳石室平面図　（S＝1/40）

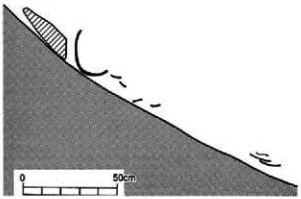
前室　平面形はほぼ方形で、長さ1.4m、幅1.2m、残存高1.0mである。右壁に1.0×0.4m、左壁に0.8×0.4mの石材を横長に用い腰石としている。その上部に同様の石材を積み上げ、前室を構築している。前門は、左右に玄門より小型の石材を縦長に用い袖石とし、幅0.7mの間に1個の石材を置き框石としている。

羨道　羨道は、築造時の地表面にそのまま構築されている。石材の一部は原位置を保っていなかった。石材の積み方も、使用している石材も玄室前室とは違い、大小様々な塊石を積み上げている。

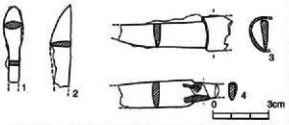


第100図　12号墳石室内遺物出土状況図（S＝3/80）





第101図　12号墳遺物出土状況図　（S＝1/20）



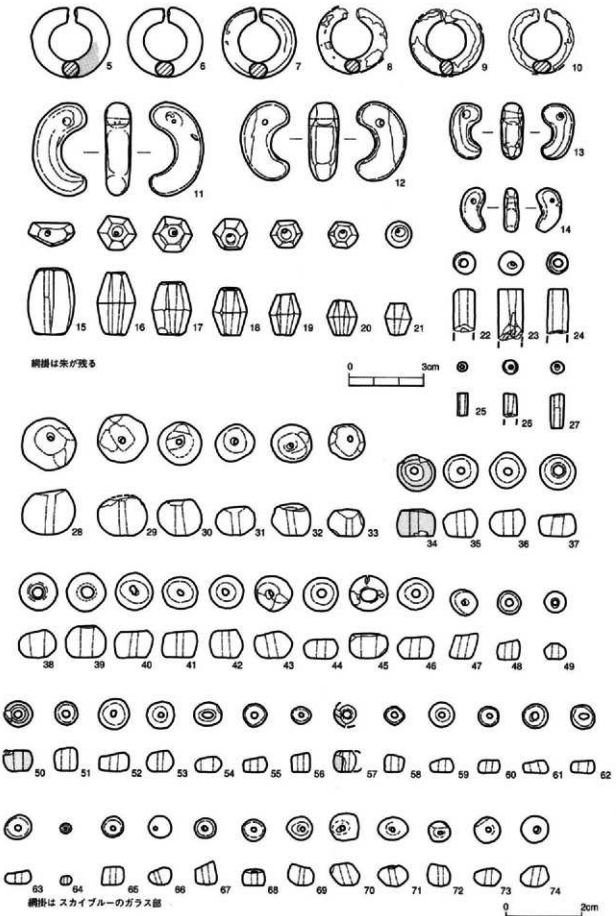
第102図　12号墳出土鉄製品実測図　（S＝1/2）

排水施設　玄室より前室、羨道へと、ほぼ中央部に排水施設を施してあった。玄室内では、敷石が一列に並び、前室には蓋石がおかれ、各框石の下をトンネル状に掘り抜き、羨道部に至る。羨道部は床面をU字形に掘り込み、開口部に向かって傾斜しており、蓋石等は見られなかった。玄室、前室内では、幅20cm、深さ10cm前後で、U字形の断面形を呈す。

（4）遺物

出土状況　玄室内からは、敷石上面より装身具と鉄製品が出土した。そのほとんどは右壁側に集中しており、左壁側からは数点の鉄製品のみが出土した。集中して出土した右壁側でもかなり広く散乱しており、追葬時に既存の副葬品を右壁側に寄せた可能性もある。出土した鉄製品は、鉄鏃、刀子。装身具は、耳環6点、勾玉4点、切子玉7点、管玉6点、丸玉6点、小玉42点である。

羨道端部から土師器の高坏が2点出土した。これらは、床面より数cm高いレベルから出土したことから、追葬時の埋葬儀礼に関するものと考えられる。



第103図　12号墳出土装身具実測図　（S＝2/3、S＝1/1）

第41表　12号墳出土耳環計測表

挿図	図版	外法径（cm） 長径・短径	内法径（cm） 長径・短径	断面径（cm） 長径・短径	突合部（cm） 幅	備　考
102- 5	40- 5	3.08×2.75	1.71×1.49	0.73×0.71	0.26	鋼芯銀張り
102- 6	40- 6	2.99×2.73	1.7 ×1.52	0.76×0.65	0.17	鋼芯銀張り
102- 7	40- 7	2.96×2.8	1.65×1.56	0.75×0.68	0.18	鋼芯銀張り
102- 8	40- 8	2.8 ×2.6	1.6	0.62×0.59	0.33	鋼芯銀張り
102- 9	40- 9	2.96×2.69	1.6 ×1.45	0.64×0.55		
102-10	40-10	2.58×2.57	1.6 ×1.51	0.78×0.57	0.22	

第42表　12号墳出土管玉計測表　　（　）は残存値

挿図	図版	長さ（mm）	直　径（mm）		孔　径（mm）		穿孔	色　調	材　質	備　考
			長径	短径	長径	短径				
102-22	39-22	（1.7）	8.9	(8.7)	3.9	－	不明	濃緑色	ガラス	一部欠損
102-23	39-23	(20.5)	10.0	(9.6)	3.5	(2.8)	片面	濃緑色	碧玉	一部欠損
102-24	39-24	(17.9)	7.9	(8.6)	4.0	(3.6)	不明	空色	ガラス	一部欠損
102-25	39-25	9.3	4.2	4.2	2.3	2.3	片面	濃緑色	碧玉	
102-26	39-26	（9.5）	5.5	－	2.2	－	片面	空色	ガラス	一部欠損
102-27	39-27	14.1	5.3	5.1	2.5	2.5	両面	濃緑色	碧玉	

第43表　12号墳出土小玉類計測表

挿　図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材　質	色　調
102-28	14.2	2.4	12.0	瑪瑙	オレンジ
102-29	13.1	2.2	10.4	瑪瑙	オレンジ
102-30	11.5	2.7	9.4	瑪瑙	オレンジ
102-31	10.1	1.9	7.8	瑪瑙	オレンジ
102-32	10.5	2.0	8.3	瑪瑙	オレンジ
102-33	9.5	1.8	7.1	瑪瑙	オレンジ
102-34	10.1	2.5	7.3	ガラス	別記
102-35	9.1	2.1	7.2	ガラス	コバルトブルー
102-36	9.3	2.5	7.2	ガラス	コバルトブルー
102-37	9.6	3.5	5.8	ガラス	コバルトブルー
102-38	10.1	4.3	7.4	ガラス	コバルトブルー
102-39	10.3	3.5	8.6	ガラス	コバルトブルー
102-40	10.4	2.1	7.4	ガラス	コバルトブルー
102-41	9.5	1.8	7.3	ガラス	コバルトブルー
102-42	9.1	2.1	7.5	ガラス	コバルトブルー
102-43	10.0	2.8	7.2	ガラス	コバルトブルー
102-44	9.3	2.6	5.5	ガラス	コバルトブルー
102-45	10.8	4.3	6.6	ガラス	コバルトブルー
102-46	9.4	2.6	5.9	ガラス	コバルトブルー
102-47	7.4	2.0	7.0	ガラス	コバルトブルー
102-48	6.2	2.0	5.1	ガラス	コバルトブルー
102-49	5.7	2.5	4.1	ガラス	コバルトブルー
102-50	7.4	2.5	5.5	ガラス	別記
102-51	6.0	2.6	6.1	ガラス	コバルトブルー
102-52	8.0	2.2	4.8	ガラス	コバルトブルー
102-53	7.0	1.4	5.4	ガラス	コバルトブルー
102-54	7.1	3.0	4.0	ガラス	コバルトブルー
102-55	6.1	2.0	4.0	ガラス	コバルトブルー
102-56	4.8	1.4	5.3	ガラス	コバルトブルー
102-57	5.9	2.5	5.4	ガラス	別記
102-58	5.1	2.0	4.6	ガラス	コバルトブルー
102-59	6.7	2.0	3.7	ガラス	コバルトブルー
102-60	5.6	1.8	3.5	ガラス	コバルトブルー
102-61	6.8	3.0	3.5	ガラス	コバルトブルー
102-62	6.4	2.7	3.2	ガラス	コバルトブルー
102-63	6.9	1.7	3.6	ガラス	コバルトブルー
102-64	2.8	1.0	2.5	ガラス	コバルトブルー
102-65	5.8	1.5	4.9	土玉	黒褐色
102-66	6.2	1.8	4.6	土玉	黒褐色
102-67	6.0	1.7	6.2	土玉	黒褐色
102-68	6.1	1.8	4.2	土玉	黒褐色
102-69	6.9	1.7	5.9	土玉	黒褐色
102-70	7.8	2.0	6.0	土玉	黒褐色
102-71	8.0	2.1	5.4	土玉	黒褐色
102-72	6.0	1.5	5.5	土玉	黒褐色
102-73	7.2	2.0	4.7	土玉	黒褐色
102-74	7.6	2.0	5.5	土玉	黒褐色
	9.9	2.0	－	ガラス	コバルトブルー

また、開口部の東側の墳丘裾部から、まとまって土器類が出土している。これらの中には、置かれた状態のまま出土したものもあり、古墳築造時、もしくは追葬時の祭祀に関するものと考えられる。出土した土器は、須恵器の壺ないし甕が２点、同じく甕が２点、高坏が２点、提瓶が１点、土師器の脚付き壺が１点、高坏が数点である。

出土遺物

鉄製品（第102図　図版39）

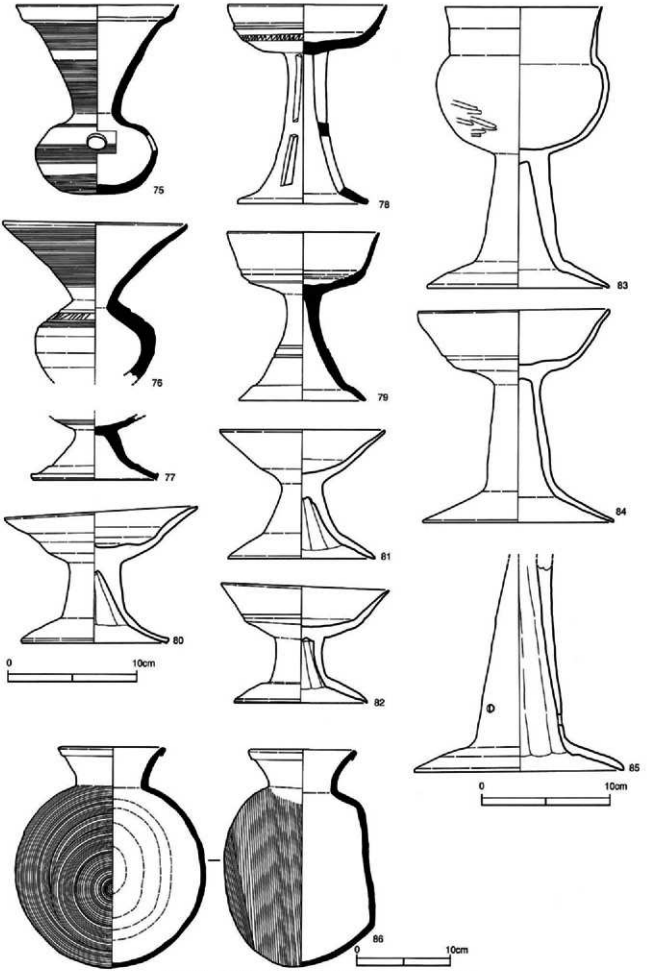
鏃（１・２）１は柳葉式鉄鏃で、残存長4.0cm。２は片刃式鉄鏃で、残存長4.3cmである。

刀子（３・４）３は残存長5.5cm、責金具が残る。４は残存長5.3cm、うち身部長4.0cm、両関で茎に木質が残存する。

装身具（第103図　図版39）

耳環（５～10）５には朱が残存する。計測表は第41表に掲げる。

勾玉（11～14）11は碧玉製で濃緑色。12は翡翠製で緑がかった白色。13は水晶製。14は翡翠製か。色調は青緑色。



第104図　12号墳出土土器実測図　（S＝1/3、S＝1/4）

第44表　12号墳出土土器観察表

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
104-75 40-75	甕 頸恵器	墳丘上 (南東)	口径　12.4 器高　15.0 体部最大径　9.5	頸部外面から体部外面中位までは、回転ナデ後カキメ。体部外面底部は、回転ヘラケズリ。他は、回転ナデ。ロクロ右回転。	粗	不良	外 オリーブ灰色 内 灰白色	
104-76 40-76	甕 頸恵器	墳丘上 (南東)	口径　14.2 器高　(12.2) 体部最大径　9.3	外面は、回転ナデ後カキメ。内面は、回転ナデ。ロクロ右回転。 体部外面上位に、ヘラ状工具による/字文を描す。	密	良好	外 灰色 内 灰白色	合付甕の可能性有り。
104-77	台付甕 頸恵器	墳丘上 (南東)	台端部径　9.6	外面は、カキメ。他は、回転ナデ。	密	良好	外 灰色 内 灰色	76と同一個体の可能性有り。
104-78 40-78	高　坏 頸恵器	墳丘上 (北)	口径　13.0 器高　15.6 脚端部径　10.1	回転ナデ。ロクロ右回転。 坏部下位に波状文。脚部に2段3方向の透かし孔有り。	密	良好	外 灰色 内 灰オリーブ色	
104-79 40-79	高　坏 頸恵器	墳丘上 (南東)	口径　11.6 器高　13.3 脚端部径　9.9	回転ナデ。ロクロ左回転。 坏部下位に1条の沈線を巡らす。脚部に1段2方向の透かし孔有り。	粗	不良	外 暗青灰色 内 暗青灰色	
104-80 40-80	高　坏 土師器	墳丘上 (南東)	口径　15.0 器高　10.3 脚端部径　11.3	脚部内面は、ヘラケズり。外面は、ヘラケズり後ミガキ。脚端部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。	密	不良	外 橙色 内 純赤橙色	
104-81	高　坏 土師器	表道内	口径　13.0 器高　10.1 脚端部径　11.3	脚部内面は、ヘラケズり。外面は、ヘラケズり後ミガキ。脚端部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。	密	良好	外 橙色 内 橙色	
104-82	高　坏 土師器	表道内	口径　10.4 器高　9.1 脚端部径　10.4	脚部内面は、ヘラケズり。外面はヘラケズり後ミガキ。脚端部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。	密	良好	外 暗赤褐色 内 赤橙色	
104-83 40-83	脚付壺 土師器	墳丘上 (南東)	口径　12.8 器高　17.2 体部最大径　13.4 脚端部径　14.1	体部内外面は、ミガキ。脚部内面は、ヘラケズり。外面はケズり後ミガキ。脚端部内面は静止ナデ。外面は静止ナデ後ミガキ。	密	良好	外 橙色 内 橙色	
104-84 40-84	高　坏 土師器	墳丘上 (南東)	口径　14.2 器高　16.8 脚端部径　14.8	脚部内面は、ヘラケズり。脚端部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。 脚部外面に、脚を絞った際の指頭圧痕残る。	密	良好	外 橙色 内 明赤褐色	
104-85 40-85	高　坏 土師器	墳丘上 (南東)	脚端部径　16.5	脚部内面は、ヘラケズり。脚端部内外面は、静止ナデ。他は、ミガキ。 坏部欠損。脚部下位に、3個の穿孔有り。	密	良好	外 赤橙色 内 赤橙色	
104-86 40-86	提　瓶 頸恵器	墳丘上 (南東)	口径　10.6 器高　22.7 体部最大径　20.0	口頸部内外面は、回転ナデ。体部正面は、カキメ。背面は、回転ヘラケズり。内面は、回転ナデ。	密	良好	外 暗オリーブ灰 内 暗オリーブ灰	

切子玉（15～21）15は扁平な六角形。21は整形後丹念に磨かれており、横断面が円形。

管玉（22～27）計測表を第42表に掲げる。

丸玉（28～33）計測表を第43表に掲げる。

小玉（34～74）34、50、57は鉛色のガラスにスカイブルーのガラスを被せた合わせガラスと見られる小玉である。計測表は第43表に掲げる。

土器（第104図　図版40）　観察表は第44表に掲げる。

甕（75、76）75は頸部から口縁部にかけてラッパ状に開き、頸部上部に段を有す。口縁端部は丸い。76は頸部から口縁部にかけて大きくラッパ状に開き、段を有さずそのまま口縁に至る。口縁端部は若干内傾し、丸い。77と同一個体の可能性有り。

高坏（78～82・84・85）　78・79は須恵器。78の坏部は若干内湾しつつ、ほぼまっすぐ伸び、口縁端部は丸い。脚部は下部で大きく外反して丸い端部に至る。79の坏部は若干内湾しつつほぼまっすぐ伸び、やや外反して端部に至る。口縁端部は丸い。

80・81・82・84・85は土師器。80・81・82は低脚で、大きく外反し鋭い口縁端部に至る浅い坏部に、下部で屈曲し大きく開き端部に至る脚を持つ。84・85は長脚で、85には3カ所に穿孔がある。

脚付壺（83）　83は土師器。丸い体部からまっすぐ頸部が立ち上がり、外反しながら鋭く尖る口縁端部に至る。下部で屈曲し大きく開き尖った端部に至る脚を持つ。　（豊島）

13. 小結

（1）古墳の立地について

大浦古墳群は、山口湾に向かい樹枝状に張り出す丘陵上に位置し、一帯の丘陵の最頂部である標高31.8mの地点まで、Ⅰ地区西北端から西側に約80mである。なお、この直線距離で80mの比較的平坦な尾根上、及び最頂部からⅡ地区に続く南東側の直線距離約100mの緩斜面にも、数多くの古墳が存在し、中でも最頂部の1基は露呈する石室の一部から推定して最も時期が遡る可能性を持つ。一方、丘陵の最頂部から西及び北側斜面には古墳の存在を確認できなかったことを勘案すると、古墳群の立地条件として東から南に広がる山口湾を意識していることは明らかである。事実、当古墳群の造営時期には、調査した中で最も標高の低い11号墳（約12m）の位置する丘陵直下まで海が迫っていたと思われ、特に9・10号墳については、墓道は海の方向に延びていたことが推定される。以上のことから、被葬者の性格も、山口湾（海）との繋がりを無視することはできないと考える。

（2）石室の形態

今回調査した12基は、A・竪穴系横口式石室7基（1・2・3・7・9・10・11号墳）、B・単室の両袖式横穴式石室2基（4・5号墳）、C・複室構造の両袖式横穴式石室2基（8・12号墳）、そして横穴式石室と思われるもの1基（6号墳）であり、大別して3類に分類される。Aの石室形態は、北部九州を起源とする『竪穴系横口式石室』の系譜に繋がるものであり、玄室の平面形、羨道部及び墓道の形態等で細分する場合もあるが、当古墳群の場合、墳丘裾部を回り込んで続く深くて長い墓道を持つものを2基（9・11号墳）確認しており、特徴的なものとして特筆できよう。

（3）古墳の築造方法について

石室主軸と等高線の関係について見ると、平行する古墳（1・3・7・9・10・11号墳）、直交する古墳（2・6・8・12号墳）、斜交する古墳（4・5号墳）の3種類があり、個々の古墳の築造方法も、厳密に言えば築造場所の地形と石室形態などにより、微妙な違いがあるのは当然である。しか

第45表　大浦古墳群古墳一覧表　　（　）は残存値　単位はm

号墳	墳丘		内部主体							玄門	備考
	形状	直径	形式	主軸方向	石室長	玄室長	玄室幅	羨道長	羨道幅	玄門幅	閉塞	
1	円墳	13.3	竪穴系横口式	N 3°W	3.4	2.6	1.8	0.8	1.0	0.6	有	石室外祭祀跡
2	円墳	10.6	竪穴系横口式	N71°E	3.2	2.4	1.4	0.8	0.8	0.6	有	
3	円墳	10.3	竪穴系横口式	N45°E	4.6	2.7	1.9	1.9	0.9	0.9	－	石室外祭祀跡
4	円墳	15.8	横穴式	N 5°W	(6.0)	3.4	2.2	(2.6)	1.2	0.8	有	
5	円墳	11.3	横穴式	N 1°E	(4.4)	2.2	1.8	(2.2)	1.3	0.8	有	敷石
6	円墳？	－	横穴式(？)	N46°W	(1.3)	(1.3)	1.8	－	－	－	－	
7	円墳	8.3	竪穴系横口式	N41°E	3.5	2.3	1.5	1.2	0.7	0.5	有	
8	円墳	10.6	横穴式(複室)	N27°W	6.4	2.1	2.1	2.5	1.1	1.1	－	前室長1.8 幅1.6 排水施設
9	円墳	9.4	竪穴系横口式	N26°E	3.6	2.6	1.9	1.0	0.9	0.7	有	石室外祭祀
10	円墳	10.6	竪穴系横口式	N36°E	3.6	2.6	1.8	1.0	0.8	0.6	有	
11	円墳	9.7	竪穴系横口式	N28°E	3.6	2.4	1.8	1.2	1.1	0.6	有	石室外祭祀
12	円墳	10.8	横穴式(複室)	N30°W	6.1	2.0	1.8	2.7	1.2	0.7	有	前室長1.4 幅1.2 敷石 排水施設

しながら、当古墳群においては、全般的な手順としては以下の方法で大差はないと思われる。すなわち、①斜面上位側は地山整形を行い、他は古墳築造時の地表面の地形を利用しながら墳丘構築の基盤平坦面を造る。②墓坑を掘る。斜面上位側は地山面から掘られる場合もあるが、下位側は全て築造時の地表面から掘られている。墓坑の深さは、竪穴系横口式石室で特に深く、中でも、10・11号墳の場合、墓坑壁が基底面から上部に向かってややオーバーハングする壁面も見られる。この場合、石室の石は壁面に接して据えられ、墓坑壁が壁体の持ち送りを含めた石室壁面の補強として利用されたことが窺える。③石室の壁体を構築する。壁体は、それぞれの段階ごとに横目地を意識しながら積み上げ、同時に、各段階ごとに裏込めを兼ねながら版築状の盛土で石室を補強する。なお、版築の盛土は、赤褐色系の粘質土（地山土）と築造時の表面土と思われる褐色系の砂質土が主に使われている。④天井石を架構し、さらに版築による盛土を行い、墳丘の形を造る。⑤斜面上位側に馬蹄形の周溝を掘り、下位側は墳丘裾部を削り出し、その土で最終封土を盛る。特に竪穴系横口式石室の場合、墓坑が深く実際の墳丘は低いため、墳丘裾部を際立たせることにより見かけの高さを確保したものと思われる。⑥墓道を掘る。以上の手順で築造した後、遺体を玄室内に安置し、最後に閉塞を行う。なお、当古墳群では、3号墳と複室構造の横穴式石室以外全て玄門閉塞であった。

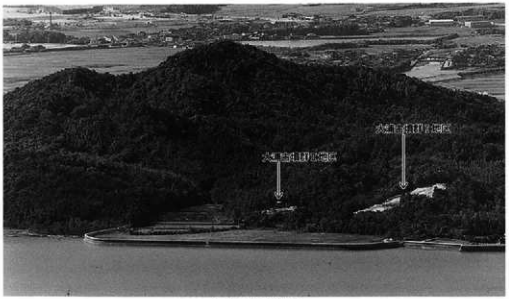
（4）古墳の築造年代について

出土土器と石室形態をもとに、築造時期を推定する。まずⅠ地区は、6世紀前半代の土器を伴った2・3号墳と、同時期の廓を出土した7号墳の、3基の竪穴系横口式石室が時期的に最も先行する。その場合、石室・墓道両形態に古い要素を持つ7号墳が最も前出し、続いて2号墳さらに3号墳が続くものと思われる。6世紀後半代に入ると、2号墳を切った1号墳の竪穴系横口式石室が築造され、続いて4号墳の単室横穴式石室、その後が同タイプ小型の5号墳である。この2基の単室横穴式石室に続くのが、残存する石室形態と古墳群全体の位置から見て6号墳であり、最も丘陵下位に位置する8号墳の複室横穴式石室が最後出し、6世紀末代の築造であろう。従って、Ⅰ地区は7号墳⇒2号墳⇒3号墳⇒1号墳⇒4号墳⇒5号墳⇒6号墳⇒8号墳という順序で築造され、古墳群全体の存続時期は、6世紀前半から6世紀末頃で、追葬時期を考慮しても7世紀前半には終結したものと思われる。

一方、Ⅱ地区で最も先行するのは竪穴系横口式石室の9・11号墳で、築造時期は6世紀前半代と推定され、やや遅れて同じ石室形態の10号墳が続き、最後が複室構造の12号墳で、時期は6世紀末頃と思われる。つまり、Ⅰ地区、Ⅱ地区とも古墳の存続時期は6世紀前半～末頃までと、ほぼ同時期となるが、同じ竪穴系横口石室でも墓道形態から見ると、玄門に向かって短く傾斜する墓道を持つⅠ地区の一群の方が、北部九州に繋がるやや古い要素を持っていることだけは付け加えておきたい。

（5）まとめ

大浦古墳群は、山口県内で初めて竪穴系横口式石室・単室の横穴式石室・複室の横穴式石室という3つの異なる石室形態を持つ後期古墳が、時期的な変遷をたどりながら同じ丘陵上で築造されたことを確認できたという点と、共に九州に起源を持つ竪穴系横口式石室と複室構造の両袖式横穴式石室が山口湾岸で展開されていたことを確認した点で、大きな意味を持っている。今後、時期的に先行すると思われる今回調査された上位部分での資料を付け加えることにより、山口南部地域における群集墳の形成と展開及び被葬者の性格が、なおいっそう明らかにされることが期待される。　　（大村）



大浦古墳群遠景

大浦古墳群全景

大浦古墳群Ⅰ地区全景

1 号墳調査前

1 号墳全景

1 号墳墳丘

1 号墳西側周溝部遺物出土状況①

1 号墳西側周溝部遺物出土状況②

1 号墳玄門閉塞

1 号墳玄門閉塞除去後

1 号墳石室完掘

2 号墳調査前

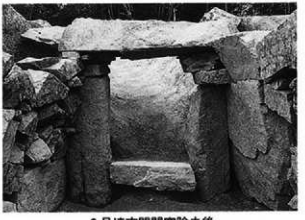
2 号墳全景

2 号墳墳丘

2 号墳西側周溝部遺物出土状況

2 号墳玄室内管玉出土状況

2 号墳玄門閉塞



2 号墳玄門閉塞除去後

2 号墳石室完掘